
影狩り？

阿万之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

影狩り？

【Nコード】

N2047X

【作者名】

阿万之

【あらすじ】

〈影〉という存在が跋扈し、それらに悩まされている日本。そんな彼ら〈影〉を倒せる特殊能力を持つ人間は影狩りと呼ばれる。戦闘集団との争いも終結し、不穏な気配は減じたかに思えた。しかし、仮面を着けた者たちが夜を跋扈し始める。再び能力者同士の争いが始まりつつあった。

一章 血染めの遊乃 一話（前書き）

二部になります。影狩りの続きです

一章 血染めの遊乃 一話

ああ、くそつ。今日も駄目だった。湯淺清輝は舌打ちする。今日こそは彼女、遊乃の前でいい格好をしたかった。守られるよりも、守る立場になってみたかった。

無理もないといつも通り自分を慰める。彼女は特別。それに彼女だけではない。周りにいる人間はみんな自分より強い。今のままでいるならば、差は絶望的だ。

なんとかしないといけない。最近は一人で夜の街をうろつくこともある。そういった経験を重ねていかないと、周りの連中には追いつけない、追い越せない。

同じレベルに立つ。それからだろう。遊乃に告白するとすれば。

今日も今日とて、清輝の辛酸の日々が始まる。

自警団とは影狩りの支部が極めて少ない場所に特別に設けられた、能力者のみが入ることのできる、影狩りよりも緩い組織、といったものだ。しかし給料は支給され、影狩りと遜色のない金を貰うことができる。この組織の創始者である相良哲平は影狩りとして常に若輩者を率いてきた、カリスマのある老爺だった。今は現役を引退し、影狩りにも関与せず趣味である盆栽とスキーそれに鉄道模型に夢中だという。

自警団の仕事は影狩りと似ている。ほとんど一緒といってもいいかもしれない。特別職国家公務員である影狩りは国から金を支給されるが、彼らは街から金を付与されてなりたっている。影狩りほど規律には縛られず、好き勝手できるところもあるというものだ。気楽にやれる仕事ではないが、能力さえ高ければ誰でも加入できる。人の増員はあまり行っておらず、人の出入りがそう頻繁ではないようだ。しかし最近、そのスタイルも変化しつつある。

金須支部からは北東に位置するこの八重田町^{やえた}自警団も、三ヶ月後

に人員を五人増強するという予定だった。最近では影狩りも増加しているが、それだけではカバーできない地区もあるのだ。車の行きづらい場所にある集落や、影狩りが嫌う住宅地などには率先して自警団が赴く。しかし自警団はあくまでも街の自警団。基本的には自分の街を守るのが任務だ。隣町に派遣されることも多々あるのだが。

八重田自警団団長、的場博嗣^{ひろつぐ}。屈強な体を持つ男で影狩りの頃は巨人というあだ名で知られていた。年齢四十。身長二百三センチにして体重百二十キロの巨漢だ。そして影狩りを十年以上していたベテランでもある。訓練された彼は普通の人間が束になっても敵わないし、そして能力を使うときには大抵の能力者が群れをなしても敵わない。そんな男である。

副団長の矢追充^{みつる}は団長の的場とは打って変わって細身の男である。身長は百八十五センチと比較的高めながら遙かそれ以上の高さを持つ的場と比べると小さく見える。横幅も大木と竹のように違う。だが彼、矢追充は影狩り経験こそないものの、元影狩りであるところある老人に鍛えられ、能力の高い男である。年齢は三十二で、今だ独身で女の影がない。顔が普通だがどこか鈍感そうに見え、実際朴念仁であり男としての色気を感じない。自警団にいる女たちの評価の総合はそうだった。

その次に西城遊乃。彼女のポジションは切り込み隊長のようなもので、現場では常に戦いの主役であり続ける存在である。天才的な素質と激しい戦い方の彼女は、自警団の中でもっとも恐ろしいと思われる存在である。〈猛撃〉という異名を持つ。そんな彼女本人はそんなことを何も考えず、自警団を己の天職と日々〈影〉との戦いに明け暮れていた。

一章 二話

「――で、今日は御門君はこないと」

自警団の一人である竹本真央が記録を付ける。時刻は六時。〈影〉がすでに活動を開始している時刻だった。

自警団の建物は影狩り支部と比べて明らかに小さく、一階建てだった。その内部で団員が集まっている。

「鈴原さんもこれないって」

携帯電話を下げ、西城遊乃が言う。

「ふうん。集まりわるいね。本職よりも稼げるっていうのに」

「デートなんだって」

「あっそ」

西城遊乃は少し不満げな様子の真央を見てくすりと笑う。ゆったりとした茶髪にあどけない童顔、大きな瞳を持つ真央はこの団のお母さんのような存在だ。まだ年は二十二歳で、遊乃よりも一つ年上なだけだが。

「今日も遊乃には頑張って貰わないとな」

遊乃の肩を叩く者、神田幸司。影狩りと自警団を兼ねる二十七歳の男。兼ねているためか自警団の参加率はあまり高くないが、いるときには現役影狩りとしてそれなりの活躍をする。

湯浅清輝が到着する。彼は大学生で、授業が終わればすぐにここにくる。参加率が高い。二十一歳の彼は知識と〈影〉との戦いに飢えた若人だ。〈影〉との戦いも二年ほど続けているが、最初はお荷物だった彼も今では隊でもそれなりの評価を得ている。もっとも、実力を見れば隊の中ではまだ下の部類なのだが、この自警団は全体的に一人一人のレベルまきなが高かった。

二十三歳の青田真樹まきな柎はこの中では唯一の〈闇使い〉だ。全国で五十万人いる特殊能力者の中でも三百人ほどこしか存在しない〈闇使い〉の中では彼女は下の部類だ、それでもその称号を持つだけで平

均的な能力者の中では抜きんできているということになる。日本の暗部の中で彼女たちは活動し、〈影〉も人も問わず様々なものを葬ってきた。陰陽師から派生した衆派の末裔とされている。

「遅いですね」清輝が真樹椰に言う。

「何いつてるの。あたしは忙しいの」

「俺だって」

「あたしはね、家事とかやってるんだから」

「俺だって一人暮らしです。パンツだって自分で洗ってるんだ」

「はいはい、どっちも遅いです。二人ともそんなに気が合うなら今日の帰りにホテルでも行ったらどう？」

割って入ったのは笹本寧々^{ねね}。二十八歳の彼女は妖艶な雰囲気的美女で、この中若い女性陣の中では年上の部類なのだが、一番色気があり、どこか水商売風にも見えた。

「揃ったようなら出発しよう」

団長の的場が声を発した。今日のメンツは以上で、総勢七人だ。

真央は非戦闘員なので戦いには参加せず、見回りは六人で行われる。

「副団長最近休み多いですね」出欠の確認表を見ながら輝彦は呟いた。

「あの人は鬱病だからな」神田幸司が言った。

団員は二手に分かれ、三人で構成される。振り分けはAチームに団長の的場、寧々、輝彦。Bチームに遊乃、真樹椰、幸司。この六人で八重田町を徘徊することになる。Aチームは北側、Bチームは南側を。八重田には影狩りの支部がないので、自警団が頼りだった。自警団の服は自由だ。だから大抵のものがジャージのような軽装だ。遊乃は一際長く艶やかな後ろ髪を紐で束ねる。それでも一つの長い房は戦闘中邪魔のように思える。彼女はもしこれが戦いの際に邪魔をするようなら素早く両断する覚悟だった。

八重田町は北に商店街が多く、国道周辺は比較的賑わっている。その闇で〈影〉がうろついている。南は山が多く、麓の集落周辺に〈影〉が出没する。

〈猛撃〉の遊乃は他の二人を率いるように歩く。稀少であり、強力な〈闇使い〉と現役影狩りを従えるように進む彼女は自分の強さに絶対の自信があるようだ。

すぐに、〈影〉の気配を感じる。近い。住宅地の、軒の上に彼らは立っていた。まるでガーゴイルのような出で立ちの〈影〉は、いざ戦闘になるとたたんでいる、翼長三メートルにも及ぶ長い翼を伸ばし空を飛ぶ。

空を飛ぶタイプの〈影〉は遊乃がもっとも苦手としているものだ。彼女としては、一気に襲ってくる〈影〉を逆に返り討ちにするのが一番気持ちのいい戦法であり、策を弄する〈影〉は苦手で、遠距離からの攻撃を可能とする〈影〉も好きではなかった。

とはいえ、やるしかない。幸いこちらには遠近問題なしの優秀な仲間がいる。

「真樹ちゃん、道路側にたたき落とせる？」

「いいよ」

真樹椰はあっさりと了承し、手の平から黒い球体状のものを作りだし、それを飛ばした。それはガーゴイルめいた〈影〉の背後に回り、それから〈影〉の背に強くぶつかった。

〈影〉が慌てて翼を広げて空を飛ぶが、重力圧によって地面に叩き付けられる。

遊乃は素早く動いた。〈影〉が再び空を飛ぶ前に飛びかかり、刀で両断した。〈影〉は消滅する。

「一丁上がり」幸司が言った。

「まあ、幸司さんの出番はまだあると思うよ」真樹椰が慰める。

住宅地の終わり、森林が左右に鬱蒼と立ち並ぶ道を進む。木々から〈影〉がでてくる危険な場所だ。歩くこと数分で、〈影〉が木々の間から現れた。カマキリだ。ありふれた〈影〉だが、何人もその手の鎌で殺している油断のならない相手だ。

遊乃は相手の鎌が振り終わる前に強烈な蹴りを見舞っていた。カマキリは吹き飛び、木に当たるとそのまま動かなくなった。止めに

刀で刺すと〈影〉は消滅した。

「絶好調だね」真樹椰が言う。

森を抜けると山へ上る細い林道がある。そこには向かわず、左手にある車道へ。坂道を下り、それから再び住宅地へと向かうのだ。人が密集し、それでいて静かな場所である住宅地。〈影〉は常に哀れな生け贄を求めている。夜に外に出るような自殺行為を行う者はほとんどいないので、犠牲者も少ないはずなのだが、〈影〉は狡猾だ。人を外に誘き出すこともする。どういうからくりか、外は安全だと家の中の人間を惑わすようなことができるようだ。幻惑の術を扱える人間もいるのだ。影狩りのような能力者と同等の能力を扱える〈影〉の中にはそういった存在もいるようだ。

そういう力を持っていると思われる〈影〉の一体が目の前にいる。〈影〉の中でも上位クラスで相手にするには些か骨が折れる。見たところは歳老けた老婆が四つん這いになって歩いているようにも見える。四本足の蜘蛛に見えなくもない。土蜘蛛のように大きくはないが、小さくもない。〈影〉らしく、不定形な姿が恐れを誘う。この〈影〉の名を黒蠍という。

「俺に任せてくれ……といたいところだが、遊乃、挟み撃ちにしよう」

「オッケー。あいつは強いから、油断しちゃ駄目。真樹はこっちが合図したらあいつを直接攻撃して」

幸司は民家の塀に飛び乗り、さらに大きく跳躍して黒蠍を飛び越え、背後を取った。

遊乃が真樹椰の攻撃範囲には入らずに敵に近付き、至近距離で衝撃波を飛ばした。

黒蠍は全く反応しない。大した効き目がないのは黒蠍が亀が甲羅に入るかのように防御態勢を取っているからだ。全ての力を防壁に注いでいる。

「面倒な相手」真樹椰が舌打ちする。

遊乃は刀を振り下ろし、相手を突いたが、刀は浅くしか入らない。

黒蠍が動いた。その四本の足を伸ばし、一つ一つの足から衝撃砲を飛ばした。

遊乃は素早く相手の攻撃を躲す。幸司は躲しきれなかったが防壁で防御した。威力のある衝撃波で、幸司は背中から倒れる。

遊乃は幸司がすぐ起き上がると判断する。真樹椰に手で合図を送ると真樹那は間髪入れずに黒い球体を飛ばす。球体は途中で形を崩し、尾の長い鳥のようなものになる。黒蠍にそれが当たると、黒蠍は吹き飛び、塀に叩き付けられた。しかし叩き付けられる直前に影移動したので大したダメージにもならない。

おそらく当たったところで問題ないのだろう。防壁で完全に防御するし、本来の硬度も亀の甲羅なみだ。

遊乃は相手を強敵と感じた。ランクAの難敵。なら、ここで確実に倒しておきたい。〈影〉は強いものの周囲に群がる傾向があり、拙いが連携のようなものを取る。同じ種類でなくともそうなのだ。大物はおそらく指揮あるいはカリスマがあるのだ。倒せば周囲の〈影〉の士気がある程度低下させることができる。

一章 三話

遊乃は長い足によって吹き飛ばされ、彼女自身も塀に背中をぶつける。だがダメージは塀のほうが大きいかもしれない。遊乃自身の防壁は自警団随一だった。

気を集中させる。一気に決める。相手が完全に防御をしているところを狙っても無駄だが、戦闘のセオリーである相手の攻撃の際の一瞬の隙を突くということをやればいいのだ。

幸司が起き上がったが、彼は背後の敵に気付いて交戦し始めた。影犬だ。それも相当大きい。

真樹柎にはこちらと幸司両方のフォローをしてもらう。真樹柎もすでに了承しているようで、黒き鳥が黒蠍と影犬に向かって飛んでいく。黒い鳥は一分ほどで消えるが、消える前には敵に向かってまるで生きてるかのような動きで執拗に攻撃を加えるし、その間に真樹柎は力の続く限り新たな黒い鳥を作れる。〈闇使い〉の鬱陶しいところだが、味方だと頼もしい。すでに二体、三体の黒き鳥が〈影〉のほうへ向かっている。

黒蠍は周囲に衝撃波を放ち、鳥を消滅させる。

遊乃はそのチャンスを逃さず、黒蠍に思い切り蹴りを入れる。身長百七十センチにして足長の彼女の？力？を込めた蹴りは、そこらにある塀など簡単に崩すことのできる破壊力を秘めている。黒蠍は動かなかった。が、完全に防壁を崩した。

遊乃は刀で一気に突こうとしたが、黒蠍は四つの足全てで衝撃砲を放ってきた。だが遊乃は全てをガードできた。強力な衝撃だが、遊乃も衝撃波を加えて相殺させる。

相手の四本の足が遊乃に伸びたが、真樹柎の黒い鳥の攻撃が当たり、失速する。その刹那、遊乃は黒蠍の頭部と思われる老婆じみた、よくわからない箇所を刀を貫通させていた。

黒蠍は死にかけているゴキブリのように足をばたつかせると、や

がて動かなくなり、それから完全なるガス体となり、霧散した。

刀をしまう。幸司のほうを見る。影犬相手に苦戦している様子だ。影犬の歳老けたもののようで、普通のより一際大きい。幸司と同じほどの高さがある犬なんて、悪夢でしかない。真樹椰の放った技も周囲を飛び交い絶えず攻撃を加えているが、影犬の防壁もなかなかのようだ。

遊乃は加勢することにした。幸司も相当焦っている。大きな牙に恐れをなしている様子だ。防壁がなくなれば本当にやられてしまう。渾身の蹴り。相手は吹き飛ぶ。そして……起き上がった。

「お強い」幸司がふらついている。

「相当体力疲弊したみたいだね。退がってて」

幸司は何も言わずに後退したが、プライドが傷ついた様子だった。真樹椰が肩を叩いて慰めている。

影犬は再び襲いかかってきたが、遊乃の衝撃波の一撃でまた吹き飛ばされた。

影犬は起き上がったが、相当な痛みに耐えているように見えた。そして、影犬は逃げようとした。

遊乃は衝撃砲を放った。影犬に当たり、影犬は倒れ、今度こそ死んだようだ。

「幸司さん、まだいけるの？」

「大丈夫だ……といたいところだが、まず休もう」

しばし休憩を取る。遊乃は端末を取り出す。〈影〉の被害がもっとも多いこの周辺で休むというのは、少し難しいのではないだろうか。

「まずい……囲まれ出してる」

真樹椰も気付いたようだ。

「危険だね。一旦引き返そう。今日はこれまでだよ」

「わるいな、俺のせいだ」

「どのみちこの数じゃ逃げるしかないし」

遊乃は周囲の気配を伺う。そのまま引き返すしかないだろう。悔

しいが、三人だけでどうできる数ではない。異常なほど〈影〉が密集している。

遊乃はメールをした。ここで動くよりも、応援を待ったほうがいいかもしれない。

応援はすぐに来た。〈影〉たちが姿を見せ始めたとき、一台の黒い特殊装甲車が現れた。それはいざというときの助っ人要因である黒田武人たけひとのジャガーだ。ドアが開き、三人はすぐに車の中に入る。

〈影〉は民家の中には入らない。だが走行車を襲撃することはある。

「急いでね」遊乃が言う。

「おうよ」三十六歳の武人は遊乃に〈影〉との戦いにおける戦闘訓練をした者である。彼自身影狩りだったが、自警団の補佐として活躍している。昼間は掃除夫のバイトをしている。独身なのだが、家は二階建ての一軒家を所有している。

黒塗りのベントは一気に加速し、〈影〉たちの間を抜ける。ボンネットに一体の〈影〉が取り付く。手に鋭利な刃物を持ったような人型の〈影〉。実際はそういった形状の手なのだが。頭部は蠅の頭に似ていて、ストロー状の口吻の先は鋭く、鋭く刺さり、強い吸引で人の内部の有機物を吸るといって上げつないことをする。

窓を開け、遊乃が衝撃波を飛ばすと〈影〉は吹き飛ぶ。

そのまま、車は加速して自警団の詰め所に戻っていった

一章 四話

詰め所に全員が集まる。

「――まあ、三人はやはり危険だ。住宅地で囲まれて全滅したって話はよくきく」

厳めしい顔をして的場博嗣が言った。

「人員増加の話もあるでしょう」幸司が言う。

「そうだな。我々は影狩りのプロではあるけど、影狩りそのものではない。幸いまだ死者はでていないが、これから先こういうことでは心許ない。優秀な人材がきてくれないと。一つのチームで四人は欲しい」

「最近、〈影〉がまた増えてるって話です。今回ののもそれが原因では？」寧々が言う。

「そうかもな。どういうわけか〈影〉の遭遇率が最近異常に上がっている」

遊乃は団員の話聞きながら、自分がもっと上手く行動できていれば……と悔しがっている。〈影〉の気配を察知するのは誰よりも得意なのだ。もう少し気を配っていれば〈影〉の数が多すぎるということに気付いただろう。

影狩りのプロではあるが、本家の影狩りと比べると見劣りする。そんなふうに思われるのが遊乃にとっては最大の屈辱だった。

話は終わった。それぞれが自分たちの家に帰って行き、遊乃と清輝だけが残っていた。

「テル、帰らないの？」

「ああ……帰るよ。遊乃、ちょっと今日で自分を責めてるんじゃないかって、気になってさ」

清輝は少しはにかみながら言うが、自分自身の思いを込めた口調だった。

遊乃は微笑む。「心配してくれてありがと。でも大丈夫。帰ろうよ」

駐車場には遊乃の二人の車だけが置いてある。

「じゃあ明日ね。くるでしょ？」

「行くよ。またな」

去っていく後ろ姿に清輝は情を駆られるが、そのまま黙って車に乗りこむ。車に乗り込む前に彼女は髪の新をほどき、長い豊かな髪を肩にかける。

清輝はどちらかという髪を束ねた遊乃のほうが好きだった。昔は束ねた髪を紐で一番端までクロス状にし、綺麗にまとめていた。あれは時間がかかるのだろう。最近はやっていないが、あれを清輝は高く評価していた。

忘れもしない。彼女と一緒に最初に影狩りをやったときのことを。清輝は能力者だが影狩りに入る気もなく、それなりの企業に就職したいとそこそこの大学に通う一般人を気取っていた。自警団に誘われたのはこの八重田町で能力を持つ若者だったからだ。興味本位だったが訓練はきつく、高校の頃にやっていた基礎訓練もさほど積極的に行ってこなかった清輝にはきつい試練だった。

それでも自警団に入り、二年も続けてこれたのは遊乃がいたおかげだ。

初の実戦は遊乃と的場と一緒に。当時はまさか十九かそこの小娘が的場以上の強さを持つなんて思いもしなかった。〈影〉や能力者なんていう存在がいるうえに、戦いにおいて男を上回る女。漫画や映画の世界だ。

だが遊乃は実際強かった。影犬三匹——厄介な〈影〉相手に、たったの一人で勝ってしまった。

遊乃の足技が強かった。あの長い脚から繰り出される蹴り。吹き飛ぶ〈影〉。戦いの後で勝利の余韻に浸る彼女の美しい顔。自信に満ちた目、うっすらとした唇。束ねた髪を揺らし、彼女は輝いて見えた。

それからは彼女に少しでも認めて貰いたいと必死に努力し、その甲斐あってか足を引っ張ることはなくなった。だが成長してしまうのは、遊乃は別格だということ。あの若さであの強さは普通ではないとみんな口を揃えている。

〈猛撃〉の遊乃。異名をつけられるということはそれだけの實力があるということ。清輝はとことん彼女についていくつもりだった。できれば彼女を守る存在になりたいが、影狩りにおいては難しうだった。

遊乃は一人でアパートで生活している。色々あって、両親はいなかった。今日は竹本真央と一緒にいた。彼女とは自警団以外でもよく遊ぶ。親友の一人だ。

「それで遊乃、最近御門君とは会えてるの？」

「御門君とは自警団で会ってるじゃん」

「勿論プライベートでのつもりだったんだけど」

御門健太。自警団の仲間で少しひ弱そうな見た目の薄い茶髪の青年。二十二歳で大学を卒業したばかり。実力は最近伸びてきている輝彦と同じ程度。そして一時期遊乃が意識していたと噂がある相手だった。

「あのさあ、御門君とはなんでもないんだけど」

「わかってるよ。あれはただの女好きのナンパ野郎だもんね。大体、遊乃なんて〈影〉と付き合えばいいのについて思うほど〈影〉しか興味ないのに」

「言い過ぎ？」

「悔しかったら男作ればいいのに」

「ふん。真央」

真央も男はいないが、最近別れたばかりなので遊乃はそこには触れないでおく。

コーヒーを飲んで落ち着く。

「今日はどこ行こうか？」真央が聞いた。

「海！」

即決する。真央のピンクのジャガーはオープンカーだった。二人ともサングラスを掛けて、海岸沿いの車道を走る。潮の匂いがした。二人は浜辺に着くと下に付けていた水着になり、パラソルと椅子を設置すると海へ駆けだした。見る限り、彼女たちは恋人はいないがそれなりに楽しくやっている普通の若い女二人に見えた。

一章 五話

〈闇月〉の伊藤司は夜の闇に紛れて動いていた。服は上下とも黒く、腰には刀が修められている。昔は脇差しと長い刀を二本、左右に指していたが今は一本で、他に小さな拳銃を一丁。そして彼は一人だった。

伊藤は四年前に影狩りを辞めているが、今は村谷瀧太郎の補佐という仕事をしている。補佐というが、実際はほとんど自由に行動することができ、たまに頼まれる用事を淡々とこなすだけだった。現役の影狩りでも手に負えない〈影〉などが現れた場合、伊藤の出番となる。今のところ負けはない。今は三十歳になった。彼の行動は他の影狩りには謎で、女にはさほど興味が無いのだと思われるが実際には子を孕ませた女がいた。しかし伊藤は家庭に落ち着く性分ではなく、彼女のことは高級マンションと月々の仕送り以外は放置している。たまに会いに行くと、恨めしそうな顔で迎えられる。だがまだ愛されているのがわかるし、伊藤も彼女のことを少なからず愛していた。娘はもう四歳。すすくと成長している。彼女さえよければ妹か弟を生むのもいいと思っている。自分が世話を手伝う気はさらさらなかった。

彼は今、寂れた住宅街の四つ辻にいる。〈影〉の頻繁に出現する場所で、愛想をつきて出て行った住民も多く、家は無人が目立ち明かりがなく暗く、静かで不気味だった。

〈影〉の気配に混じって、伊藤は嫌な感覚を覚えた。〈影〉と共に行動する人間が最近影狩りの中で問題になっているという。影狩りの連中はおそらく、国衛会とファントムとの戦いが終わって組織間での争いは終結したと考えているかもしれない。しかし、伊藤は知っている。組織は内部から浸食されている。ファントムや国衛会などは隠れ蓑であり、矛先を向けるいいカモでしかない。

〈影〉が踊るかかる。伊藤は得意の足技で〈影〉を蹴り上げる。

それから高く跳躍する。影狩りの連中は“力”を使用して高く飛べるが、伊藤の跳躍力は民家より高く上がる。それで、上に飛んでいる飛行型の〈影〉を両断してしまう。

まずは一匹。降りると伊藤はそのまま蹴り上げた〈影〉を両断。二匹。

三匹の妖猫は厄介だ。影犬より一回り小さいが、俊敏だし、頭がいい。

妖猫の一匹が躍りかかってくる。伊藤はすぐに匹だとわかる。一匹を相手取る隙について二匹が背後と真横から襲いかかってくる。

しかし伊藤は一匹を衝撃波で吹き飛ばすと次に横から攻めてきた妖猫を蹴り飛ばし、背後を狙った猫を両断した。

衝撃波を食らった相手は再び襲いかかってくると思ったが、距離が近かったためか思いの外威力が強かったらしい。敵は消滅した。

残りはたわいもない白尾の集団だ。しかし、おかしい。白尾は民家があるところを好まない。彼らは人里のある山に生息する。

影使いと呼ばれる者のせいだろうと伊藤は断定した。その存在が、姿を現した。英国紳士めいた山高帽を被ったコート姿の男だ。今の時期を考えるととても耐えられる服装とは思えない。伊藤はそのことに恐怖を覚えた。暑くないのだろうか。

「こんにちは。〈闇月〉の……伊藤さん」

男はしゃがれた声で言った。帽子が取れ、爽やかな中年の顔が露わになる。顔はどことなく昔のテレビドラマの刑事コロンボの主役コロンボに似てる。

「日本語の使い方がおかしいな。今の時間ならこんばんはというべきだ」

中年は快活に笑った。

「失礼。我々にとってはこちらのほうがより正しい挨拶だと思ったもので」

「夜族か」

「察しがいいですなあ」

相手の話など聞く気はない。伊藤は動いた。一瞬だった。一秒と立たずに伊藤は男の背後にいた。しかし伊藤は顔をしかめている。男の肩に峰打ちを打ち込んだつもりだが、手応えが全くなかった。「さすがは〈闇月〉。あの方が懸念するだけある。今の私は幻影。私はね、用心深いのです。影狩りもそろそろ影を操る者達のことを感づいてきているでしょう。仲間の一人は影狩りに殺されてしまった。大してスキルのない者だったので当然の結果ですが……まあいい。では、また会いましょう。私も生身で貴方に会いたくはありませんがね」

男はまるで〈影〉のように消滅した。

伊藤は刀を鞘にしまう。どうやら騙されたようだ。気に食わないが、遠隔操作の能力を使っているということはなんとなくわかる。もつとも、そんな“力”は見たことも聞いたこともないのだが。

男の消滅と同時に白尾の気配は消えたが、別の〈影〉が近付いていた。腕長鬼だ。細い体に突き出た腹、短い二本の足。しかし両腕だけは体の倍ほどある。手は三本で、鋭い爪はないが力は強く、衝撃波を使える。

伊藤は空を見る。今宵は下弦の月のようだ。

両腕が伊藤を捉えようとする。伊藤は跳躍する。

——以前詳細不明の組織との戦いになったとき、伊藤はまだ若干二十四歳だった。満月の晩だ。相手にとって、高く跳躍し月を背に迫る伊藤は恐怖の対象そのものに見えた。

月を黒く染める男。〈闇月〉の伊藤の名はそれが由来だとされる。

伊藤は地面に降りる前に長腕の体を二つに裂いていた。刀をしまう。

——まだまだ敵は増える。こちらでも色々準備をしておかないと。衣服の乱れを直し、伊藤は笑みを浮かべた。

一章 六話

自警団に新たな仲間が増える。一気に三人加入し、三人ともが即戦力として使える逸材だった。坊主頭で長身の斉藤有樹、日焼けして肌が黒い赤池克也、おとなしめの永戸千夏^{ちなつ}。男たち二人は社交性に富み、そして自分の実力に自信を持っているようだった。

遊乃がちやほやされているのを見て清輝はやきもきしていた。遊乃の存在は〈影〉を相手にしている者の間では有名だ。加えてあの天真爛漫な美しさ。注目されるのは当然だろう。

新人の斉藤有樹がちらちらと遊乃の脚を見ている気がして清輝は気に入らなかった。遊乃も、たまには長いパンツを穿いてくればいいのに、彼女はいつも脚をだす。ショーツやミニスカートが大半。ため息が出る。きつとこの三人は影狩りから直接スカウトしたのだろう。それなりの実力者に決まってる。まだまだこの中の順列が危ういのに、また強敵が増えてしまう。いつになったら上へと這い上げられるだろうか。

徘徊のとき、いつも清輝は脅えている。〈影〉は手強いし、狡猾だし、いつも突然現れる。最近相手の気配を読むことを覚えたが、それでも出てくるとわかっただけで恐ろしくなる。

ところで千夏という女は二十四歳で社交的な他の二人に比べておとなしめで、あまり喋らない。実力はわからないが、緩いパーマがあった薄茶色の髪におっとりした目を持つ彼女は可愛かった。

だがどこことなく違和感を覚えるのは何故だろう。彼女だけ他の者から浮いているような感覚。周囲に立ちこめるオーラの流れがおかしいというような。

彼女を見つめていると、目が合った。目をそらすのは簡単だが、せっかくだ。挨拶くらいはしておこう。

「ああと……湯浅清輝です。どうぞよろしく」
握手を求める。相手はおずおずと握手に応じた。

「永戸千夏です。よろしくお願いします」

「何だお前、いきなり口説こうってわけか？」

幸司が茶々を入れ、清輝は彼を睨みつけた。

「自己紹介だよ。神田さんもしたらどうですか——まあいいや。こっちの人が神田幸司って人です」

「よろしく」幸司も握手を求め、千夏は再び気乗りしない様子でそれに応じた。

「まあ、わからないことがあったら何でも聞いてくれよな」「そんなことって大丈夫ですか？ 永戸さん、神田さんよりも強いかもしれないよ」

神田は反論せず、その可能性もあるなというような神妙な顔つきになった。

「それは今回の徘徊でわかるぞ」

一際声の大きい場が全員を沈黙させた。

「早速新人も入れて徘徊する。いつも通り三チームに分かれるからな。A班は俺、誠二、真樹椰、新人の赤池。B班は寧々に幸司に健太、新人の斉藤。C班は遊乃に清輝、新人の永戸、副団だ。じゃあそれぞれ分かれて徘徊を始めるように。Aチーム行くぞ」

徘徊が始まった。

一章 七話

清輝は遊乃と一緒に嬉しかった。今日は彼女に守られないような戦いができればいいと思う。

標高二百メートルの山道を進み、下りたら御台公園という川沿いの大きな公園を回るのがCチームの目的だ。

山道では早速〈影〉の気配がするが、人の気配に気付いたのか逃げていった。臆病な〈影〉もいる。

中腹辺りで遊乃が立ち止まった。

「どうした遊乃君」

副団長の充が尋ねた。

「かなり野蛮な気配がしますね」

「なら、夜猿^{やえん}辺りだろうな」

警戒を大に、四人は歩く。

殿を努める副団長の前を歩く清輝はその前にいる永戸千夏が気になった。〈影〉と戦うときに一体どういった戦い方を見せてくれるのか。即戦力とっていったが、どの程度の強さなのだろう。影狩りから引っ張ってきた連中だ。自警団は影狩りと比べてレベルは遜色がない。的場は影狩りの中堅連中よりもずっと強いようだし、遊乃も一目置かれている。

〈影〉の気配はすぐ近くだ。清輝は辺りを見回す。木々がざわめいている。

上から、黒い影が降ってきた。

「テル！」

衝撃波が影を吹き飛ばす。

清輝は反応が遅れたものの、すぐに防壁を最大限に張って身を固めて様子を見る。どうやら遊乃に救われたようだ。清輝の上に降ってきたのは夜猿で、彼らは音もなくこちらを襲撃できる。警戒ランクはA。危険な〈影〉だ。

夜猿は的場よりやや大きく、腕は四本で、左右に二本づつ枝分かれするように生えている。力が強く、まともに捕まったら人間の体などたやすく壊してしまう。

清輝は刀を抜き、夜猿に襲いかかる。しかし、副団長に止められる。清輝は振り返る。

「待て。それじゃ危険だ」

遊乃が前に出る。彼女は強力な衝撃波を放ち、夜猿に深い傷を負わせる。相手は虫の息だ。

「あと二匹はいる！」遊乃が叫ぶ。

清輝は今度は襲撃に対処することができた。背後を狙ってきた相手を振り向きざまに刀で斬る。腕の一本を切り落とすことに成功する。

永戸千夏も動いた。彼女は衝撃砲で敵を攻撃していた。一発一発の威力はたわいもないが、何発もすぐに撃つことができる。衝撃砲はかなりの体力を消耗する。連射すれば疲労困憊するのが普通だったが、彼女は問題ないようだった。結局何発も衝撃を浴びて〈影〉は消滅した。

清輝が腕を切った相手は矢追充が斬り捨てていた。遊乃も相手をしていた〈影〉に止めをさしていた。これで三体仕留め、他に気配はないようだった。

清輝は千夏が〈影〉を倒したところを見ていた。衝撃砲を連射できるのはすごいかもしれないが、大した威力じゃない。断定はできないが大体の実力はわかった。あれなら自分とそう変わらないかもしれないと清輝は少し冷静になる。だが遊乃に救ってもらったのは事実。情け無かった。

礼は言わない。その代わり、この借りは必ず返す。

笏銅坂^{しやくどうばん}にたどり着く。鬼の銅像の置かれた小さな寺の先にある勾配の大きく長く幅の広い坂だ。ここを下れば一気に街のほうまでたどり着く。しかしこの坂も〈影〉が出現するポイントの一つであり、

二日に一回は徘徊することになっている。

すでに白尾たちが中空を飛び交っている。数は十体以上いる。放っておくと数を増やし民家周辺に群がるようになる。白尾は警戒度は低いがそれでも一般人にとっては危険な〈影〉だ。

「副団長の華麗な技が見たいです」

清輝が充をおだてる。

「ま、てっとり早いよな」

充は頷くと坂を下り初め、白尾たちの近くまでくると大きく息を吸い込み、それから少しだけ時間をおいて、一気に衝撃圧を放った。攻撃は広範囲に渡り、白尾たちは地面に叩き付けられて、絶命した。「すごいですね」

その目を輝かせ、千夏は言った。

「そ、そう。副団長は強いから」

少ししどろもどろに答える。

坂に敵はいなくなった。ちよろいもんだと清輝は思うが、副団長のあれがなかったら面倒だったかもしれない。もっとも、遊乃一人がああ白尾の群れの中にもいっても全く問題はないのだろうか。

坂を下りる。街は目の前だがそこには行かずに左折し、少しした先にある大きな雲見川という川にたどり着く。御台公園はすぐ目の前だ。

公園に入る。ライトが灯って明るいのが、〈影〉の気配は強い。時刻は九時を回っている。ここが本日最後の徘徊場所だが、清輝は経験上、ここが一番の激戦区になるのでは予想した。

公園に多い〈影〉がちらほら見られる。帝鳥という大きな怪鳥が空を飛んでいる。あそこまで大きな帝鳥は見たことがないなと清輝は思った。翼長六メートルはあるだろうか。影移動を繰り返している。こちらを警戒しているようだ。

水の音が激しい。昨日は大雨で、川の水かさは増している。川の音は狩りにとって集中力を欠くマイナス要因になる。

一本の鋭い矢のようなものを遊乃は胸で受けた。防壁を掛けてい

る彼女に痛みはなかったが、矢のようなものは遠くへ逃げようとする。よく見ると、それは細長い〈影〉だった。〈影〉は遊乃から離れると、再び凄まじいスピードで今度は千夏を狙った。千夏も防壁を掛けていたので矢のような威力だろうが効果はない。そして〈影〉は防壁に当たった衝撃に耐えきれずに床に落ちて消滅した。

あれはダツという〈影〉だったなと清輝は思った。生身であれに当たったら……。

カマキリが二匹、暗闇で動いている。それから鬼蜘蛛が一匹。赤目が一匹。見渡す限り清輝が確認できたのはそれだけだった。

特にまずいのは鬼蜘蛛だ。八本の脚があり、顔は人の顔に似ていて、大きな目が四本ある。かなり不気味な〈影〉である。

それから赤目。赤いこれまた四つの目を生やした〈影〉だが泥状の存在で、人型をしているが形はかなり崩れている。

鬼蜘蛛は蜘蛛のように素早く動き、遊乃たちに急接近してくる。戦いになれば八つの脚全てで切り刻まれ、防壁も長くはもたないだろう。それに様々な“力”を扱える〈影〉でもある。

充が鬼蜘蛛の襲撃に応じる。渾身の衝撃波は鬼蜘蛛の行動を少しだけ止めるが、防壁で防御したようでダメージはない。すぐに攻撃に転じてくる。八本の脚を素早く、鎌のように、槍のように使って充を襲う。充は後方に回避し、再び衝撃波を放つ。

ひとまず充に任せようと清輝は他の敵に目を向ける。赤目は鈍い動きでこちらに向かっている。怖いのは影移動だ。あの鈍さは油断させるためのもの。いざとなれば影移動であつというまに、瞬間移動でもしたかのように接近を許される。

攻撃される前に攻撃してやる。遊乃と千夏はカマキリを相手にしている。カマキリの鎌は強烈だが防壁さえおろそかにしてなければ大きな怪我にはならないはずだ。清輝は赤目に集中する。目の前で近付き、相手が赤い目を大きくさせたところで刀を突きさす。

駄目だ。ダメージが薄い。腹の構造は不明だが、内蔵を傷つけてもこの〈影〉は怯まずに動く。

頭部を狙う。しかし相手は急に体を変化させ、アメーバ状となって地面を這いずり始めた。

気をつけないといけない。清輝はすぐさま後退し、相手の気配を探る。目と耳と直感を最大限に活かす。敵はゆっくりと右側から攻撃をしようとしてくる。黒い液体状の中に、赤い目が一つだけ浮いている。目が一つということに気付いて清輝は防壁を最大限まで高める。

同時に四つのアメーバが死角から襲ってくる。そして微弱だが充分な衝撃を体内に送り込もうとするが、清輝の防壁の波動がそれを阻む。衝撃の逆流が起き、アメーバ達は消滅した。

赤目をやっつけようだが、他の連中はどうだろうと清輝は周囲を見回す。遊乃がカマキリに止めをさし、カマキリはいなくなったようだ。後は鬼蜘蛛だが、充が一人で戦っている。さすがに難儀している様子だった。遊乃も加わり、二対一で相手の八本脚の攻撃を散らそうとする。遊乃が鬼蜘蛛の頭部に素早い蹴りを入れ、遊乃は腕に渾身の“力”を込める。少し離れた場所にいる清輝でもプレッシャーを感じる。やはり遊乃は普通じゃない。

繰り出された拳は、防壁を弾いて鬼蜘蛛の頭部を砕いた。「終わったな」充が言う。

やれやれだ。清輝は首を振る。また今日も遊乃に力の差を見せつけられて終わるのだろうか。清輝は周囲に〈影〉がないか、探してみる。

〈影〉はまだまだいる。大きな気配。これは……何だろうな。きつと大足だろう。

大足が影移動でこちらにやってくる。まるで降り注ぐ流星のように、彼らは襲いかかってきた。三体いた。

充は衝撃圧を掛けるがあまり効果がない。向こうも衝撃波で強引に充の攻撃を跳ね返そうとする。

遊乃が前に出る。

いつもそうだと清輝は唇をかみしめる。これじゃ駄目だ。遊乃は

勝つだろう。だがそれじゃけだ、いつものことだ。

清輝も前に出る。遊乃の隣に経つ。遊乃は清輝の顔を見るが、何も言わない。

三体の大足は巨大な足で地響きを起こし、威嚇し、それから攻撃に移った。清輝に蹴りを入れたのだ。清輝の防壁は巨体の攻撃に充分耐えられる、わけではなく、吹き飛んだが、そのおかげか、体内にまで衝撃は伝わらなかった。清輝はすぐに起き上がり、衝撃砲を発射する。大足の足を貫通させる威力だ。とはいえ大足は巨体のわりに体が柔らかい。衝撃砲を使えばよっぽど威力が低い限り突き抜ける。

一体は遊乃がすでに得意の蹴りを加えて膝を突かせている。もう一体は充と千夏の同時攻撃に消滅しかけている。

清輝は刀を抜いて相手の首もとまで飛び、横に斬った。大仏のように大きな首は刎ねるにはいたらなかったが、充分致命傷を与えることができた。大足は消滅した。

「よし！」清輝はガッツポーズをした。

大足は全て消滅した。しかしまだ終わらない。

威圧感に四人は身構えた。

「〈影〉じゃない」遊乃が呟く。

しかし強力な〈影〉はいるにはいて、しかしそれはこちらに向かつてはこないようだった。空を飛ばたく強大で巨大な〈影〉は、ゆっくりと旋回するとさらに上昇し、だんだんと小さな影になり、やがて見えなくなった。

遊乃たちに威圧を与えたのはその〈影〉ではなく、こちらに迫ってくる人影のほうだった。その人影は長身で、金髪で仮面をしていた。黄金の能面だった。

「何者だ」

充が声を荒げる。

仮面の者は足を止めた。そして、低く笑った。

動いた。と、同時に凄まじい衝撃波が遊乃達を襲い、彼らは吹き

飛んだ。

一章 八話

〈魔術師〉の仕業だと遊乃にはわかった。〈魔術師〉と対峙したことはあるが、魔法のような多彩たる術さえなんとか対処し、強力な防壁を破るほどの“力”を駆使すれば勝てると遊乃は思っている。百万ほどの能力者たちの中に、二百人程度しかいない存在。

〈魔術師〉というだけで普通の能力者とは別格。そして相手は何故かこちらを攻撃してくる。心して掛からないと危険だ。

〈闇使い〉の真樹椰がいればと遊乃は思ったが、いたとしても同じことだろう。真樹那は〈闇使い〉としては並の力しかない。〈魔術師〉に抗えようがない。

千の針のように、凝縮された衝撃波が遊乃達に放たれた。体力も充分の遊乃の防壁は相手の攻撃を完全に防いだ。清輝や充、新人の千夏を見たがどうやらなんとか防いだようだ。だがこれ以上は無理だ。清輝は今の一撃を防いで体力を相当消費してしまったように見える。充ですら、青い顔をしている。

これ以上は――。

遊乃は動いた。相手めがけ、跳び蹴りを食らわせたのだ。それは決まったのだが、防壁の堅さから察するに相手の痛みはないだろう。しかし、遊乃はここから違った。彼女は相手が起き上がる暇もなく、第二撃を食らわせる。彼女の強い“力”の込めた蹴りを食らわせ、それから渾身の拳を叩きつける。

防壁でガードしたとはいえ仮面の者はよろめいていた。

いけるなと遊乃は一瞬思ったかもしれないし、そんなことすら考えていないかもしれない。彼女は一旦熱くなると相手の動きが止まらない限り猛攻をやめない。

敵が起き上がると、波動を腕に注ぎ込み、全力の拳を相手の腹に叩き付ける。くぐもった声が出た。よろめき、倒れる。それから動かない。

相手は〈魔術師〉だ。こんな程度ではないだろうと遊乃は油断せず、相手の出方を待った。

やはり、起き上がった。

「さすがに〈チゲシヨウ〉の遊乃だ。とんでもなく強いな。でも……まだまだ」

声は男の声で、若い声だった。

遊乃が再び速攻をするが、男は衝撃砲で遊乃の攻撃を止め、吹き飛ばした。

近距離で衝撃砲をくらい、遊乃は痛みにもうめいた。

「……〈魔術師〉の俺だけで充分だと思ったが、さすがは八重田自警団。今日は……やめておこう」男はまるで自分に言い聞かせるようにそう言うと、背中を向けて去っていった。

「逃げたようだな」

充が言った。

清輝は遊乃を助け起こす。

「やられたな。大丈夫か」

「結構効いた。あいつ何者なんだろ。〈魔術師〉なのは確かだけど」
「〈魔術師〉の衝撃砲くらってその程度で済むお前が何者なんだろうな」

充が呆れた顔をする。

「遊乃はタフなんすよ。ええと、永戸さんも大丈夫ですか？」

「はい。問題ありません」

千夏は平然としていた。

清輝はむしろ涼しげとも思える彼女の顔を見て、首を捻るところだった。今回はかなりイレギュラーの事態のはずだ。こうも平然とされるとどうも、嫉妬のような感情を抱いてしまう。いけないと思いつつも、清輝は彼女に対して反感のような気持ちを覚える。影狩り連中はこんな常用は慣れっこということなのか、と。

充を見ると、彼は落ち着きを取り戻したようだがその顔を見れば

相当動揺したのは明らかだ。

「充さん、今のは何なんですかね？」

当然の問いをしながらも清輝は内心の心の落ち着きを取り戻すことができず、苛立っていた。仮面の男が〈魔術師〉だからではない。〈魔術師〉に対抗できて、いい勝負をした遊乃に対しての自分との差に。

「あれがたぶん最近現れる能力者狩りの連中なんだろう。憶測だけだな。影狩り狙いの者だ」

「その連中には〈魔術師〉がいるってことですか……厄介ですね」

「今日は戻ってこのことを話し合ったほうがよさそうだな。新手が出てきたりしても困るし、車で帰ろう」

一章 九話（前書き）

ちよつとだけ長いですが

一章 九話

会議は長引いた。〈影〉を相手にするのが仕事なのに、人を相手にするのはおかしいという者もいたし、邪魔をするなら〈影〉でも人でも倒すべきだという者もいるし、〈魔術師〉クラスの連中が相手なら人を増やすべきだと言う者もいた。影狩りにこのことを連絡し、向こうでも被害に対しての手段や対策を聞く。

新たなメンバーを加えた自警団だが、一週間活動を停止することになった。その間の見回りは影狩りのほうに任せることになる。

一週間か、長いな。清輝は考える。その間暇だ。何をすればいいか。

適当にドライブと車を走らせる。一人ドライブはそれなりに気休めにはなった。夜、テレビを見ていると携帯電話が鳴った。赤井秀一からだ。八重田とは対極に位置する間驒《まだ》にある支部の三班副班長だ。謎の多い男であり、派手な金髪とよくサングラスをかけている三十三の男だ。背も高く肩幅もあり、影狩りとしての能力も高い。そして清輝は彼とは縁があって修行をしてもらい、飛躍的に強くなった。

「はい？」

「今、いいか？」

低いが優しいでもある声が電話越しから聞こえてくる。声の様子では随分機嫌がよさそうだ。

「いいですよ」

「実は今近くに〈影〉が数匹いるんだ。一人だと心細いんでね、君の力を借りたい」

「いいですよ。場所を教えてください」

車で指定の場所まで向かい、目的地近くの駐車場に車を入れて降りるとすぐに赤井がやってきた。

「やあ。今日は随分返事が早かったな」

長身の赤井は清輝より一回り大きい。

「まあ、他ならぬ赤井さんの頼みですものね」

「恩師だからな。俺の言うことは絶対だ。そうだろ？」

清輝はため息をついた。いつもの赤井だが、一体全体どうして急に仕事以外で〈影〉退治をしようと思ったのだろう。

「冗談だ。敵は近いぞ。この先のビル街にいる。心してかかろう」

「そんな人気の多い場所にいますか？」

「馬鹿。この先は〈影〉によって滅ぼされた場所だぞ。知らないのか。〈影〉の被害が甚大じゃなくてみんな逃げるようにこの場を去ったんだ。今は人っ子一人いない、ゴーストタウンだ。注意しろよ」
「なんでそんな場所に向かわないといけないんです？ 人がいなければ、〈影〉もいないでしょう」

「それが違うんだな清輝君。人がいない場所で連中は変態するんだ。変態が完了するまでは〈影〉は活動できない。芋虫から蛹になり、蝶になるように、〈影〉の中には蛹状態になる〈影〉がいる。変態が終わると、進化する。その〈影〉はすさまじく恐ろしい〈影〉だ。だから危険なんだ。だから蛹のときに叩くんだ」

頭の中で話を整理する。赤井が言っていることが本当なら、例のトンネルの〈影〉と同じなのかもしれない。あれは結局村谷瀧太郎という生きた伝説のような老爺が倒したようだが、瀧太郎自身も相当疲弊したようで三週間ほど寝込んだらしい。伝説を寝込ます〈影〉とは相当なものなのだろう。

「いいか、不穏な気配を感じたらすぐに逃げるからな。言ったようにここには人はいない。だから誰も助けてくれないぞ」

ビル街を歩く。なるほど、左右に林立するビル内部に電気はついてなく、街は静まりかえっている。こんなにも寂れた場所を清輝は知らなかった。まるでこの世の終わりだ。

心なしか〈影〉の気配がする。赤井がいうように、変態を遂げた〈影〉が彷徨っているのだろうか。

「ちなみに蛹状態の〈影〉の周りには〈影〉たちがまるで守るよう

に群がるそうだ」

赤井が言った直後、前方から〈影〉が現れた。浮遊霊という、一旦木綿のような下半身と動きに蜥蜴の顔、カマキリの手という〈影〉だ。それが二匹、清輝達を発見したようで向かってきている。

「幽霊どもめ、厄介だな」

赤井が厄介という気持ち清輝には理解できた。動きはのらりくらりとしているが、捉えがたいのだ。まるで海の中で魚を捕らえようとするかのように、難しい。

だから清輝は直接攻撃を加えようとはせずに、衝撃波のみで倒すことにする。連中は防壁を張ることができるので、簡単にはいかないだろう。

「衝撃砲と衝撃圧で倒す。お前は左。俺は右のをやる。今だ！」

赤井の合図に清輝は衝撃圧を放ち、動きが鈍ったところに衝撃砲を放った。一発は当たったが、防壁によって弾かれる。めげずに何発も撃ち込むが、当たらないし当たっても弾かれてしまう。

とっておきを見せてやる。清輝は両の手の平を合わせ、前に突き出すようなポーズを取る。それから、手の先に“力”を集中させる。それから狙いを定め、一気に放出させる。衝撃はすまじい音と共に浮遊霊に直撃した。轟音と共に〈影〉は消滅した。

「素晴らしいじゃないか」

見ると、赤井はすでもう一体の〈影〉を倒していた。

「一体いつそんな技を覚えた？」

「ちよっと前ですよ。だけどこれ、すごい疲れるんです」

「衝撃砲を倍にし、より精度を上げるイメージか。俺の教えた通りにイマジネーションを大事に訓練に取り組んでいるようだ。感心だ」

「いえ、赤井さんのおかげです」

さらにビル群の奥へ。中央付近にくと再び〈影〉の気配がする。影馬の群れが中空を飛び交っている。相手をするのは面倒だと二人はこそそそと歩き、群れを通り過ぎる。

そこから先は荒れ果てており、まるで戦争でもあったような風景

が広がっていた。察するに、能力者と〈影〉との戦いがあったのだろう。〈魔術師〉クラスならコンクリートの壁に穴を開けることもできるから。

そしてその奥に、オオカマキリが一匹いた。二人は慌てて角に隠れ、顔だけ出してみる。〈影〉は園は背後にある繭のようなものを守っているようだ。

「あれはカマキリの卵みたいなんですかね」清輝が小声を出す。

「馬鹿だな清輝。〈影〉は卵で生まれる存在ではない。彼らは命を取り込んだら分裂して新たな同種を作る。あれは変態した〈影〉だ。蛹だよ」

「なら、あれを破壊すればいいんですね」

「ああ。オオカマキリ一匹ならまあなんとかなる。やっちゃおう」

赤井が飛び出した。オオカマキリはすぐに戦いに応じたようだ。

清輝も深呼吸すると、飛び出した。

オオカマキリはカマキリがさらに歳老けたカマキリといわれているが、別種であることが最近明らかになった。体はカマキリの三倍ほどあり、その鎌の一撃はカマキリの比ではなく、防壁が完璧に作動しても並の能力者なら大きな痛手をおうかもしれない。

オオカマキリは巨体でもって赤井に飛びかかったが、赤井は高く跳躍し、オオカマキリの背後を取った。しかしオオカマキリは素早く反転、赤井に鎌の一撃を与えた。赤井は吹き飛んでビルに叩き付けられる。窓ガラスが割れ、赤井の姿が見えなくなる。

衝撃砲を清輝は放つが、影移動した〈影〉が清輝の背後に回った。

清輝は振り返るが、鎌の鋭い一撃を食らう。

吹き飛ぶ。防壁がなくなったので再び全身に満ちるのを待つ。その間二秒。だが敵は再び眼前に迫ってきていた。衝撃砲が命中し相手が怯まなければどうなっていたかわからない。

撃ったのは赤井だ。赤井はどうやら無傷なようで、清輝はあれだけ吹き飛ばされてびんぴんしている赤井を不気味に思った。何にせよ無事なのは嬉しかったが。

再び赤井の衝撃砲。清輝とは違って太く、重い衝撃が〈影〉を貫く。

〈影〉の動きが弱まる。

清輝は先ほど浮遊霊を倒した技をやるうとしたが、練りだす体力が残っていなかった。集中力が足りない。おそらくやつても不発に終わる。ならばと衝撃砲を赤井と一緒に放つ。

オオカマキリはそれでも随分やられてようで、影移動して逃げようとしたところを赤井が跳躍し、脳天に刀を突き刺されて消滅した。大きい分、消滅も時間がかかる。

やったと清輝は思う。あとは繭だけだ。これさえ潰せば目的を達したことになるのだろう。

「破壊するのでしょうか？」

「ああ。だいぶ育ってる。危険だ。清輝。突き刺せ」

清輝は刀を抜いて繭に近付く。半透明の人間の子供ほどありそうな卵の内部には黒い何かが脈打つように動いていた。不気味だった。刀で突き刺そうとすると、不愉快な感覚が清輝を襲った。清輝は思わず足下をふらつかせる。頭が痛い。どこからか、直接負の波動を食らっているような嫌な感覚。

駄目だ。繭を突き刺そうと思っただけで頭が割れるように痛くなる。

「離れろ！」

赤井の一喝に清輝は繭から遠ざかった。

「近接は危険のようだな。こっちでも不愉快な感覚が伝わってきた。これが変態途中の〈影〉の攻撃というか、防衛策なんだろう」

赤井はさっと銃を取り出すと、繭に何発も撃ち込んだ。彼の顔は苦悶に満ちていて、銃を撃つことをやめることはなかった。

終わった。繭は完全に元の形を失い、消滅していく。

赤井が額を抑えている。負の波動にだいぶやられてようだと言清輝は自身の額を抑えながら思った。

「帰りましょう赤井さん。目的は達成できたのでしょうか？」

「いや……これだけでも限らないからな。本当は全部片付けたいが、危険すぎるな。今日はこれくらいにしておこう」

帰りはなるべく普通の〈影〉を避け、避けられないときは奇襲をかけて一気に片付けながら戻った。ビル群から抜けようというとき、清輝は足を止めた。

「赤井さん？」

「わかってる」

赤井は冷や汗を掻いていた。

おぞましい障気が伝わってくる。清輝は周囲を見回し、そしてその相手を見つけた。

繭だ。繭があつたのだ。しかしその繭はすでもぬけの殻で、すぐ近くにその繭から出てきたと思われる〈影〉がいた。四足の足に、四本の手。そして大きな顔。鬼のように角が生えた顔には鋭い目と尖った鼻、耳まで裂けた大きな口がある。全体的に不格好な〈影〉だった。

清輝は相手の見た目とは裏腹の、発せられる威圧に戦っていた。見ためのインパクトはあるが鈍重そうな化け物だ。しかし、“力”の強さは並ではなさそうだ。

衝撃波が発せられ、清輝と赤井はガードする。強い衝撃は清輝に〈魔術師〉を連想させた。

「あいつは何です？」

「けものおに獣鬼だ。まともな強さの〈影〉じゃないから戦っても勝てるかどうか。ここは逃げよう」

二人は背中を向けて逃げた。が、四つ足の獣鬼は素早く走り、最後には跳躍して二人の前に立ちはだかった。

「カマキリ程度だったらな」

赤井はそう呟くと衝撃破を放った。

清輝も衝撃波を放つ。双方全力の衝撃波を放つも、獣鬼はわずかに顔をしかめる程度だった。

衝撃砲に変える。清輝は冷や汗を掻きながら、再び大技を使うし

かないだろうと決意した。数日間動けないかも知れないが、生死の瀬戸際だ。やらざるを得ないだろう。

赤井は衝撃圧を展開し、その間も右手で衝撃砲を撃った。衝撃砲は相手の防壁を壊すが、防壁はすぐに作られる。衝撃波程度では防壁すら破れない。

厄介だなと清輝は刀を抜いた。刀は能力者だからこそその力を限界まで引き出すことができる。“力”を刀に浸透させる。赤井に合図を送る。赤井はうなずき、衝撃圧の攻撃を中断する。

一気に加速し、清輝は跳躍した。そして相手の顔に刀の一撃をたたき込んだ。

防壁を破り、顔の裂く。しかし、相手の顔を両断することには至らない。

衝撃波で吹き飛ばされる。防壁は効いているが近距離なのでかなりの衝撃が全身を貫いた。

今度は赤井が動いていた。彼も清輝のように獣鬼の顔に刀で切り刻んだのだ。清輝に構っていて隙があったぶん、清輝よりも深く傷を与えることに成功していた。

悲鳴が上がり、獣鬼は逃げようとする。

本来なら背中越しに衝撃砲でも放つところだが、赤井はしなかった。双方共に疲弊していた。

「また戻ってくるかも。今のうちに逃げるぞ」

清輝は赤井に肩をつかまれながら歩いた。やがてビル街から離れることができた。

一章 十話

「なかなかどうして、頼りになるじゃないか清輝」

赤井は清輝にコーヒーをご馳走していた。

「だから、赤井さんのおかげですって。さっきの〈影〉には手も足も出ませんでしたけどね」

清輝は体の痛みに顔をしかめた。一応病院で精密検査をしたほうがいいかもしれない。影狩りのような仕事をしていれば治療費は国が全額受け持つ。

「そんなことないぞ。なかなかいい刀の攻撃だった。相手が悪かったな。あれは獣鬼といって、会ったら逃げろと言われているクラスの〈影〉だ。あれも蛹になるタイプだとは知らなかった」

「あんなの相手にするなんて知ってたらいきませんでしたけどね」

「いいじゃないか。こういう経験をして強くなってくんだ」

清輝は顔を俯かせた。

「だけど俺がどんなに頑張っても遊乃には敵いませんよ」

「遊乃君か。彼女は特別だよ」

彼女は特別。確かにそうだ。それはわかっている。一体いつから遊乃は特別だったのだろう。最初から、だろうか。「俺は遊乃と同じくらいかそれ以上強くなりたいんです」

「そりゃあ難しいな」

赤井はコーヒーを飲み干すと言った。

「彼女は普通じゃない。彼女が何故あんなに戦い慣れしているか、興味ないか？」

清輝は顔を上げて赤井の顔を見た。

「ご存じなんですか？」

「ある程度はね……」

赤井は語り初めた。

冷たい水を飲み干し、西城遊乃は再び床につく。クーラーは適温とはいえやはり暑い。

電気を消す。寝れてしまえば気温も気にならない。

独りで眠るのは寂しい。だがもう十年もこういう生活をしている。

一章 十一話（前書き）

一章終わりです。少し長いです。

一章 十一話

遊乃は一人っ子で、核家族だった。十年前には母親と父親と仲睦まじく暮らしていた。遊乃は能力者としての才覚があったが、将来的に影狩りのような仕事につくとはその頃は全く考えていなかった。遊乃に影響を与えた最初の事件は、友人の鮎谷明義の死だっただろう。身近で初めて〈影〉に殺された者でもあった。家も近く、よくテレビゲームをやり、家に通っていた。異性では唯一にして最高の友達。そんな彼は両親との外食の帰り、翼を生やした〈影〉たちの手によって殺された。享年十三歳。中学校に入っただけの事件だった。

遊乃は悲しかった。〈影〉を許せなかった。才覚があるのなら、将来は影狩りになって〈影〉を駆逐する仕事に就きたいとそのときは心から願った。

だが子供は残酷なのか、一年も経つと明義のことは忘れていき、普通の学園生活を送っていた。その頃遊乃のクラスでは女性徒の一人が女子グループからいじめられており、遊乃はいじめを黙認している生徒たちの一人という役になっていることに気づき、いじめをしている生徒たちを糾弾した。訓練せずとも強力な衝撃波を扱える遊乃は誰も恐れなかった。

糾弾した次の日、遊乃は周りから避けられるようになった。ありがちなパターン。机はずたずた。ロッカーには土が入っている。いじめられた生徒はいじめはなくなったようだがクラスでは空気のように、誰も彼女とは喋らない。

世知辛い世の中だと遊乃は思う。こんな世界は壊してやったほうがいいのかもしれない。

ただ……あまりにも馬鹿らしい。自分がいじめを受けているという境遇に笑ってしまう。実際遊乃は全く気にしていなかったし、いざとなれば生徒全員まとめて壁に叩き付けられるという芸当ができ

るということも理解していた。悲劇の少女的な境遇に甘んじて意味はないのだろう。

行動が鍵だと思う。遊乃は普通の学園生活を送りたい。だから、あまり派手なことは慎むべきだと考えた。

そこで、遊乃はいじめの首謀者が一人になるのを見計らって壁に叩き付けた。それから彼女と一緒に食事をし、親睦を深めることにした。難しいなと遊乃は思った。相手を痛み付けるだけでは恨みを買うだけだ。それすら超えた、圧倒的な恐怖を与えるのもいいが、遊乃はそんなことを望まなかった。

しかしどちらにせよ遊乃は“力”を使うことを強いられる生活を送る運命だったのかもしれない。

両親は殺された。理由は、遊乃の母親と遊乃が特殊な存在だからだ。彼らは遊乃の両親を殺し、遊乃をも殺そうとした。なぜなら、彼らは、能力者は害悪たる悪魔の申し子だからだ。遊乃は奇跡的に襲撃から逃れることができた。母親は死んだが、母親の周りには無数の死体があった。

やがて彼女は数多ある宗教の中でも邪教とまで言われる宗派、日輪教^{りん}の連中との戦いに突入することになる。理由は報復だった。両親は彼らの一味に殺されたのだ。エデンへと至る道には、特殊能力者や夜掌族は入っていない。能力者の中でも強すぎる力を持つ者は悪魔であり、唾棄すべき存在だったのだ――彼らの宗教の中では。

クラスでの確執問題に“力”を使って解決しようとしていた遊乃をきっかけに彼らに気付かれたのだ。遊乃とその母親が、普通の存在ではないということ。

そして悲劇は起きた。邪教徒たちが集う。遊乃は家を出ようとして異変に気付く。取り囲まれている。

パーティーで事件は起きた。父親は毒殺された。母親も父親と同じ食事を食べたのだが、母親は特殊だったためか、死にはしなかった。学校にいる遊乃に帰るな、友達の家に行くとメールをし、家に潜んでいた者達と戦った。そして、敗北した。

遊乃はある組織によって保護され、宗教組織の攻撃を避けることができた。

遊乃は特殊な施設に入れられ、それから訓練を受けた。過酷な訓練だったが、両親に対しての報復を彼女は忘れなかった。それから十六歳になると日輪教が再び遊乃を襲った。その頃には彼女は能力者の繋がりができていて、一人ではなかった。暗がりでも襲う連中は〈影〉とそう大差ないではないか。亡くなった友のことを思い出し、彼女はこういった異常組織は徹底的に糾弾せねばならないと考えた。例え死人がでるとしても、それは仕方ないのだろう。

日本でも有数の大企業の三保という会社は影狩りにも支援をしていて、独自に影狩りの組織を作ってもいた。自警団とはまた違い、その下で働く影狩りの者たちは派遣社員のような扱いだった。遊乃もそれに参加する。年齢は若い、天性の才能が目にとまり、前線に出されることを許可された。遊乃は激しい怒りを感じていて、今にして思えばあのときは普通の状態じゃなかったのかもしれない。両親の仇を討ちたいが一心だった。彼女はまさしく混乱していて、そして彼女は正義という名の暴力によっていた。ともあれ、世間でも存在を肯定されていない宗教という名の悪党は壊滅せねばならない。

戦いは三年続き、彼女が大学生になる頃に終焉した。激しい戦いだった。邪教連中は重火器を所有していた。能力者のいない彼らが対抗するとすればそれしかない。だが、戦車砲を撃たれるとは思わなかっただろう。その能力者はベテランで防壁もしたのだが、命はなかった。地雷や爆弾の攻撃には鉄壁を誇る能力者でも対処に苦労した。その宗教はすでに宗教ではなく内幕は武力組織だった。金と暴力。この二つによって動いている。まさしく邪教だった。

戦いの中盤から遊乃は頭角を現していき、そして彼女は切り込み隊長として活躍していった。日輪教のトップは能力者だった。それも強力な。幹部連中も全て能力者で占めていた。そして、彼らは宗教とは関係のない何かの繋がりがあったのだが、全貌がわかる前に

壊滅してしまい、遊乃の戦いは終わった。

——あの頃に比べれば、いいのかもしれないと眠りにつけずに、天井をじっと眺めながら遊乃は思う。

カーテンを開ける。丘の上には無数の星々が瞬いていた。それを見ると自分は一人じゃないという気になる。ようやく遊乃は眠りにつくことができた。

「——それで、結局彼女はその日輪教を壊滅させるのに大いに貢献した。そこでの功績があまりにも異様というか、異常すぎたのでそこで〈猛襲〉という異名がついた。〈魔術師〉すらも一人倒している。彼女は危険だ。清輝……君が対等に立つのは経験量からいってもまだまだ難しい」

清輝は彼女の十代のころの話を今まで聞いたことがなかった。そんなにも凄惨な青春を送っていたとは。

「だけど結局遊乃は最初から強かった、ということじゃないですかね？ いきなり衝撃波を飛ばせるなんて普通じゃありえない」

赤井は頷いた。

「そうだな。天賦の才があったことは間違いないだろう。“力”の強さだけみても並の〈魔術師〉を上回るからな。それに荒々しく、日輪の連中の殺し方も強烈だった。だから〈血染め〉の遊乃という——」

「はい？」

「いや……そう言われている。うん。隠さずにいうとね」

血染めの遊乃。猛撃とは随分印象が変わる気がするが、それが遊乃の異名なのだろうか。

「〈猛撃〉でしょう？」

「それは実は適当に作ったものらしい。実際は〈血染め〉の遊乃。これは実にイメージが悪いから、彼女にとってマイナスになりかねない。だから使わないことになったようだ。君も、間違っても血染

めなんて言うなよ」

言うかよと思いつつ清輝はその異名に対する黒いイメージの遊乃を思い描く。自警団の彼女は、実に凛々しく、格好よく〈影〉を倒す、美しい戦士だ。だが元々は、〈影〉ではなく人と戦っていたのだ。それが彼女の戦いの始まり……。

「……まあ、彼女の話はここまでにしよう」

「まだ知っていることが？」

「いや、ないよ」

清輝は赤井が嘘をついているといることを瞬時に読み取った。しかし、詳しく追求しないことにした。清輝自身も詳しく聞くのが怖かった。

「今日はお疲れだったな。ちなみに最近出現する影狩りを狙う連中のことだが……特に〈悪霊〉には注意してくれ」

「悪霊？」

浮遊霊のような〈影〉か、白装束の濡れ髪の女か。しかし今話しているのは人間のはずだ。

「ああ。過去に横浜で暴れ回っていた危険な能力者だ。〈魔術師〉審査をパスしてないが〈魔術師〉より危険だと言われた殺人鬼。二月三日の悪夢とも呼ばれる。神奈川では有名な能力者だ。それが影狩りを狙う連中の一人に加わっていて、この県にいるという話を聞いてな。連中は仮面を被って暴れるから風貌ではわからんかもしれない。あいつらが接触してきたら悪いことはいわない。急いで逃げろ」

〈悪霊〉。だが清輝にはそのときはまだ他人事に感じられた。

二章 真紅眼 一話

〈魔術師〉枝？憐華は召集を受けていた。内容はいまいち把握していない。だが契約上、受けたからには行かなくてはならない。五歳になる子供を寝かせたまま、彼女は最近を着ていなかった和服に着替えると、夜の外に出た。鬼たちの気配がするが、彼女にとって脅威となる威圧はなく、一人、颯爽と歩いていた。夜風にたなびく髪は長く、月光に照らされて艶やかに輝いた。彼女は三十歳。旦那はすでに死去するも彼女は子供をパートナー抜きで育てることを決意する。辛い、子供は可愛かった。

麻華神社あさかに着く。境内にはすでに数十人の〈闇使い〉が揃っていた。その中でも〈魔術師〉ではある者はおらず、今や憐華一人だけだった。

老人が憐華のほうにくる。厳しい目をした頬の瘦けた、背の低い男で、鴉と言った。この中では一番の有権者だ。

「きたか憐華。いや、宵鶴。さあ、輪の中に」

境内は強力な結界が込められている。邪なものが入ってくることはない。憐華は人の輪の中に加わった。左隣に〈黒鷺〉そして右隣に鶯うぐいすがいる。二人とも〈闇使い〉の中堅だ。彼女たちは憐華を見る

とにこりとした。敵意はない。少しだけ憐華は緊張していたのだ。ここの連中は内輪には優しいが、一旦外れると余所余所しく、敵意さえみせる。だが中堅の二人がこのような態度を見せるということ、は、〈闇使い〉から〈魔術師〉となった今でも自分を仲間として認識してくれているらしい。

ちょうど対極に、女だらけの中には珍しく男がいる。彼は一際背が高く、そして鋭い眼光。整った中性的な面立ちの男は鵲せきれいと叫ばれる。

他にも同じく男で、こちらはさらに大柄で色黒で、全身筋肉の雷鳥がいる。こちらにも文句なしに強い。

他に孔雀、それに鳶辺りの女が強力だ。二人ともすでに三十を過ぎていだろうに、今だ現役だ。結婚はしたのだろうかと憐華は考える。

「それではこれから緊急会議を始める。みんな楽にしてくれ」

老爺の鴉がそう言った。

「今回話し合うべき事柄はだ、最近厄介になってきている影狩りを狙う者達のことだ。知っての通り影狩りには我らも介入しているし、互いに互恵関係を結んでいる。我ら神使の中にもすでに犠牲者は出ている。敵は強力だ。噂では我らの中にも裏切り者がいるという話だ。それでだ、我らも積極的に介入をする必要性に迫られた。影狩りの連中を全面的に支援する。陰陽師たちとも連携し、今暴れている者共を抹殺する。やり方は各自に任せる。一月以内に見つけ出し、見つけ次第殺せ。返り討ちにあうなよ」

穏やかな話ではないなと枝？憐華は思った。だがそれだけこの自身を神使とする連中が躍起になっているということ。つまりは、それだけ危険な状況といえる。全体的にピリピリしている。一触即発の危うさ。この会合は端で見るとより遙かに恐ろしい。〈闇使い〉は〈影〉退治のエキスパートだ。能力も一般的には〈魔術師〉に劣ると言われているが、この中で上位の者は並の〈魔術師〉を凌駕する。迂闊なことをして敵に回すのは避けたい。

解散する。しかし……どうしてシングルマザーである自分が戦いに駆り出されねばならないのだろうか。ここの連中は少し道徳に欠けるところがある。

「久しぶりだね、宵鶴」

声を掛けてきたのは鵲鴿だった。彼は優しげな微笑でこちらを見ってくる。

「調子はどう？ 子供を育てているのだろうか。だったら無理はしないでいい。会合は強制だから仕方ないにしても、戦いの参加は拒否できるからね」

「ありがとう。だけどできる限り協力するよ」

鵲鴿の顔が曇る。

「いいかい、宵鶴。別にいいんだ。もう君が戦いにでる必要は……」
「わかってる。心配してくれるんでしょう。だから好きにやります。
無理はしないから。——ところで珠江の姿が見えないけど、あと八
咫鳥も」

「夕雁も八咫鳥も行方不明だ。すでに朝廷の追跡が始まっている。
我々も彼女たちを捜して、もし彼女たちが逃げたのなら、殺さない
とならない」

穏やかじゃないわね、と憐華は再び思う。

「なら影狩りを倒している連中に加わっている裏切り者っていうの
も……」

「その可能性もある。私はそうじゃないと思う。もっと別の勢力に
参加したんじゃないかな。色恋沙汰の駆け落ちだったらまだいいん
だけど」

色恋沙汰。だが二人とも、そこまで愛に狂うようには見えない。

実際に愛に翻弄された憐華はそう考えた。

「まあ、私は私でやるべきことをやるから。鵲鴿、貴方も気をつけ
て。朝廷がどうこう言ってきたもね」

「わかってるさ。私だって仲間を追跡するのに躍起になっているわ
けじゃない。色々気になることがあってね。思うに、この閉塞的な
神使達のやり方ではこの先やっていけないように思う。入ってくる
情報があまりにも遅すぎるんだ」

「そうかもね。じゃあ、子供が心配だから今日は帰る」

「ああ。引き留めてすまない。また会おう」

鵲鴿は友好的だが、だが腹の底ではみんなが何を考えているのか
わからない。こういうふうに懐疑的になってしまっ自分嫌になる
が、実際、裏切りはあるし、全ての者が同じ人間として接していけ
るわけではないのだ。

二章 二話

神社を離れ、少し夜風に当たる。子供は心配していない。乳母がいるから。もう少し遠回りして帰ろう。久しぶりに家を出たような気がする。周りの者に頼りすぎだとは思う。本来なら自分で買ひ物もいくべきなのだろうが。

〈影〉の気配を感じるが、それよりも気になるのが、より強い気配。人から感じる威圧。この強さは――。

夜風が強くなってきた。空は曇っている。

闇から現れたのは、黒色を身に纏った長身の男だった。

「〈闇月〉」

憐華はぼそりと呟いた。

「久しぶりだな、枝？……憐華」

「何か御用？」

「貴女に？ 別に……〈闇使い〉の会合に興味があったが、もう終わったみたいだね」

「あなたでも会合を覗こうなんて思わないほうがいい。結界を破ったら殺されるから」

「だろうね」

伊藤はくつくと笑った。

不穏な空気が流れている。だが戦いにはならないと憐華はわかっている。理由がないからだ。

しかし気になるのは周囲の気配だ。〈闇月〉だけの威圧だと思っていたが、何か別の者が混ざっている。

「あなた……追われているの？」

「いや、しつこいから撒いてたんだ。あまり人を殺したくないしね。貴女もそうだろう？ 俺達はときにあっさりと人を殺す。だが年が年だ。自重してるんだ」

「結構なことだ」

どうでもいい。憐華は帰宅しようと思った。やはり外に出ると、色々面倒だ。こんなところで影狩り当時、どちらが最強かを競ったような相手と対面するなんて。だが今はもうそんなことはどうでもいいのだ。

「そうだ。あなた影狩りを狙っている連中って知ってるでしょ。その連中に心当たりはないの？ それともあなたがその一人だったりして」

「俺は影狩りの味方さ。その連中のことは知ってる。仮面を付けた連中だ。得体が知れないが、もしかするとファントムのような組織と何か関わりがあるのかもしれない」

ファントム。半年ほど前に潰れたといわれる国衛会と衝突していた組織だ。国衛会も得体が知れない。〈暴凶星〉の異名を持つ男を筆頭に、腕利きが揃っている。今もどんどん勢力を伸ばしていると話だ。

仮面。ファントム。共通点を上げるとすればそこだが、疑ってしまふ共通点だ。

「それよりあんたはもう帰ったほうがいい。そろそろ痺れを切らすころだろうし」

闇から伊藤と憐華を取り囲んだのは八人。

「増えた。どうやらあんたの正体も割れたらしい」伊藤は平然とした様子で答えた。

憐華は面倒だなと思わなかった。少し嬉しかった。最近はそういう目に遭ったこともなかった。〈影〉との対決は面倒だ。だが人は恐怖を感じる。それを見るのが、好きではないとはいえない。

仮面は付けていない。しかし覆面で顔を隠している。

誰も覆面の中身なんて興味ないのにね。憐華はほくそ笑んだ。そして彼女は残忍な笑みを浮かべた。気分が高揚してきている。最高に楽しい気分だった。

だけど……たった八人でどうしようというのだろうか？
あまり楽しめそうもない。

憐華は術を放った。周囲を崩壊させるような大技だが、それを最小限に抑えて放つ。これは威嚇程度の攻撃だが、大抵の人間なら吹き飛ぶ。能力者も同等だ。伊藤は跳躍し、爆風を回避した。憐華は舌打ちした。

ここらは人気も少ない田舎道だ。相手としてはやりやすいと思っただろうが、それは憐華も同様だった。

刀で攻めてくる四人の影。だが憐華の防壁を敗れる攻撃では全くない。憐華は四人を再び吹き飛ばす。今度はもっと強めに。

伊藤が一瞬で二人を同時に気絶させる。

憐華が再び襲ってくる四人に対処しようとしたとき、仮面の男が現れた。白い狐の仮面を被った男は、長身で細身だった。それでもう一人、今度は狸の仮面を被った男が現れた。

「仮面……ファントム……」憐華は呟く。

二つの波動が衝撃となって押し寄せてくるも、憐華はそれらを悠々といなしてみせる。

憐華は笑っていた。高笑いすら浮かべていた。楽しかった。相手がまだ余裕だとわかったとき、彼女は心地良い気分浸っていた。

憐華は両手から黒く、禍々しい球を出した。そしてそれは段々と大きくなる。激しく廻るその球は太陽表面で波打つ炎のように荒ぶっている。さらに大きくなり、最終的に憐華の半分ほどの大きさにまで膨れあがった。

それを憐華は投げた。黒球は不規則な動きをし、仮面の者たちに襲いかかった。仮面の者たちはそれほどのスピードでない球を跳躍して回避しようとしたが、球は二人に狙いを定めていた。そのまま上に上がっていき、二つの球はそれぞれ二人にぶつかった。

防壁を張ったとはいえ、球の攻撃を完全に凌ぐことはできなかったようだ。球は四散したが、仮面の男達は呻いている。

だがすぐに復活して、二人同時に憐華を襲いだした。憐華は最大限の衝撃波を見舞った。轟音が響く。少し離れた民家に住んでいる者には、近くで雷鳴が轟いたと思うだろう。

音がなくなると、仮面の男はいなくなっていた。覆面の男達はずでに伊藤が全員倒していた。しかし伊藤は憐華の衝撃波のどぼつちりを食らったようで、地面に仰向けになっていた。

伊藤が仰向けのまま狂ったように笑い出した。

「あんたは変わってない！ 魔女はやはり魔女のままなんだな。また手合わせしたいところだ」

憐華は、戦っていた相手があっさり逃走したのが気に入らなかった。先ほどとは打って変わって、彼女は戦いを欲していた。タガを外せば〈魔術師〉枝？憐華はそんなものだった。このまま伊藤と戦ってみるのも楽しいかも知れないが、勝ち目があるのかないのか：博打になるような戦いはごめんだ。帰りを待っている家族がいる。そう思うのは、少し高揚がなくなり、冷めたからかもしれない。冷静になるとあそこまでやる必要はなかった。相手は憐華が本気になるほどの相手でもなかったのに。

「それは遠慮しておく。もう家に帰らないと。あんたも遊びはやめて家庭をもう少し大事にしたら？」

伊藤は笑いすぎるほど笑っていたので、憐華はむっとした。影狩り時代でも伊藤は無口で、誰にも無愛想で、笑わない男だった。しかし憐華と喧嘩になるときだけ楽しそうに笑うのだ。誰よりも、本当に楽しそうに。心の底から楽しそうに。それを端から見ていると、心の底から狂っているんだなと痛感するのだが。

「何がそんなにかしいの……」

憐華は呆れていた。

伊藤は笑いをやめると上半身を起こした。

「失礼。久しぶりに朋友と会えて嬉しかったんだ。それだけさ」

「私はあんたと友達だった覚えはないけど」

「いいさ。俺はあんたが好きだ。こと、こういった戦いのときは誰よりもシンパシーを感じる……まだ俺達の戦いは終わってないのかもしれない」

伊藤は完全に起き上がる。

「また会おう。〈魔術師〉、枝？憐華。しかしいくつになってもあなたは美人だ。誰よりもね。その着物もよく似合ってる」

「あなた、私を口説きたいの？」

伊藤は唇を歪めた。

「まあ、あなたも同じことがいえるけど。無愛想だけど顔はいいからね。奥さんを大事に。それと、黒の上下はセンスがないって前もいわなかったかしら？」

伊藤は手を上げて別れの挨拶をすると思いに闇に消えた。

言いたいことだけ言って、と憐華は思う。しかし伊藤の言っていることに共感することはある。確かに憐華も、戦いのときは他の誰よりも伊藤と通じ合えたような気がする。戦いに対する、美学のよきなものをあの男とだけ一番強く感じていた。

前に、同じようにセンスを感じた者はいた。それが子供の父親だった。〈影〉との戦いにて斃れた。軽口の多い男だった。十もの年の差があったのだが、最後にはそんなことはどうでもよくなった。助平で最初は嫌いだった。だけど、全身全霊をかけて愛してくれたし、守ってくれた。

少しだけ涙が出た。子供のところへ戻ろう。

憐華は歩き出した。

二章 三話（前書き）

長いすかね

二章 三話

自警団が再び再開された。清輝はその間ずっとトレーニングに励んでいた。一週間ぶりに見る遊乃は相変わらず美人だ。

永戸千夏は相変わらず大人しめだ。彼女はおどおどとした態度で清輝に挨拶し、清輝も挨拶を返した。目を合わすとすぐに反らされる。かなり照れ屋なのか。

〈悪霊〉に気をつけろというが、どう気をつければいいのだろうか。大体、この一週間の間にこちらを狙う能力者に対する打開策は用意できているのだろうか。

的場が現れる。

「諸君、おはよう。一週間ぶりだな。あれから色々対策を講じたが、結局、二チームにして一チームの人員を増やすということで落ち着いていた。影狩りや他の連中とも協力してもらっている。連中もそう簡単にこちらを狙えなくなるだろう。それでも、今日、いや今からの戦いはそうした連中と遭遇するとうい可能性が多分にあるわけだ。もし、不安を感じるような見回りには参加しないでいい。強制はできないからな。いけるものだけが準備をしてくれ」

的場の言葉は重かったが、ここにいる全ての者が戦いの準備に取りかかりだした。

「覚悟を決めろよ。〈影〉だけが相手じゃないからな」

人のほうが怖いのか。この時点では清輝はそう思っていた。

二つのチームとはいえ、前線と後方支援に別れ、一チーム最大八人というものだ。後方支援と言っても待機組のようなもので、いざというときしか出番はないだろう。その間彼らは周囲の動きを探ることになる。あまり離れすぎない距離に端末で確認を取り、ヘルプの信号がきたらすぐに駆けつけるというやり方だ。

Aチームの遊乃、清輝、幸司、満喜椰、千夏の五人に後方支援が

三人。彼らは再々危険区域と言われる真丘町の、真丘ふれあいパークという大きな公園にきている。ここを中心に住宅地は〈影〉の脅威にさらされていて、最近人離れが多い。

〈影〉を駆除するために集った彼らだが、〈影〉の多さには辟易する。まるで〈影〉の溜まり場だ。

夜鳴きという、細長い体の人型の〈影〉がいる。大きな声で悲しげに泣くのだが、人を見つけると一瞬で間合いを詰めて食すという恐ろしい〈影〉だ。それから帝鳥がいる。白尾と影馬が空を飛んでいる。

とはいえ、これらの〈影〉は住宅地周辺に現れる〈影〉よりも比較的楽に倒せる。Bチームのリーダーである副団長の矢追充が仲間を率いて公園内へと入っていく。

「じゃあ、あたしたちは住宅のほうに」

遊乃が仕切る。的場今日は留守番だ。団長とはいえ常に前線で戦うわけではない。彼には他の仕事があった。

住宅街は静かだった。空には三日月が光っている。風は無風。音で聞き分ける彼らには都合がよかった。

T字路で五人は立ち止まる。左右に馬首が二体うまくびずついる。こんなものを窓から目撃してしまう住民は悲鳴を上げるだろうが、その恐ろしさもだんだんと慣れていくだろうが、外に出る気にはなるまい。馬首は人の体にキリンのように長い首と馬の頭を持つ。その手はへ影〉としてはもつともポピュラーな鎌手であるが、カマキリのような〈影〉よりも鎌は小さいようだ。

馬首は四匹ともが一斉に衝撃波を放ってくる。だが遊乃の防壁も、清輝の防壁も、彼ら程度の衝撃波では壊されない。

反撃の一撃は遊乃が最初だった。勢いのあるいい蹴りは、一撃で敵を消滅させた。相手は決して雑魚でもなく、攻撃が効きにくいといわれる〈影〉である。

清輝は蹴りを使って反撃されてやられる、などというケースを考慮して刀で斬りかかる。清輝の刀のセンスは最近洗練されてきたよ

うで、一撃で相手の胴体に深い刀傷を与えた。

千夏の衝撃砲が馬首の銅を貫き、消滅する。

満喜椰が三つの黒球をぶつけて〈影〉を消滅させた。

あつけないと清輝は思うが、馬首というのは元来衝撃波と多少の防壁を使う嫌な〈影〉だ。あつさり勝てたのは今のメンツが強すぎるからだろう。

続けて雲のような〈影〉が現れた。名前はそのまま雲だが、影狩りの間では空ウニと呼ばれている、雷雲よりも黒い〈影〉であり、ガス体の集合体のような見た目をしている。中央に一つの目があるが、包み込む闇によって見え隠れしている。その目は充血していて、そこだけは妙に生々しい生き物のようだった。

殴る蹴るの攻撃では埒が空かない相手だが、西城遊乃はその雲を蹴って消滅させることができる。

遊乃に任せたらあつさり勝ってしまうだろう。清輝は彼女にばかり任しておけないと前に出、刀を構える。遊乃が何か助言をしようとしたのが清輝は彼女の顔を一瞬見てわかったが、清輝自身は彼女の顔に無言の圧力をかけた。助言などなくてもこいつの倒し方はわかっている。

衝撃圧をかける。ぎゅうぎゅう詰めにするように相手に圧をかけて逃げ場をなくす。影移動は使えまい。そして刀で一閃。簡単だ。敵は霧散する。まるで最初から蒸気であったかのように。

だが霧散した〈影〉の背後に別の〈影〉が現れたときに清輝は驚いて隙を作った。その隙を敵は逃さなかった。一閃。そして清輝は倒れた。

遊乃が叫び、清輝の前に立つ〈影〉を蹴った。彼女の怒りの一蹴りだが影移動をされて当たらなかった。

清輝はすぐに起き上がる。防壁が甘かったが、傷跡はない。腹がミミズ腫れになっただけだ。

反撃開始だ。遊乃がこちらを見て、無事なのを確認した。彼女の目の変化を見て清輝は何か得難いものを手に入れたような気持ちに

なる。

〈影〉は魂裂きたまひぎという、片方四本の長い爪を駆使する人型の〈影〉だ。とんでもなく素早いのも特徴だ。手強い〈影〉であることは間違いない。

この〈影〉の特徴だが、別種である鎌人かまびとと必ずセットで現れて連携した戦い方をする。この〈影〉は羽を持つ人型の〈影〉で、手の代わりに鋭い鎌がついている。魂裂きがスピードで敵を翻弄し、隙を突いて鎌人が鋭く太い鎌で空から貫くという戦い方だ。

清輝は相手の動きに翻弄されないよう、両方の動きを捉えようとしたが、魂裂きの速度は捉えがたく、常に動き回りそして一瞬で間合いを詰めて仲間を襲う。厄介だった。スピードでは劣るが鎌人も頭の上を自在に飛び回り長い鎌を振るってくる。この鎌の一撃が危険だった。一撃で防壁を無効化にする。相当の“力”が込められている。

真樹椰の攻撃が二匹に命中する。大したダメージではないが、彼女の攻撃が相手に隙を作って見せた。

清輝が魂裂きを切り裂いた。渾身の力を込めたが、相手は動いた。だが片腕を斬り捨てることに成功する。

影移動でもって鎌人が清輝に襲いかかる。完全に防御に徹するが、衝撃は強く、全身が痺れた清輝はその場に膝をついた。

だが遊乃が仇を取る。彼女は拳を鎌人に叩きつけ、地面に落とした。それから間も持たず渾身の一蹴り。このコンビネーションが遊乃は得意だった。

千夏の衝撃砲が魂裂きに命中した。動きが止まる。止めは幸司が刀でつけた。〈影〉は消滅する。

虫の息だった鎌人だが、遊乃の脚に一矢報いた。彼女の脚を斬ったのだ。防壁で弾くが、遊乃は顔をしかめた。それから鎌人は消滅した。

「大丈夫か、遊乃」

清輝がふらつく体で遊乃の元に行く。遊乃は脚を押さえている。

「痛むの、遊乃」

真樹椰が遊乃の脚をまじまじと見る。

「鉄ハンマーで思い切り殴られたような感じだね」

「防壁で強い衝撃を食らうとそうなるよ。動ける？」

「きつい……かな」

真樹椰が端末を用いて後方支援の連中を呼んだ。一分もしないで車は到着し、大急ぎで仲間が降りてきて駆けつけてくる。

「遊乃が足をやられちゃって……清輝君は大丈夫なの？」

「まあ、痛みますね」

清輝の場合、全身をゴムハンマーで殴られたような痛みだった。結局その日はそこで終了となった。

二章 四話

遊乃でも怪我はするんだなとぼんやりと清輝は思う。休日の初日、一人自室でコーヒーを飲みながら清輝は思い人のことを考える。遊乃が心配で電話かメールでも入れてみたかったが、あまり深く彼女に自分の感情を込めたことがないので彼はただ、彼女が無事なのを祈った。遊乃の足に何かあったら自分のことかそれ以上に辛い。彼女のことを本気で想っている。それを再確認する。いつまでもこの思いを秘めていたらきつと自分はおかしくなる。玉砕覚悟でぶつかっていくべきときがきたのかもしれない。

病院に搬送されたようだが、今頃どう過ごしているだろう。

見舞いに行くぐらいなら特に問題ないだろうと清輝は出かける準備をした。メールを使用したのが、やめておいた。いきなり行っても問題あるまい。

車を出して、遊乃が入院している総合病院へ。受付に遊乃の病室を聞く。場所は三階だ。エレベーターで上がり、三階の遊乃の病室に。

なにやら話し声がする。遊乃の声と、もう一人。女の声ではない。男だ。的場か、幸司か、充か。どれも違う。御門だ。御門健太の声。聞き耳を立てる。

「……とにかく、それくらいで済んでよかったね。じゃあ俺、そろそろ行くよ。お大事に」

「ありがとう。気をつけて」

御門は出てくるようだ。清輝は慌てて、別の病室に逃げ込んだ。老人が不思議そうにこちらを見る。御門が去るのを確認すると、清輝は出ようとしたが今出て行ったら御門から間もなく清輝と応対しなければいけない。けが人にそんなことをさせるのは無粋なことだと思いは始める。

清輝は病院を後にした。車まで戻ると着信があった。また、赤井

からだった。

「もしもし？」

「やあ。ちょっと今から〈影〉を狩りたいんだが一人では荷が重い。微力ながら救援が欲しいと思ってね。熊田総合病院、わかるよな。今すぐきてくれ」

電話が切れる。一方的な誘い方に清輝は戸惑いを覚えた。‘しかし妙だ。何故病院なのか。まだ時刻は昼前。〈影〉が出没する時刻ではない。一体赤井は何を考えているのやら。’

熊田病院はここからさほど離れていない。行くのは簡単だが、腑に落ちない。赤井に会えば詳しい説明があるかもしれない。仕方がない。赤井に付き合ってやるか。

熊田病院の駐車場はなかなかに混んでいる。隅に車を止めて、赤井に電話をいれる。

「今つきました」

「ご苦労。ではロビーにきてくれたまえ。そこに私はいる」

缶コーヒーくらいは奢ってもらわないとなと清輝は病院内に入った。

入ったとき、感じた。違和感。間違いない。先ほどいた病院とは明らかに違う、異質な雰囲気。立ちこめる目には見えぬ障気。

病院内は外の木漏れ日が差して、明るかった。老人を主とする患者達である意味賑わっている。そんな普通の病院の風景。だが清輝は〈影〉の気配をはっきりと感じた。

背後に気配を感じ、清輝は慌てて振り向いた。

「その様子では異常に感づいたようだな。どうだ、どこに潜んでいるかわかるか？」

赤井だった。

「赤井さん、こんなところでもサングラスですか」

「陽光が嫌いなんだ。どんなところでも。で、気配は感じるか？」

「気配、ですか。わかりませんが、ここよりも上階のほうではないかと」

赤井はうなずき、にやりとした。

「いい判断だ」

二人は階段を使って二階へ上った。どんよりとした空気に清輝は今すぐここから逃げ出したい衝動に駆られた。

「どういうわけです？　〈影〉は昼には活動しない」清輝は小声で隣の赤井に言った。

「ああ。だが例外はいるのは知ってるはずだ。滅多にないが連中の中には昼も活動し、そして建物の中に入り出できる存在がいる。寄生タイプが主としてあげられる」

「けどそれって……」

「危険な〈影〉が多いな」

廊下の奥から伝わる邪気に清輝は足を竦ませる。間違いない。この階にいる。どこかの……病室だろうか。そのどこか、誰かに紛れているに違いない。寄生タイプなら人に取り付き、その人間の人格を一時的に乗っ取ることが可能だ。

「赤井さんは何でこの病院に？」

「ああ、ちよつと眠れなくてね。精神安定剤を貰いにきたんだ」

清輝は頷いた。色々あるのだろう。

問題の気配をもっとも強く感じる病室に行くと、病室の真ん中に看護婦が、背中を向いて立っていた。そしてはっきりと見えた。

まずいなと清輝は感じた。この看護婦から強烈なプレッシャーを感じる。この看護婦、危険だ。

振り向いた看護婦は笑っていた。狂気が張り付いた顔に清輝は凍り付く。清輝ははっきりと見た。看護婦の顔より下に、黒い〈影〉がべたりと張り付いているのを。ガス状の存在だが、間違いなく寄生している〈影〉だ。

看護婦はけたたましく笑いだした。

「こちらの存在に気付いていたようだな」

赤井がポケットから小刀を取り出した。

清輝も同じように小刀を取り出すが、敵は〈影〉かもしれないが

相手は生身の看護婦だ。看護婦を切らずに〈影〉を切るのだが、〈影〉は看護婦の体に張り付いているように見える。〈影〉だけ切断するのは難しそうだ。

赤井が看護婦に襲いかかる。看護婦が衝撃波を発するが、赤井の防壁には全く通用しない。

小刀で看護婦を刺しはしなかった。峯で打ち、相手に多少の痛みを与える。

看護婦はその場に倒れた。

「気絶しただけだ。相手が死ねば寄生している〈影〉も共に死ぬ。意識で？がっているからだろうか、わからないが。ともかく、それを避けるために〈影〉は寄生体から離れた。おそらく近くの人間に取り付くだろう」

患者であろう老人が二人に近付いていた。清輝はすぐに気付いて老人に衝撃波を放った。しかし防壁で完全にかき消され、反対に強い衝撃波を返された。清輝達は防御し、病室から離れた。

「おそらく寄生体の能力の違いが強くなるんだ。そしてあの〈影〉はその人間の本来の能力よりもおそらくかなりの力を上乗せできるはずだ。嫌な〈影〉だ。強い能力者にでも寄生されたらことだ」

清輝は赤井の説明を聞きながら、廊下の奥を見ていた。患者たちが外に出ている。彼らはみな、虚ろな目でこちらにゆっくりと向かってきている。

「どうやらこの〈影〉は複数の人間を遠隔操作できるようですね」「実に嫌な〈影〉だ」

清輝は患者達を足止めすることにした。中にはどこで持ってきたのか包丁を持った看護婦もいる。随分、恐ろしい光景だった。

衝撃波で彼らの歩を緩める。相手は生身。衝撃波も加減する。向かってきている連中は本体ではないから、能力も使ってこないようだ。

赤井は本体が寄生している老人を相手にしていた。清輝が一瞬見た限りでは手こずっているようで、とっくみあいになっている。首

を絞められている。相手は病弱そうな今にもくたばりそうな老人なのに、あの赤井に力勝ちしているとは。だが赤井も人間相手に本気を出せないのがよくわかった。

まずいと思い、清輝は老人を赤井から引き離れた。そして老人に強めの衝撃波を放つが、完全に防御されてしまう。

清輝は焦り、全力の衝撃波を見舞った。凄まじい音がして周囲の窓ガラスが吹き飛ぶ。

老人はそのまま動かなくなった。

気配が離れた。〈影〉が逃げたのだろうか。しかし支配は終わっていないようで、患者と看護婦は押し寄せてくる。

強行するのめたやすそうだったが、二人は反対の階段から下りて一階に戻ろうとした。が、階段下はロビーの受付で待っていた患者が全員集まっていて、こちらに上ってくるころだった。

諦め、上に行く。そしてエレベーターを使って三階に向かった。

三階のドアが開こうとしたとき、気配が強まってきたので清輝は身構えた。ドアが開き終わる前にナイフを持った看護婦が清輝の頭部に深い抉り傷を与えようと振り下ろしてきた。間一髪、清輝は相手の腕を掴んで攻撃を止めた。しかし腹に一発、蹴りが入る。清輝は呻いた。

この看護婦、能力者だと清輝は感じた。〈影〉はおそらく能力のある寄生体を探していたのだろう。さっきとは比べものにならないほどの威圧だ。

清輝は衝撃波を放ち、赤井は渾身の蹴りを繰り出し、看護婦は壁にめり込むほど叩き付けた。だがその顔を見る限りまるで平気なように、反対に衝撃波を放ってきた。清輝と赤井はエレベーターの壁に背中を打ち付けた。

ドアを閉めて四階へ。エレベーターを出ると、静かだった。だが縷々とした違和に清輝は緊張を解くことができず、周囲を警戒し、警戒を怠らずにゆっくりと廊下を歩いた。

ここから生きて出られないというほど絶望はしていない。だが簡

単に抜け出ることは難しそうだ。窓はあるが、飛び降りるのは無理だろうし。

清輝はどうすればいいのかと考える。上階にきても無意味だ。逃げ場はない。

患者達が病室から出てくる。胡乱な目で二人を見、ゆっくりと近寄ってくる。

「もう一度エレベーターだ。一階に行くぞ」

だがエレベーターは使われているようで、下に下がっている。

「階段で行きましょう。もう強行突破しかありませんよ」

二人は階段を駆け下りる。三階手前で先ほどの〈影〉の宿主である看護婦を筆頭に、患者達が集団がいた。数が多すぎる。

赤井が階段を駆け上がった。清輝もほぼ同様に同じ行動を取った。四階に戻って反対の階段に行く。こちらにこの数なら向こうは手薄のはずだ。

しかし清輝は立ち止まった。

「清輝！」赤井が困惑の叫びを上げる。

逃げてでも仕方ないではないか。ここであの看護婦を倒す。おそらく能力者の看護婦などあれ一人のはず。看護婦さえ倒せば、あとは有象無象、どうにでもなる。

武器なんて必要ない。“力”だけで行ける。咆哮を上げ、清輝は衝撃波を放った。窓ガラスが盛大に割れた。

跳躍した看護婦がナイフを清輝の頭上に振りかざしていたが、赤井が衝撃波で阻止した。

「看護婦を戦闘不能にできればいいんだがな」赤井が言う。

難しいが、清輝は多少強引にやってみることにする。衝撃波を数発撃ち込む。周りの患者達はすでにのびている。看護婦は起き上がり、素早く清輝の懐に入り込んでナイフを振るってくるが、赤井によって止められる。

清輝は拳に“力”を込める。最大のパンチを見舞っても、果たして倒せるかどうか。

渾身の一撃を相手の腹に入れる。看護婦は苦痛に顔を歪め、倒れた。しかし意識はまだある。

赤井が衝撃波で看護婦を吹き飛ばした。看護婦は階段を転がり落ちていき、三階の廊下まで行くと動かなくなった。

清輝は複雑な心境だった。

〈影〉が、看護婦から離れた。〈影〉は次の宿主を捜すために影移動しつつ離れていく。

逃がすものか。清輝は小刀を取り出して疾駆する。そして三階の廊下に達した時点で、動きを止めた。

足を疎める。威圧と、それに伴う強烈な波動。まるで全身を見えない箭が貫いたような。

〈影〉は目の前にいた。先ほどのガス体のような姿をやめ、実体化している。大きさは廊下になんとかおさまるほどで、〈影〉は四つ足で長すぎる尾を持っている。伸びた胴体からは刺々しい針が無数にある。頭部にも無数の針があり、そして二本の腕は長いが、爪は人のように丸かった。

衝撃波が放たれ、清輝は廊下の突き当たりの壁まで吹き飛ばされる。

赤井が〈影〉に衝撃砲を放っている。何度も何度も。数発撃ち込むと、〈影〉は影移動して赤井の背後に立ち、赤井を蹴り飛ばした。赤井は窓に叩き付けられ、窓ガラスが飛び散った。

まずい。清輝は起き上がる。こんなに強力な〈影〉だとは。

〈影〉は笑っていた。〈影〉が笑うというのは奇妙なものだが、清輝は確かに〈影〉が笑う声を聞いた。高等な〈影〉は笑うことができる。聞いたことがある。ならば、高等な〈影〉ならば意思疎通も交わすことが可能なのだろうか。わからないが、〈影〉は確かに笑っている。

清輝は両手の平を合わせ、前に突き出し、全身全霊を込めた一撃を放った。全身に痛みが走る。集中が完全ではないと自分への反動が強かった。

影移動で相手は姿を変えてその攻撃を避けた。そして〈影〉は清輝に影移動で迫ってきた。

再び放つ。焦ったので威力も低く、反動もあって狙いが狂ったが、相手の行動を停止させることに成功した。

ここまではいいが、後はどうするか。敵はゆっくりとだが迫ってくる。刺々しく見えるその体だが、見た目だけのようで、おそらく威嚇の手段なのだろう。実際は鋭利ではなさそうだ。

衝撃波を放つが、〈影〉の周りを覆うガス体が霧散する程度で、それもすぐに再び現れる始末だった。

こんな強大な〈影〉が寄生体が必要とする意味があるのだろうか。清輝は迫り来る悪意に、何か対策はあるのかと思索した。が、何も思いつかなかった。

〈影〉の背後から衝撃砲が貫く。赤井の放ったものだった。さらに続けてもう一発。〈影〉が膝を突いた。

今だと清輝は小刀で〈影〉の腹を突き刺す。しかし頑丈な防壁のため、小刀は途中で止まり、衝撃によって飛ばされる。

腕が痺れた。再び衝撃砲の一撃。清輝も赤井に倣って衝撃砲を放つ。ダメージは少ないようだが、現時点ではこれ以外の攻撃は効かない。拳や足に“力”を込めても、防壁を超えることすら困難のはずだ。

〈影〉がうめき声を出し、影移動して猛スピードで逃げていく。

赤井が追おうとするが、病人たちが再び起きてこちらを迫ってきていた。

「くそっ。奴が逃げたが洗脳の効果はまだ続いている。放っておけばじきに戻るだろうが……ここを出よう」

二人は病院を出た。

「あいつ、病院から逃げたのでしょうか？」

「そうだろうな。もう気配は感じないし」

「あんな強い〈影〉……獣鬼と同じ程度の威圧感でしたよ」

「そうだな。全く。だが勝った。あれは強いが単独では活動時間が

限られるのだろう。基本的には寄生タイプだからな。それにしても強敵だった。少し休もう」

喫茶店でくつろぐ。時刻は二時になっていた。病院は今頃混乱しているだろうなと清輝は考える。

「取り逃がしたが、あの〈影〉は放っておくには危険すぎる。混沌をさらに助長させるような〈影〉だ。幸いあれだえけの威圧だ。すぐに居場所はわかる」

「そうですね」

コーヒーを飲みながら、清輝は今まで疑問だったことを聞いておくことにした。

「赤井さんはどうしてこんな危険なことを一人でやったりしているんです？ 影狩りに頼むなりすればいいじゃないですか」

「私は全部一人でやりたいんだ。誰の手も借りずに。信用ならない者と一緒にやるのは逆に自分を殺すだけだ」

「チームワークプレイが苦手ってことですね。さっきの衝撃砲、もう少して俺に当たるところでした」

赤井は頬を掻いた。

「すまないな。君には色々迷惑かけた。今度はなるべく誘わないでやってみるよ」

「別に赤井さんと一緒に影狩りをするのは好きですよ。誘われるは構いません。ですけど、毎度こんなにレベルの高い〈影〉相手をするんじゃ、命がけすぎて……」

赤井は笑う。

「次からは気をつける。もう少し慎重にやると誓うよ」

それが本当であればいいけどと清輝は思う。彼の言うことは信用ならない。実力は確かだが、どうも少し抜けている所がある気がする。

「お詫びに今度君と遊乃の関係でも見繕ってあげようか？」

清輝はしかめ面をした。

「結構です」

二章 五話

赤井と別れる。時刻は三時。このまま家に帰ってもいいが、せつかくなのでまた遊乃のいる病院に向かうことにした。

「やあ」

緊張しつつも清輝は遊乃に声を掛けた。

「テル。きてくれたんだ」

遊乃は暖かく迎えてくれた。

「これ、食べてくれよな。花はもってこなかったぞ。どうせ誰かが持ってきてるだろうと思って」

「うん、いいよ。ありがとう」

それから三十分ほど話をした。楽しかったし、心地よかった。穏やかな空気が流れ、清輝はきてよかったと思った。

二章 六話

遊乃が復帰する。怪我をした遊乃は気合充分という様子だった。足を防壁を底上げた彼女は、他にも色々死角と思われる部分を強化していた。だから退院後に望む戦いで、彼女は自分が前よりも強くなったかどうか試す場となった。

清輝と遊乃は再び組み、それから斉藤有樹と御門健太さらに寧々の五人。

珍しい組み合わせだった。清輝は、寧々と組んだことがこれまでほとんどなかった。メンバーを組んでいるのは的確場だが、今回は副団長の充がやったようだ。

文化ホール周辺。夜は〈影〉が集まるスポットで、八重田では二番目に危険な場所と地元では誰も近寄らない。

電柱の前に、黒蠍。全員がそれを見るだけでうんざりした顔をする。相手にするのも面倒な〈影〉というわけだ。

「あれは俺にやらせてくれ」

清輝が言い、彼は黒蠍のほうへ向かっていった。

「まって」

遊乃が制止する。

「一人じゃ危ない。寧々さんもよろしく」

「了解」

実質このメンバーのリーダーである遊乃の命令にはみな従うようだ。だが清輝は少し不満そうな顔をしてみせた。

「あいつは俺が片付けよう」

健太が指さしたのは悪魔と呼ばれる羽を生やした〈影〉だ。今は文化ホールの庭内の池の中央にある銅像の上に止まっている。

「それも一人じゃ駄目。斉藤君と協力して倒すように」

「はい。頑張ります」新人の斉藤がはきはきと返事をする。

それから遊乃は一人、近付いてくる〈影〉を相手にすることにし

た。

遊乃の周囲を霧が覆い始めた。自然にできた霧ではない。

〈影〉の中で最大の大きさの、霧鯨だ。夜霧と共に現れる、鯨のような、鯨のような外見をした大型の〈影〉だ。それが霧と共に現れ、道路をゆつくりと泳ぐように中空を飛んでいる。

遊乃は息を呑んだ。稀な〈影〉だ。まさかここでお目にかかれるとは思わなかった。深海魚を海水浴中に見つけるような珍しさだ。

衝撃波を放つ。が、全く効果はない。霧に防壁効果があるのだろうか？と遊乃は思う。霧は霧散したが、再び霧が〈影〉の周りを覆い始める。

〈影〉はこちらに興味がないのかだろうか。遊乃は緊張する。油断させておいて、いきなり丸呑みにするのではないだろうか。

〈影〉が遊乃を通過しようとする。――そのとき、殺気を感じて遊乃は素早く最大の衝撃波を放つ。

危なかった。敵は一体だけではなかった。霧の中に、他の〈影〉がいた。霧鯨を縮小させ、口だけが誇張させたかのように大きな魚のような〈影〉。それが何匹もいて、遊乃に襲いかかってくる。

遊乃は霧から離れた。霧の中にいれば敵は襲いかかるが、霧の外は敵も出れないようだ。霧鯨の出す霧の中が連中のテリトリーであり、魚にとっての水のようなものなのだ。

しかし……霧鯨は通過していく。まるで電車がゆつくりと通り過ぎるかのよう。霧の外にいれば安全だが、渾身衝撃波を込めてもおそらく倒せないだろう。手練れが数人いないと勝てそうにない。悔しいが、見逃すことにする。それに鯨はどうみても敵意は見えないし、海にいる鯨のような手を出しがたいものを感じた。この霧鯨存在する時間が短く、せいぜい今晚のみの人生だろう。だとするのなら、ここで無理して倒す必要性はない。

霧鯨は時間を掛けて去っていく。

次に現れたのは浮き幽霊の群れだ。遊乃の苦手な〈影〉だった。蹴りが効きにくいのだ。衝撃波を至近距離で撃つか衝撃砲を当てる

しかないだろう。遊乃は跳躍する。

とてつもない〈影〉が去ったが、清輝は遊乃のことを心配している暇もなく目の前の〈影〉、黒蠍に苦戦していた。やはり、手強い。だが、勝てる。獣鬼や、病院の〈影〉とは違う。こいつには勝てる。刀が相手の頭部に命中する。黒蠍は霧散した。

「ナイス清輝君」

寧々が清輝の肩を叩いた。

……確かに二人で倒したが、ほとんど自分一人でやったと清輝は自負していた。それが多少の慰めになった。

斉藤有樹と御門健太のペアも悪魔に衝撃砲を乱射してなんとか倒していた。

「強い〈影〉揃いですね」斉藤が言う。

「全くだ」健太が応じる。

遊乃は三匹の浮き幽霊を一人で倒していた。

ひとまずは終わった。他に敵の姿は見えない。しばらくはここで待機し、敵が再び集まるのを待った。

一時間ほど待つと、〈影〉の気配がした。影玉のような〈影〉と共に、鳴き女、鬼が現れた。

鬼は三体。いずれも、自警団の者たちの倍ほどの大きさがある巨大な敵だ。

鳴き女は鬱陶しい。耳をつんざくような悲鳴を上げられると戦いに集中しにくくなる。

清輝は鳴き女から狙うことにした。この時期には珍しい、大蝙蝠が襲ってくるが、防壁で防ぎ、相手にはしないことにする。

鳴き女は木に隠れてこちらに大声で威嚇し、それから衝撃波を放っている。一撃食らったが、無事だった。清輝は鳴き女を斬り捨てようとした。しかし刀を相手に掴まれ、清輝は仰天した。今まで刀を相手に掴まれたことなんてなかった。

鳴き女は至近距離からの衝撃波を放ってくるが、清輝も同じように衝撃波を放って相殺し、再び刀を振るう。避けられる。鳴き女が遠ざかる。逃すかと衝撃砲を放つ。鳴き女に直撃し、動かなくなる。止めに刀を突き刺す。鳴き女は消滅した。

鬼は斉藤、御影、遊乃の三人で戦っている。寧々は直接相手を倒すよりも後方から衝撃波を放っている。彼女は直接戦闘が苦手だ。だから彼女を戦闘員にして使う場合、扱い方を間違えるとやられてしまう可能性があるので接近戦には使えない。

全員、影玉を無視して鬼を相手取っている。鬼は耐久力も破壊力もあるし、知恵も高いようで相手と連携し、一人を集中的に狙ったり、対陣を組んだり、技を上手く駆使して戦う。危険ランクはBだが、鬼の強さも個体差が激しく、とくにここまで大きな鬼になると、かなり激しい戦いになる。

遊乃も他の二人に指示して必死で集中的に相手に狙われないように配慮している。相手の防壁の厚みもネックなのだろう。遊乃の最大最強の一撃も、他の鬼に邪魔をして上手く当てられないようだ。

清輝はこちらの存在を忘れている鬼たちに向かって衝撃砲を放つ。すると、上手く背中に当たり、鬼はよろめいた。

鬼の一体が怒濤の叫びを上げて清輝に襲いかかってきた。清輝としては願ってもないことだった。こうすれば遊乃達の負担も減るだろう。いや、遊乃の負担も減るだろう。

鬼は手強いが、一対一なら影蠍と同じかそれ以下に違いない。と思っていたが、鬼が手に持つ謎の黒い棒が清輝に威勢よく振るわれたとき、清輝はこちらの防壁が完全に破壊されて、慌てた。これではすぐにこちらが体力切れになってしまう。早急に勝負を決めねば。鬼は二本の角を使つての頭突きを繰り出してきたが、清輝は必死でそれを回避した。だが鬼は清輝の左腕を掴みにきた。清輝の腕の三倍はあろうかという腕に、清輝は恐怖を覚えた。掴まれた腕は痛かった。防壁がなければ粉々に砕けていただろう。

右手で衝撃砲を放つ。鬼は手を離れた。清輝はその隙に両手の併

せて自身の最高技を見舞った。余裕はないとはいえ外しても無意味なので、相手に攻撃される恐れのあるリスクを負ってでも時間をかけて狙いを絞る。鬼は背後から衝撃波を食らって少しよろめいたため、攻撃される心配はなかった。寧々がやってくれたのだろう。清輝はその隙に、発射した。大きな音と共に鬼の胸に空洞が空いた。そして鬼はそのまま倒れ、消滅する。

清輝は倒れる。予想以上に体力を使ったのはそれだけ集中し、“力”を込めたということ。

鬼の一匹を遊乃が蹴り殺した。それからもう一匹は寧々の衝撃砲の連射によって消滅した。

遊乃は全体的に疲弊していると判断したようだ。ここで終わりとなった。

二章 七話

全員が帰る中、千夏と遊乃、それに清輝が残っていた。清輝は日報を書いている、遊乃はリーダーとしての仕事に従事している。千夏はというと、特にやることもないようだったが、遊乃と色々喋って仕事のことや戦い方を教わっているようだった。二人とも妙に話が盛り上がり、単なるガールズトークになったりしていて、清輝は邪魔者ではないかと心配しながら作業をしていた。

「清輝さんって結構いい動きしてると思います」

いつの間にか、千夏が隣にきていた。

「え、何が？」

「戦いですよ。今日清輝さんの戦いを聞いたんです。前一緒だったときも思ってたんです。なんか、いいですよね」

褒められているんだろうか。少し上から目線のような気がしないでもないが。

「そうかな？ 必死だからよくわからないや」

「凄いですよ、清輝さんって。そうですよね、遊乃さん？」

「テルは強いよ。今日も鬼を一人で退治したし、影蠍だって倒した。いつも助かってるんだ」

遊乃は優しい微笑みで清輝を見つめるので、清輝はどきまぎした。が、悪くない気分だった。

「遊乃さんとも仲がいいから、二人ともいいパートナーになれますよ」

一瞬、沈黙する。

「私、そろそろ上がるけど、二人ともまだ残ってくの？」

遊乃は立ち上がった。

「うん。もうすぐに仕上がるから」

清輝はわざと日報を遅く書いているのだが、おそらく今からは早く終わるだろう。

「あたしも残ります。清輝さんの仕事を手伝いたいんで」

「そう。じゃあ、お疲れさま」

お疲れ様あと千夏が返す。

この子、最初よりも全然明るい。きっと初対面ではあまり自分を上手くだせないタイプなんだ。清輝はそんなふうに思う。

急に千夏の顔が隣にあったんで清輝は驚く。そんな清輝の動揺を見て、千夏はくすりと笑う。

からかわれてるのかな、と清輝は感じた。

「すいません。怒らないでくださいね。清輝さんって遊乃さんとは付き合ってるんですか？」

「いや、付き合っていないよ」

緊張する。

「へえ。だけど二人とも、お互いのこと意識してますよね。遊乃さんもそうですけど、清輝さんが遊乃さんのこと好きなのはよくわかりますよ」

どう返事をすればいいのだろう。そんなにわかりやすいのだろうか。

「別にいいじゃないですか。遊乃さんって美人です。かつこいいですよ。それで、今からファミレスでもいいって彼女のことを相談しませんか」

遊乃のことを相談？ 一体何を相談するというのだろう。清輝は少し警戒する。だが彼女は屈託のない笑みを浮かべている。彼女なりの親交なのかもしれない。清輝は応じた。

二章 八話

「それで、遊乃さんとは付き合わないんですか？」

近所のファミレスは夜中でも人が多く、清輝はもう少し静かな場所がよかったなと思った。

「付き合いたいけどさ、俺と遊乃じゃ釣り合わないよ」

「そんなことないですよ……お似合いですよ。清輝さん、いい男ですし」

少し照れる。彼女は何を狙っているのだろうか。本当に遊乃とのかをを考えてくれているのか、単に遊んでいるだけなのか。

「遊乃が俺を好きなわけないだろ」

「自己評価低いんですね。どうしてですかね。遊乃さんだって影狩りのときは凄いいけど、女の子じゃないですか。年頃の」

この女は随分恋愛経験が豊富なのだろうか。さっきから相談に乗ってあげているというスタンスで語っているが。清輝は少し気に入らない。

「はつきり言いますよ。遊乃さんは清輝さんのことが大好きです。

自警団の他の男の人なんて眼中にないくらいに」

「そうなのかな」

「そうですよ。いつも気に掛けてます。目でわかります。大事なものを見つめる眼差しで。わからないですか？ テルって呼ぶときの、あの愛のこもった口調が。でも、もしかしたら遊乃さん自身、男女の仲になるのを躊躇っている節がありますよね」

「俺に魅力がないから？」

千夏は呆れたような顔をする。

「本当に自己評価低いですよ。そんなんじゃない、せつかくの相手を逃してしまいますよ。あんない女の人逃したら、たぶんこの先いいことはありません」

「へえ。それで、なんで遊乃は躊躇ってるの？」

「それはですね、遊乃さん自身の問題なんですよ。遊乃さんって、ちょっと強すぎると思いませんか？ たかが二十歳やそこの女の人がですよ、もう団長よりも強いなんて普通じゃないですよ」

それはそうだろう。清輝は赤井から聞かされた話を思い出した。

〈血染め〉の遊乃。だが……清輝は昔の遊乃を知らない。親を惨殺された彼女の、そのときの哀しみと戦いの日々を。殺戮の日々。今の遊乃からは考えられないほどに絶望的な気持ちで送っていたのだろうか。そんな過去を背中に背負っているほど、普段遊乃はそんなに辛そうには見えないのに。

清算された過去なのだろう。遊乃は強い女性だから、そんな過去すらも過ぎ去ったものと割り切ったのだ。西城遊乃はそういう人だ。「遊乃は暗い過去を背負っている。だけど、それと俺の関係があるのか？」

「ありますよ。彼女は他人を巻き込みたくないと思ってる。だから、誰かと関係を持って、それを他者に知られ、利用されるのが怖いんです」

「君は随分知っているようだ。……遊乃のこと、調べたのか」

清輝は千夏に対し、不信感を露わにした。場の空気が張り詰めたものになるが、千夏は大して気にもとめていないようだ。

「調べましたね。気になりますもの。だってあたし、西城さんのことが大好きになってしまいましたからね」

「なら過去の日輪教のことも知っているんだろう？」

「はい。彼女の持つ異質さは、確かに脅威になりますからね。あの〈隻眼〉吉田辰巳を超えるかもしれません」

吉田辰巳は清輝も知っている。公にはされていないとはいえ、影狩りの中では誰もが知っているファントムと国衛会という、狂った組織の抗争でファントム側の幹部を倒したという男。その幹部は〈魔術師〉の中でも恐ろしい相手のようだったのに。

「俺は脅威とは思わないけど」

「そりゃあそうでしょう。日輪教が彼女のことを怖がったのは彼女

が敵となりえるからですもの。何故敵となりえるかというか、日輪教というのは本来純粹日本人のみを神の国に到達できる唯一の存在として崇め、日系人や日本にいる異人を排除しようという、変な組織ですからね」

「狂ってるな。本当に？」

「真実です。そういうの、多いですね」

「けどなんで遊乃が狙われるんだよ？ 遊乃がハーフだとしても？」

大体純粹な日本人なんてどうやってわかるんだろうな」

「彼らなりの検査方法があるのですが、省きます。かなり主観的な狂った判断でやっているみたいですよ。西城さんが狙われる理由を知りたいですか。何となく、察しがつかないでしょうかね。ヒントは彼女の強さですよ」

考えてみても、わからなかった。遊乃の強さに秘密があるということをお願いしたいのだろうか。わからない。清輝は首を振った。

「……かつてこの日本には一般の人間とは違う、魔術を扱える者たちがいました」

千夏が語り始める。

「彼らは魔術を使って人間を助け、そして人間は彼らに食料などを提供したりして共存していました」

「それ、物語の話？」

「物語だとも、事実だとも云われています。一般的には物語ですかね……しかし、彼らの間にも溝ができません。それがどちらが原因というわけではありません。一般の人間達は人とは違う魔術師めいた存在に対し、妬みや恐れを抱き、そして魔術を扱う者たちは普通の人間に対し軽蔑を抱いていました。おそらくそれが次第に膨らんでいき、何かを皮切りに両者の間で戦いが生じました。魔術を扱える者たちはそれはそれは強いのですが、弱点がありました。それは数が人間達より遙かに劣っていたこと。そして長い戦いの末に人間達は勝利し、魔術を扱う者の生き残りは見世物にされたり、人間に利用され、そして見返りもないような状況に追い込まれていき

ました。人間社会から逃れた一部の者たちは一般人を装って普通に生活しながらも、一族の強い恨みを抱いたまま、復讐の機械を伺いました。そして現在、その者たちは集い、その持って生まれた魔力を意のままに使って人間社会を混沌におとしめている。今では彼らのことは〈魔術師〉と呼ばれていますね。元々力があつた者たちだけで交配していった結果です。一般の人間と交わつた者は普通有能力者になりました。今で言う一般の能力者ですね。人間と交わると、こういうサイキックというか、超然とした力は薄れてしまうようです。ある意味で純血を保つたから得た力といえるでしょう。へ魔術師〉の力は」

昔話は終わったようだ。清輝は今千夏が話したような事柄は一切知らなかったので、新鮮な思いで聞いていた。

「でも遊乃は〈魔術師〉じゃない」

「そうですね。実は今の話とは別に、大昔には暗闇の中で生きる、人とは違う存在がいました。それは〈魔術師〉とも違います。吸血鬼とか狼男とかの存在は知っていますね。あの類です。彼らのことは夜掌族、普通は夜族と呼びますね。西城さんはその夜族の一種、夜叉の中でも最高位の鬼夜叉と人間のハーフです」

二章 九話

ベッドに横たわり、遊乃は思う。どうしてだろう。たまに思う。

母親は確かに夜族、化け物だった。人と意思疎通を交わせ、人と交わることができる。吸血鬼、夜叉、狼男あるいは獣人、傀儡けものびと使い或いは魔物使いと言われる四つの代表的な、夜を支配している夜掌族たち。〈魔術師〉と並ぶべく恐ろしい存在だ。

別に母親は夜叉面なわけではなかった。母親は美人だ。夜叉とは古来からいて、その本性は夜になると戦いの血が騒ぎ、〈影〉がうろつく狂乱たる闇の森の中で暴れ回るといふものだった。近くににいる者は同じ仲間以外は、人でも見境なく殺した。鬼夜叉の母は全ての夜叉を掌握し、そして獣人たちよりも強かった。夜族の中では魂喰いの最高位と同じかそれ以上とも言われる。

今でも夜は〈影〉を狩っている。遊乃の母親もそうだった。滅法強く、〈影〉が逃げ出すほどだったという。

遊乃母親も、父親と交わるまでは純血を保って生きてきたのだ。それはもう、時代の流れなのだろう。夜族という存在は時代の裏に隠れて存在してきた。だが、もう夜が彼らをいつまでも隠してくれる状況ではないのだ。純血種の数は一激減した。しかしそれでも、彼ら特有の性質は残った。それに夜族になるには血だけが条件でもない。吸血鬼なら血を吸われれば一応下等吸血鬼で、素質さえあれば奴隷のような扱いではなく、吸われた側と同等クラスの吸血鬼になることも可能だ。

夜族とはいえ、人生の長さは人と同じだ。物語のように吸血鬼は無限の生命を持っているわけではない。夜叉の母親も年相応の老け方をしていた。

夜族という存在をああも忌み嫌う者たちがいる中で、まともに自分の素性を言えるはずがない。血液型検査や検便くらいでは他の人間と変わらないので隠すことができる。だが、日輪教の連中は能力

者の集まりだ。それも、多種族を見極める能力を有している者がいた。つまり、鼻が聞くのだ。

凄惨な過去の事件も今は昔、とするには大して年月も経っていないが、彼女にとっては一刻もはやく忘れたい過去だった。

最近、清輝が自分を見る目が妙だ。何か、同情するような、哀れむような表情をする。遊乃はそれが嫌だった。清輝に過去の事件を知られたのだろうか。

知られたくなかった。だが突き詰めていけば、自分の正体もわかってしまうのだろう。清輝だけでは無理でも影狩りの中には協力な情報網があるようだから。清輝と親しい赤井などが本気になれば……。

清輝には真実を話したほうがいいのかな？ 遊乃は思うが、果たして普通の人間である清輝が、自分の正体を知ってどう思うだろうか。

眠れなかった。

二章 十話

赤井は今日も今日とて单身、〈影〉狩りをしていた。自分一人で片付けられない事柄では河西などとの協力を得た。清輝は使えるが、今はそっとしておくことにした。赤井には色々やるがあった。彼の望みは夜族の抹殺だった。

この前の病院でそのことを再び思い出した。許せなかった。

「何故急にまた……怒りがぶり返したみたいだぞ」

一緒に呑むとき際、河西が赤井の肩を叩いた。

「そうですね。この前病院で〈影〉と戦ったんです。寄生タイプの〈影〉です。そして操られた看護婦がですね……妻そっくりだった」「そうか……」

話はそれで終わった。

赤井の妻と娘は狼に惨殺されている。大狼たいろうという〈影〉によって。その〈影〉は名のとおり狼に似た〈影〉なのだが、大きさは影犬と同じようなものだ。だが別格のスピードと“力”を持った、ランクAを超えた〈影〉だ。

そのとき、赤井は車を走らせていた。時刻は八時。〈影〉が跋扈していた。しかしいざとなればやつつけてやるという気でいた。その頃彼は二十六歳。血気盛んな若者だった。

だが彼の自信は脆くも崩れ去る。人気の少ない土手沿いの道に現れたのは大狼だった。その傍らに、髪の毛の長い女がいた。狂気を浮かべて笑みのその女を見て、赤井は強烈な畏怖を感じた。

〈影〉は衝撃波で車を吹き飛ばした。赤井は防壁を車全体に張り巡らせた。これは大層集中力を使うし、自分に強力な負荷を与える大技だった。

車は転倒して天井が地面についてしまうが、赤井は外に出た。娘達は無事だ。さっさと〈影〉を倒さないといけない。しかし、大狼はにやりと笑ったように見えた。狼が笑えるとすればだが。そして

去ってしまった。素早すぎるほどに素早い動きだった。

夜族はいまだにやついた笑みを崩さなかった。夜族、魔物使い。〈影〉を手なづけ、操ることができるといふ存在だ。当時赤井の名は有名で、大狼は去ったが、魔物使いによって他の〈影〉が集まってきた。尋常じゃない〈影〉だ。周りに民家もなく、あったとしても助けを呼ぶ暇はなかっただろう。

赤井は妻と娘に車にいるよう命じた。赤井は車の前に立ち、死を覚悟で家族を守ろうとした。妻の叫び声が聞こえるが、そこにいろと一喝する。

〈影〉たちが迫ってきている。今まで彼が倒してきた〈影〉が大勢見受けられた。

これは罰なのだろうか。〈影〉を退治してきたことにより、〈影〉の報復を受ける……？

魔物使いはにやにやとした狂人の笑みを貼り付けたまま、くるっときびすを返すと夜の闇に消えていった。怒号が上がり、凄まじい喧噪がしばらく続いた。

一時間後には影狩りたちが駆けつけ、赤井は助かった。だが妻と娘はとうに死んでいた。車は燃えていた。〈影〉の猛攻に、守りきれなかったのだ。赤井は血だらけで一步遅かったら出血死していた。その事件を皮切りに半年ほど、頭角を現してきた影狩りを狙った蛮行が続出した。しかしその一人を返り討ちにすると、ばったりと止んだ。正体はわからずじまいだった。

また始まったのだ。だが今度は、自分が必ず返り討ちにしてやる。そのためにはこちらから攻めなくては駄目なのだ。

その一人と、遭遇する。思った通り、影狩り達が〈影〉と戦っている最中にそれは影狩りに近付いていた。赤井はその背後についたが、感づかれた。相手は振り向く。その顔は般若の面によって隠されている。が、大柄なその体軀は隠せない。体型だけ見ると男なのだが、髪は女のように長かった。

「貴様らは夜族の類なのか？」

赤井は刀を相手に向けていた。その切っ先に、ありったけの圧を込めて。

「違うな、赤井君」

その声は太く、明らかに男の声だった。

「私は人間だ。夜掌族というのは、もしかして君を襲った傀儡使いのことではないのかな？」

男の声を聞く限りでは、それなりに高齢だ。五十は言っている。発せられる気配からただ者ではないことが伺える。

「夜族といえば君もそうだろうに。獣人のクォーターよ。その力は減じているが、優秀だった〈魔術師〉である君の母親の血が君を力を損ねていない。私からしてみれば君は血に恵まれている」

「ならお前は何なのだ？」

赤井の言葉に、相手はたじろいだようだった。一步退く。

「私は失敗作です。〈魔術師〉でもない。かといって夜族でもない。だが人としての誇りを失ってはいない。私は〈魔術師〉とも夜族とも戦える。貴様も殺せるということだ、赤井秀一君」

赤井は防壁を広げた。それは相手を寄せ付けないほどのものとなるが、それにさしたる意味はなかった。相手を一瞬だけ戸惑わせるが、ただの小手先の技でしかない。相手は防壁を手刀で瞬時に破り裂き、一気に赤井に距離を詰めた。相手のスピードは予想できるのだが、それに対応できない。腹を手刀で思い切り攻撃される。防壁が完全に壊れる。随分、攻撃力の高い手刀だ。

「私の手刀は一瞬で人の首をはねれますよ」

「なら俺の爪は一瞬でお前の首を切り裂けるさ」

赤井の手は変化していた。夜の中にあって、彼は獣の爪を生やしていた。獣の爪、といってもこんなに鋭い爪をもった動物などいやしないだろう。五つの爪のどれもがナイフのように長く、そしてそれ以上に尖っている。爪は黄色かった。

彼の体も変化していた。筋肉が普段よりも膨れあがる。さらに、顔つきも変化する。口には牙が生え、犬の口吻のように少しだけ口

先が尖っていく。目も黄色く、鰐のような縦に長く、横に短い瞳になる。

「やはり血も薄まればその程度の変身か。映画の狼男のほうがよっぽど化け物だ」

仮面の男はあざ笑った。

「嘗めるなよ」

赤井の速度は速く、相手の反応は遅れた。魔獣に近くなった赤井は、最高の衝撃波を投射した。

轟音が響く。

仮面の男は生きていたが、かろうじてのようだった。体はふらつき、仮面の下に血を流している。

「あんたはやはり、ちゃんと殺しておくべきだったんだ。あんな馬鹿女に頼らずに」

「だがお前たちは暗殺をしようと思えば、その機会があったのではないのか？」

「警戒網は厳しかったのだ。貴様は自分の強さに自身があって単身挑んできたのだろうが、貴様など我らは歯牙にも掛けん。怖いのは貴様の裏にいる者たちだ。貴様は所詮その者達にとって利用できる」と判断されているから守られているにすぎん」

男は膝を付いた。

赤井は男に近づき、仮面をはぎ取った。仮面と共に、髪が取れた。桂のようだ。禿げ散らかった冴えない小太りの中年男の顔がそこにはあった。だがその目を見れば、その者が普通の者ではないということがわかる。常に死線をかいくぐって生きてきた者の、力強くも恐ろしい目だった。

「言いたいことはそれだけか？ 俺が守られているか。そんなことは知っているさ。だが人間社会というのは利用しあって成立しているんだ。俺も自分の役割を演じているのさ。本能のままに、な」

男をどうしようか、赤井は迷った。このまま殺してしまってもいいのだが、生け捕りにすれば何らかの情報が得られるかもしれない。

だが逡巡した後、赤井は宣言したとおり男の首を斬り裂いた。血が吹き飛び、赤井は血塗れになる。男の胴体が後ろに倒れ、地面に当たる小さな音がした。

これでいい。〈影〉は死んだら消滅するが、人間は処分しない限り消えることはない。これが、人を殺すことと〈影〉を殺すことの違い。これをよく覚えておきたい。赤井は目を閉じた。人を殺めた。これで八人目だ。影狩りに仇なすものをひっそりと、闇に紛れて倒してきた。数は増えても、人を殺すという作業は慣れないものだ。

どうせこの男が知っている情報など、影狩りを操る者たちにとつては周知の事実だ。

そして赤井も、少しだけ情報を握っている。

真紅眼の王。それは、夜族すら恐れる者。闇を好む者の頂点にして〈影〉を操り、〈影〉を使役できる存在。

そんな存在が実際にいるのかどうか、定かではないとされていたが、最近ではそれが純然たる事実だというのが一部の者では定着している。

どういった存在なのか？ 確定ではないが、それは邪神であるという。

〈悪霊〉もそうだ。純粹なる者の魂に宿り、人を殺める……あの存在のように、邪悪なる古代の神の魂が入っている。夜掌族や〈魔術師〉とは関係のない、呪術を信仰していた人々が崇めていたという存在。それが、真紅眼の王。夜を昼に変える存在だという。

この情報が果たして本当なのかわからない。事態が今後どういふふうに変化するのかわからないが、今倒している仮面の存在は彼の手下だという。本当なら、倒し続けていけば彼に出会えるはずだ。紅い目をした者に。

だが赤井秀一にはその前に、一つの試練があった。

二章 十一話

枝？憐華と伊藤司の両名。共に能力者の中では最強の二人と謳われる者たちが動いている。そんな情報を清輝は小耳に挟んだが、自分に関係があるとも思えなかったので気にとめていない。雲の上の連中のことはわからない。今問題なのは、〈悪霊〉という存在それに遊乃のことだ。千夏が言うには、遊乃は狂気を隠して生きている、夜族と人間のハーフだという。

だが清輝はそんなことは気にしなかった。その後の千夏の顔は、どうも気に食わない、という様子だった。まるで清輝がそのことについて何らかの嫌悪を示してくれたほうが面白かった、といった様子だった。

「驚かないんですか？」

「驚いたよ。すぐくね。でも、遊乃は遊乃だ。狂ってるなんてことはない。彼女はまともだよ」

その後彼女は不愉快そうにしていた。清輝の反応は千夏にとって予想外だったようだ。

あれから何度か千夏と一緒に影狩りをしたが、彼女はあれ以来少し清輝に対する接し方を変えてきた。最初の頃の初々しい感じに似ているが、ずっと心を開き、それでいて清輝を尊敬するような眼差しで見るのだ。清輝は多少どぎまぎしながらも、よい話し相手ができたと喜んでいた。

千夏と目があう。彼女はにこりとして、近付いてきた。そして彼女は話しかけようとして少しためらい、やがて口にした。

「清輝さんはあたしの秘密を知っても驚かないでくれますか？」

清輝は眉をひそめた。

「永戸の秘密って？」

千夏は目が曇る。

「あたし、人を殺したことがあるんです」

清輝は言葉に窮した。

「冗談じゃないんだろ」

「勿論。そのことで、誰かに相談したかった。誰かが相談にのってくれないと、乗り越えられないような気がして」

彼女はファミレスのときは打って変わって深刻な表情で、清輝は彼女に悩みに乗れるのだろうかと不安を感じた。

何はともあれ、とにかく今は影狩りに集中しないと。遊乃のほうを見ると、遊乃は清輝を見てほほえみかけた。少し、寂しそうな微笑みだった。

何か勘違いしているなと清輝は思う。最近少し千夏と喋る機会が多かったから。そして遊乃と喋る機会が減った。

馬鹿遊乃め。いつも誰を思って、切ない夜を迎えていると思うているのだろうか。

伝えないと。いい加減。

二章 十二話

影狩りが終わると遊乃は早々に帰ろうとする。清輝は彼女を止める。

「ちょっと待った」

「何よ、テル」

「今から飯でも食べにいかないかな」

遊乃の表情は変わらない。

「いいけど、何食べるの」

「酒飲みたい。居酒屋にでも」

千夏がこちらを恨めしそうに見ているが、気にしないことにする。彼女の悩みも大事かもしれない。仲間のことだから。しかし清輝が一番大事なのは遊乃なのだ。

最寄りの居酒屋でビールを飲む。やはり、一日の終わりという感じがする。遊乃は酒に強いが、特に好きではないようなのでビールを少しずつ飲んでいる。

互いに、ぎこちなかった。一緒に食事をするのは初めてではないが、そのときは清輝が自警団になった祝いのようなものだった。

「たまには遊乃と二人で食事したかったんだ」

「ここはゆったりしてて落ち着く」

「そっか。よかった」

淡々と運ばれたものを食べる。清輝は特に酒が強くない。だから、ビールも二杯程度で終わりにし、軽いカクテルを飲むことにした。遊乃はビールを飲み終えてすでに三杯目だ。

戦いも、酒も敵わない。普通男のほうが力も、酒の強さも大抵の女よりも上回るはずだ。

相手は夜族のトップの血だ。鬼夜叉とはもともと女しかおらず、女は格下の夜叉と結ばれていったようだ。

ただの人間である自分には彼女を上回ることにはできないのだろうか。清輝の頭の中では、ネガティブなそんな思いが払拭されないでいた。それが遊乃に対してのかすかな反感だとすれば、結局それが差別となり、清輝が思い描くような関係には達せられないであろう。清輝はそう思い、そんな思いを断ち切ろうとする。

「千夏ちゃんはどう？ 結構強いでしょ」

「ああ。遊乃には敵わないけど、さすがに即戦力として連れて来られただけあるよ。他の二人も大したもんだ。あの坊主の斉藤有樹も主戦力になってるし。旧メンバーのほうが負けているところもあるよ」

「みんな結構粒ぞろいだけど、やっぱり影狩り経験者はすごいのかもね」

「そうかな。だけど神田さん最近冴えないって思わない？」

遊乃は少ししかめ面をする。

「あの人、最近ちょっと不真面目な部分があると思うんだ。たぶん、恋人に心酔してるんだと思うけど。なまじ半端に強いと生き死にに鈍くなるのが危ない。下手すると大けがする」

死ぬかもしれないとは遊乃は言わなかったが、確かに今の神田さんは少し危うい感じがする。昔は色々助けてくれた頼りがいのある人だった。

「人間は変わっていくよね。テルだって最初は全然頼りなかったけど……今は自警団の中では誰よりも頼もしく思えるもの」

「そうかな」

「真樹椰だって言ってた。テルは凄く強くなったって。このままいけば副団長になれるって。でもまあ、団長はあたしだけ」

「待てよ。充さんや的場さんに俺が敵うと思う？」

遊乃は笑った。

「充さんに勝つにはもう少しかかるかなあ。的場さんには当分無理だろうね。だけど、やれないこともないよ。努力さえすれば。あの体格に騙されちゃ駄目。的場さんは多勢には強いけど、それでも強

力な技一発でやられちゃうこともあると思う。可能性はいくらでもあるんだから」

遊乃のいうことは清輝を励ましているようだが、清輝には遊乃がすでに的場を超えているということが確定したように思えて、少し沈んだ。的場の強さは異常だ。影狩りにだってあんな強い男はそういない。〈魔術師〉相手でも勝てるかもしれない。そんな男だ。影狩りで班長をしていたくらいだ。凄いはずだ。遊乃はそんな男を超えてしまったのだろうか。

カクテルを一気飲みする。

「そんなに飲んで大丈夫なの？」

遊乃は心配そうにするが、自身は余裕そうにとビールを呷った。

「遊乃は強いよ」

「そうだね」

清輝はやり場のない苛立ちを感じた。こんな気分になってしまう自分がたまらなく嫌だった。相手は好きな相手なのに、この世の誰よりも好きなのに、この世の誰よりも嫉妬している。

「だけど私はちよつと変わってるから。それで強いんだよ」

「それは……どういうこと」

目と目があう。遊乃は真面目な目をしている。そのどこか攻撃的な顔つきが、清輝はたまらなく魅力的に思うのだ。

「……別に。ちよつとね。テルは気にしないで良いよ。あたしが普通じゃないだけなんだから」

「俺にもう少し心を開いてくれないんじゃないかな」

そんな台詞を吐いたとき、店員がつまみをもって現れた。清輝は顔を少し赤らめていた。自分でも思わずそんな台詞を吐いてしまったが、どんなふうに遊乃は思うだろうか。

「それって意味深な言い方だ」

遊乃は目をテーブルに反らして言った。

清輝は予感があった。それは能力者特有の直感のようなものかもしれない。今の言葉で清輝は確信めいたものを感じたのだ。啓示を

受けた、といってもいいかもしれない。

これはいける。

「俺が遊乃の過去について少し知っていると云ったら遊乃はどう思う？」

「団長から聞いたの？ 他言無用なはずなんだけどな」

「団長じゃないよ。赤井さんなんだ」

「そうなんだ、あのサングラスがね……まあ、別に、清輝が知っても別にいいよ。でもどこまで知ってるの？」

「遊乃が宗教団体組織と戦ったこと。あと遊乃が、夜掌族のハーフだってこと」

沈黙が降り、清輝は黙る遊乃の顔を見られなかった。一体どんな表情をしているのだろう。しかし、ちらりと見ると遊乃は俯いていた。

彼女の反応は気になった。しかし、どんな反応を見せようが清輝は動揺しないつもりだった。

「そこまでわかってたんだ。別に、何も思わないよ。清輝がそれを知ったって、どうこうするわけじゃないんでしょ？」

「当然だろ。大体夜族だったって人と同類だ。同じ人間じゃないか。それに遊乃は遊乃だし」

遊乃が突然、清輝の手を握ってきた。

「遊乃……？」

「このことは他の人には黙っていてね」

清輝はああ、と言って頷いたが、千夏が知っている事実はとりあえず黙っていることにした。彼女が清輝に喋ったように他の連中にも喋らなければいいが。

「清輝はあたしのことを大事に思ってくれてる」顔を俯かせたまま、いつもとは違う気弱な言葉で遊乃は言った。

「俺には遊乃は大事な存在だから」

互いが顔を赤らめた。

遊乃の手を清輝は握りかえた。

二章 十三話

清輝と遊乃が飲んでいた頃、千夏と御影健が共にドライブをしていた。誘ったのは栄太だ。彼は前から千夏に目をつけていたようで、二人きりになるとすぐに彼女を夜景を見に行こうという口実で車に連れ込んだのだ。理由通り、栄太は彼女を街が一望できる峠まで連れて行った。見晴台に駐車すると二人は外に出た。風が強かった。

「寒いだろ」

そう言っただけ健は彼女の肩に腕を回したが、あまり好印象とはいえない様子だった。だが健は離したりしない。寒いのは事実だった。

街は煌めき、それを見ている二人は恋人のようにも見えた。

「何故私をここに連れてきてくれたんですか？」

やがて千夏が言った。

「いや、なんとなく。もし暇だったら、夜景を見せたいと思ったんだよね」

健にとってはこんなものは日常茶飯事だった。千夏をものにしたという気持ちはあるようだが、彼は相手をする女には事欠かない。プレイボーイだ。一時期遊乃をも狙ったが、全くなびかないのを見ると早々に諦めた。別に喧嘩が男よりも遙かに強かろうが健は気にしなかったが、相手にされないのでは意味がない。

このままホテルにでも連れて行けるだろうかと思いついた。健は考える。難しそうだな。少し話をしてみよう。

「千夏ちゃんは最近清輝と仲がいいみたいだったね。奴のことが好きなの？」

千夏は少しためらいつつも、ゆっくりと頷いた。

「へえ。どこがいいの？」

健にはわからない。清輝はあまり女付き合いが得意ではなさそうだが。わりかし、整った顔をしているかもしれないが、純情そうな様子が健は好かなかった。男たるものの女を常に喜ばせていないと駄

目ではないだろうか。それが男たる者の努めだ。

「優しいところ、かな」

千夏はそういうと笑い、そして哀しげな表情をする。

「清輝も君みたいな子に思われて、羨ましいよ」

まだまだ健は諦めていなかった。

「でも清輝さんは西城さんが好きなんです」

「はあ。いいじゃん。他に男はいくらでもいる」

少し配慮に欠けた言葉だったかもしれない。だが自分に靡かない女には用はない。自分とは関係のない恋の相談も、くだらない。

帰ろう。

「ねえ、質問があるんですが」

千夏がまっすぐに健を見ている。

「なに？」

「御影さんは人を殺したこと、ありますか？」

意外な質問だ。こんなところである質問ではない。ムードというのをこの女は理解しないのかもしれない。

「いやあ、ないね。〈影〉ならいくらでも倒してきたけど。ここだけの話、そろそろ〈影〉退治なんてやめて別の職種につきたいんだけどね」

「私は人を殺したことがあるんです」

「そうなんだ？」

半分どうでもよかったが、もう半分は興味を示した。

「何人殺したの？」

千夏はそれには答えたくない、といったように顔を俯かせた。

「とにかく、殺したんです。答えてください。人は自分がそうしないとならないと思ったら、相手を殺す権利があると思いますか？」
「なんだかややこしい、というより面倒な話になってきたなと健は思う。少し考えるが、彼女の言っていることは少しおかしいと首を捻る。」

「殺さないといけない状況って事？」

「そうです。相手を殺さないで、自分が殺される。そんな状況です」
「なら殺すしかないんじゃないかな。俺ならそうするね。それって
正当防衛ってことだろ」

千夏は神妙な顔をした。彼女はその言葉に少し疑いの色を向けているように見える。健はそんな彼女に対してどうも、引っかけりを覚えた。

「そんなに自分を責めることはないんじゃない。だって、そうしないと君は死んでたんだろう」

「はい。そうですね」

健は眉をひそめた。この女、悩みのように打ち明けているが、どうも受け答えが軽く思える。本当は悩んでなどいないのではないか、そんなふうに見受けられた。

「じゃあ気にすることないじゃない」

「わかりました。ありがとうございます。少しは気持ちが悪くなりました」

まるでリトマス紙になったような気分だった。この女、自分を試している……あるいは、こちらの返事を何かの材料として使っているような。

試されるのも利用されるのも嫌だった。面倒だ。早いところ家に連れ帰ってさよならしてしまおう。

「送るよ。帰ろう」

「そうですね」

彼女はにこりとしてそう返す。食えない女だと健は不愉快になったが、それ以上に不気味さを覚えた。

二章 十四話（前書き）

長い

二章 十四話

とある土曜日に自警団の仲間同士集い、近場の河原にあるバーベキュー場でバーベキューを開いた。思いついたのは的場で、ほとんど全員が参加した。面倒くさがりの健も参加した。千夏や斉藤有樹、赤池克也も参加する。

清輝は遊乃がいるので当然、参加した。一緒に飲んで以来二人の仲は深まった。まだ恋人には発展していないが、時間の問題に思えた。今回は遊乃と仲のいい真央や真樹椰が彼女を中心に喋っているので、おそらく二人で話す機会はないのだろう。残念に思う。

その代わり千夏とは喋った。というのも、千夏がまるで清輝を他の連中が近付かせないかのように独占するからだ。清輝は戸惑いつつも、この前千夏に対し少し冷たかったのでその償いと思い彼女とは仲良く喋った。二人はたわいもない会話を楽しんだ。焼けた肉を箸で清輝の口に渡そうとするが、清輝は遊乃や周りの目が気になり、それを拒んだ。

「あたしの愛が受け入れられないんですね」

「そういうことは言わないでくれ」

「そうですね。清輝先輩は西城さんのものですもん」

千夏は清輝にしか聞こえない声でそういうと、ふふっと笑った。

「……ところでこの前悩みがあるっていったろ？ あれは——」

「ああ、そのことはもういいんです。あ、じゃあ一つだけ。もし清輝さんがいきなり目の前にいる人間を殺したい衝動に駆られたと——」

「何だって？」

清輝が彼女の喋りを中断させると、千夏は少し目つきを悪くした。「黙ってきいてください。——殺したくなったらします。そして、どうします？ 自制しますか、それとも殺しますか。あるいは痛めつけますか」

「殺したい衝動なんて駆られないよ」

千夏は思案するように瞳を上げる。

「そうですねえ、それじゃあ、仮にそれが親の仇、あるいは恋人の仇だとしましょう。それなら、そういう感情になるでしょう？」

「想像してみるよ」

とはいえ難しかった。実際両親は健在なのだ。だから清輝は自分が遊乃だと思ふことにした。両親を殺された遊乃はどういう気持ちだろう。惨殺された両親を見る彼女。まだ中学生。まだまだ親にいて貰って欲しい年齢だ。だが彼女の親はむごたしく殺された。そのとき、彼女は……。

「なんで泣いてるんです？」

千夏がおかしそうに言う。

「何でもない。だけど俺は憎しみよりも哀しみが強くて、相手に対して怒りを覚えるような感情にはならないかもしれない。実際なってみないとわからないよ」

「本当に？ 西城さんが殺されても？」

遊乃の死。それは、一番想像したくないものだった。ふざけるな。これ以上、彼女を哀れにさせてたまるか。

「その表情は怒りですよ」

千夏の言葉にはっと我に返る。千夏の顔を見るとまるで清輝の表情を想定していたといわんばかりに、にやにやしている。腹が立つが、確かに清輝は激しい怒りに駆られた。おそらく相手は絶対に許さないだろう。

「そうだな。相手を殺すかもしれない」

それが誇張表現だとも思えなかったので、清輝は思ったままに言った。

「わかりました」

千夏はそう言うのと、清輝から離れて、遊乃たちの輪に加わった。清輝は急に一人ぼっちになった。

一体彼女は何故あんなことを聞いてきたのだろう。一人肉を焼き、

食べる。わからないが、それにしても不愉快な質問だった。

「お酒飲んでる？」

寧々だった。彼女は清輝の隣に座り、その妖艶な体を隠すことなく見せた。彼女は露出の激しい紫のワンピースを着ており、胸の谷間と香水の甘い香りが清輝を刺激した。

「飲んでますよ」

「もっと飲みなさい」

清輝はよく冷えた缶ビールを手渡された。ビールはもううんざりだったが、手渡された以上は飲まなくてはならないような気がするので無理して飲んだ。

「清輝君は千夏ちゃんと仲がいいんだ。そんなに親しくしてると自分が好きな相手に愛想尽かされるんじゃない？」

清輝はうんざりするようにため息をつく。

「永戸は関係ありませんよ」

「あっそう。じゃあ、あたしとは？」

まじまじと目と目を合わせる。

「冗談はよしてください」

「冗談じゃないのに」

だがその顔は笑っていた。

「何だよ清輝、肉もって食べろよ」

御門健が乱入してくる。健は適当に清輝のさらに肉を放り投げる。

「ちよっと、やめてくれって。俺は俺のペースで食べてるんだから」
健は笑う。

「お前はいつも苦勞してるんだから、飯いっぱい食べないと駄目なんだよ」

「ほれ清輝。ウインナー。それに野菜も食べないとな」

幸司が皿に放り込む。清輝の皿は肉や野菜で埋まっている。

「調子に乗って……恨みますよ」

清輝はそれらを平らげようと頑張る。

「ほら清輝君、ビール飲まないと。お酒はすぐに飲まないと駄目な

んだから」

寧々は清輝の口元に缶を押しつけ、清輝は苦しそうにびーるを飲む。寧々は缶を口から離してくれず、結局一気飲みさせられた。

三人は馬鹿笑いし、清輝にさらに肉や酒を勧めた。しまいには的場がきてさらに肉を放るので、清輝はその場から逃げ出したくなった。だが、遊乃が清輝のほうを見て笑っているので、無理してその場にすることにした。少しでも元気になり、食欲も増えた。内心呆れてなければいいのだが。

そのあと清輝は倒れてしまい、気がいたら自分のアパートに戻っていた。

アパートのベッドに寝かされている。机の上には遊乃が寝むっていた。

状況がよく見えない。頭を整理して考える。すぐに答えは出た。

遊乃がベッドに寝かせてくれたのだ。そして自分が起きるまで待っていたのだろう。その間に眠ってしまったのだ。

なんて情け無い始末だ。だけど、もう充分恥をかいてきた。恥は上塗り、だ。

彼女を起こすのは悪いと思ったが、椅子で寝ているのでは寝心地が悪いだろう。

「遊乃」

声をかけるだけでよかったかもしれない。しかし、彼女に触れたという欲求に駆られ、肩を揺り動かす。

遊乃の反応は予想外だった。起きるだろうとは思ったが、彼女は一瞬で起き上がると清輝を組み敷いた。その手にはナイフが握られていて、目は爛々と輝いていた。彼女の瞳は燃えるような橙色をしていた。

「俺だよ、清輝だ」

苦しげに清輝は言った。遊乃の左手で首を絞めるように掴まれていたし、右手に持ったナイフは喉の皮膚に当たっていて、今にも上層部分を切断しそうだった。

遊乃は慌てて立ち上がり、ナイフをしまった。

「ご、ごめん」

「なんだっていうんだよ……」

清輝も起き上がる。

「ごめん、あたし……」

「別にいいよ。なんとなく、予想は付くし」

清輝に怒りはなかった。

「そんな目で見ないでよ」

「そんな目って？」

「なんだか哀れなものを見るような目つき。き、嫌いな」

清輝は思った。愛と哀は別なのか、似てるのか。同情と愛情は違うように、清輝の今の思いも、違うものだと思じたかった。

「誤解だ。その目、それが鬼夜叉の？」

遊乃は目を一瞬手で覆ってみせるが、すぐに手を戻す。

「そう。攻撃本能に駆られると瞳、目の色が変わる。このときには攻撃性が高まるから、理性が少し減る。すごく気分がいいの。困ったことにね」

「それは遊乃にとって嫌なものなの？」

遊乃は首をかしげ、それから横に振った。

「どっちでもない。だけど別に悪い気はしてない。戦いに高揚感を感ずるのは事実だし。できれば常にこの気分のまま戦いたいけど、それだとあまりにも危険すぎる。理性を欠いた状態で戦えばね。この目のときのあたしは普段より強いけど、それは自分の安全性を取っ払った状態。諸刃の剣でもあるの」

「それを制することができれば、遊乃はもっと強くなるのかもね」

「そんなに簡単なものじゃないんだけどね。とにかく、ごめんなさい」

遊乃は深く頭を下げた。

清輝はため息をついた。それに反応し、遊乃が神妙な顔つきで清輝を見る。おそらく清輝が怒っているかと思っただろう。清輝

は内心彼女のそんな表情を見れて嬉しく思う。

「遊乃は戦い続きで疲れたんだ。どこかでゆっくり休んだほうがいい」

「だけど、守らないとみんな死ぬ。あたしも死ぬ。清輝にはそれがどういうことかわかってない。日輪教との戦いであたしは仲間ができた。中には夜族もいた。だけど、みんな殺された。連中は〈影〉を操っていた。夜掌族、魔物使いもいたってこと。それにあればファントムと同じ、一枚岩の組織じゃない。必ず裏がある。そしてそれらを統括し、影狩りを潰そうとする連中がいる。そんな連中のことを考えたことがあるの？ あれらは殺す。きつとそうなの。ファントムが大きな組織の下部組織でしかないってのもたぶん事実。私達は何か大きなものに踊らされてる。それが……なんとなく、わかるの」

清輝は遊乃の両肩を掴むと、首を振った。

「遊乃は心配しすぎてる。自分一人で背負い込みすぎてる。そんなんじゃ押しつぶされちゃうよ。不安を抱え込んでいいわけがないだろう？ 何のための仲間なんだ。みんな、君に守られるために影狩りをしているわけじゃないんだぞ」

ベタな慰めだとはわかっている。だが清輝は必死だった。その目と目を合わせ、必死で彼は遊乃のことを慰め、励ました。

そして清輝は自制が聞かなくなってしまうた。力強く抱きしめる。

「清輝……」

「今度は俺が遊乃を守るよ。いや、違う。二人だ。俺と遊乃。互いに守り守られながら戦おう。一緒だ。俺達で戦うんだ」

遊乃の手が、だらりと下がった。

清輝は体を離す。

遊乃の顔色の変化を清輝は感じなかった。目は普段の目だが、どこか冷静そうな様子に、清輝は自分の思いが通じていないのでは、と内心不安になった。

「ありがとうテル」

そういう遊乃の顔は優しかった。

「テルがいうなら信じられると思う。さっきの言葉、忘れないで……あたしを守ってね」

遊乃はそれだけ言うとその場から去っていった。

清輝は硬直していた。なんだか恥ずかしい。だが、すっかりとしたい気分でもあった。自分の思いは伝わったはず。でも遊乃も同じ思いなのかな。

まあいいや。またアルコールが戻ってきたような気分。そのままベッドに行き、倒れるように眠ってしまう。

二章 十五話（前書き）

二章終わりです★

二章 十五話

八重田自警団副団長である充は一人、夜の中を彷徨っていた。彼は知っていた。自分が、狙われているということ。

なぜ自分が？ 答えも知っていた。自分が、確かに裏切り者だから。

充は仮面の者だった。そして充は、もうこれ以上逃れられないと言うことがわかっていた。

あの方がいるのだ。そうだ。あの方が完全に復活したようだ。完全に復活したあの方がどんなに凄いのか、充は知らない。だが完全復活を果たす前のあの方の力を垣間見ただけで、充は絶望を覚えてしまった。

だから、仮面の者——夜掌族と高等な能力者でできた団体である面鬼団めんきだんに参加した。あの方に目を付けられた以上、心の弱い充にはそれは不可避のものだった。真紅の眼を見ただけで、充は参ってしまった。それ以来、彼は人の心を失ってしまった。

そこを抜け出して自警団に入ったのは彼の良心が咎めたからではなく、たんに怖くなったからだ。このままではどのみち影狩りか百鬼に殺されるだろう。

影狩りを何度も殺してきた。逃げるときに仲間を一人、不意打ちで殺したが、そうしなければ逃げなかったので致し方ないことだったと充は思っている。

だがもう無理だ。奴らは自分のしたことを許していないだろう。だから彼は、もう自棄になっていた。いつでもこいといわんばかりに夜の田舎道を歩いている。彼の顔を見たものがいれば、彼が死に神に取り憑かれていることがわかっただろう。

やがて、きた。仮面の者。長い髪は鬘だろう。背の高い、逞しい男。

「きたな……やれよ。俺は逃げも隠れもしない」

これでいいんだ。やっと長年の苦渋から抜け出せる。

しかし、仮面の者の隣には別の存在がいた。

その者は姿こそ普通だった。中肉中背。体格だけ見れば、その者にさほど威圧を感じる必然はないはずだ。

しかし、圧せられるオーラを充は瞬時に感じ、そして彼はその場に膝を突いて倒れた。

駄目なんだ。彼は笑った。絶望の笑いだった。敵わないんだ。充はこの先の展開を予測してしまった。

死すら許されない。本当に、決死の覚悟を決めたというのに。

月は三日月で、夜風は微かだった。〈影〉が空を飛んでいるが、こちらには一切近寄ってこない。

「貴様是我らを裏切った。そう、私を裏切った」

その者は低くも美しい声でそう言った。

充は土下座をした。地面に頭をつく、懇願の土下座だった。

「申し訳ございません」

その者は仮面を取った。

ああ、ああ……！ 顔を上げた充は、やはりと思った。あの方だ。あの真紅の眼。間違いない。闇の君だ。あのときはまだ子供だった。今はもう青年に近付いているようだ。四年も前のことだ。

「お前が許される条件は一つ。私の言うとおりにあることをするとだ。異存はないな？」

「仰る通りに」

充は再び、奴隷へと戻った。

三章 悪霊 一話

国衛会が再び動き始めたというニュースは、影狩りたちに波紋を呼んでいた。彼らのことを鬱陶しいと思っている連中は多かったし、一部の事情通達も結局は全てがつながっているとわかりつつもやはり、国衛会という正義の名の下に暴れ狂う組織を好いていない者は多かった。だから彼らを迷惑がる存在は多く、無論それは一般人とて同様だった

動いているのは吾妻祐司と袂を分けた、なるせはじめ成瀬一だ。爆破の成瀬と云われているが、実際吾妻の仲間の中でも強力な部類に属していて、今は吾妻の仲間から数人自分の部下にし、そして新たな仲間を募って街で暴れていた。彼がやっていることは単なる暴力で、警察も動くほどの事態になっていた。特殊能力者で構成されていない警察を甘くみている能力者は多い。だが警察は特殊能力者相手には普段日本では見られないような強力な銃で応戦するし、公表できないような危険な代物を扱うケースもある。つまり、警察は全く馬鹿にできない、それどころか公然と戦っては、やはりいけない相手だった。国家権力は甘くくみられない。それに餅は餅屋。影狩りだって暴れる能力者を抑えるために動く。自衛隊も出動することもあると、能力者たちが暴れてそれで日本を転覆できる、ということは全くありえないし、一部の街を掌握することすら難しかった。

「ここはブラジルやメキシコじゃねえんだ」

機動隊はそういうと、グレネード弾を撃ち込んだ。能力者たちはこれは敵わないと逃げる。

国衛会はこれには関与しない。というのも、彼らはとうに成瀬達一派を切っているからだ。成瀬たちは完全に、自分達だけで動いているという状態になってしまった。成瀬一は最初から国衛会に迷惑をかけるつもりはなかったもので、これでよしとした。

まずは狂乱。それからだ。自分が終わっても、まだまだ代わりは

いる。一部の能力者たちが率先してこの日本を引っ張っていくのだ。吾妻柊司はそれができる男だ。成瀬はそれを確信している。あの男を中心に、日本はより一層の狂気を孕んだ世界になっていく。そして、転覆が始まる。

まずはその第一歩だ。一番強い組織である警察と自衛隊の混沌。それからそれらに隣接する影狩りと近い存在である能力者たちの防衛組織。朝廷は無関係だ。彼らは彼らの仲間同士でのことにしか関与しない。

それらを全部、まとめて狂わせ、一気に落とす。勿論成瀬や吾妻だけでは絶対に無理な大仕事だ。しかし、〈影〉が大いに役立ってくれるだろう。

理由はない。これは壮大な祭なんだ。国家転覆。それを実現させてやるんだ。この国に恨みなんてない。ただ、やりたい。したいようにやる。

成瀬一は、そういう男だった。

そして吾妻柊司もそういう男だった。

「成瀬、暴れているようですね」

大柄な体躯の名取國男が吾妻に声をかけた。

吾妻は自分の大きな机と立派な黒椅子に腰掛けながら名取に一瞥をくれた。それからにやりとする。彼は機嫌がよかった。

「まあ好きにさせてやろうじゃねえか。あいつは先駆けを努めてくれている。俺を裏切る形だな。国衛会ではなくあいつは俺のためにそうしてくれている。勿論もう俺の下に付く気なんてさらさらないんだろうが。それでも、あんなにできた部下はすごいねえ」

「いいのですか？ このまま放っておけば、あの数ではすぐに捕まるか殺されてしまいますよ。影狩りもきたら……」

「影狩りねえ。まあ、警察も躍起になるだろうし、まさかハジキミみたいなオモチャを使いこともしないだろうよ。いざとなったらなんでもする。だからまあ、お前の言うとおりに、あいつらを支えてやら

ないといけない。だからお前を呼んだんだろうが」

「察していました」

吾妻はグラスのロックのモルトを飲み、それから目が鋭くなる。

「なら、やることはわかってるな？ 今すぐだ」

「了解です。全て任せてもらっても？」

「いいぜ。許可しよう」

愚連隊という陳腐な名前の、名取の部隊は全員集結する。名取國男は吾妻の右腕とも言われる存在で、右腕は成瀬だった。名取の部下には同じ高校の同級生である堺未咲がいる。彼女は名取の部下だが実力はさして変わらない。二人はコンビネーションに優れた、よきパートナー同士のようなものだった。

ファントムとの戦いで怪我を負ったも回復した佐原猛も自身の部下を率いて愚連隊と合流する。目指すは繁華街。成瀬達の暴走の手助けをするのが目的だ。

「海人はすでに向かっているようだ」携帯電話をしまい、佐原が言った。

「俺達も急ごう」

名取が言い、総勢八十九人が動いた。数は少数だが、全員が能力者であり、しかも並の能力者は一人もいなかった。吾妻の虎の子の精鋭である。

繁華街中濃。機動警察と自衛隊が攻撃を加えている。成瀬一は得意の轟音のする凄まじい衝撃波で相手の攻撃を封じていたが、さすがに限界近かった。そろそろ逃げないとまずい。だがそんなときにまさかの元仲間たちからの救援があった。

「無茶やってるじゃねえか」佐原が笑って成瀬の隣に立つ。彼は成瀬ほどではないが強力な衝撃波で発砲する警官や自衛隊の攻撃を全て封じさせる。

それから名取國男も、衝撃波で警官たちを次々と、ピンポイント

に吹き飛ばし、再起不能にしていく。

「これまでにしよう。ずらからう。俺達のアジトはこの近くにあるからな」成瀬が言った。

〈影〉の現れる時刻。現れたのは、繁華街の路地裏に頻繁にでる人より大きな闇色の百足。黒百足だ。一般人の敵う相手ではない。警察や自衛隊にとっての阿鼻叫喚の地獄が始まった。〈影〉を能力者ではない者が相手をするということは大変だ。連中の影移動を視覚で捉えるのは実に困難だからだ。黒百足のような地を這うような〈影〉も影移動によって空を飛ぶかのように移動し、一気に距離を詰める。そして気付いたときには殺されている。

「まるで俺達の味方だぜ」逃げるさなか、佐原が言った。

「特殊防衛隊がくればそれもすぐに終わっちまうさ」名取が言った。

吾妻柊司は名取からの連絡を受け、まずまずの結果だと独りごちた。すぐに名取たちを帰還させる。こちらが成瀬と？がっているとおに感づかれてしまえばせっかくの成瀬の行為がふいになってしまう。

吾妻は笑う。しかしそれも時間の問題だ。すぐにこういった秘密裏の作戦も終わる。

裏切りの準備はほぼ揃っている。後は、号令を待つばかり。国衛会の上なんてほぼもぬけの殻だということを吾妻は知っている。だからだ。上階にいる者達は吾妻やその仲間を心底恐れている。抑止力だと思っていた桐生もすでにいない。

この作戦に意味なんてあるのだろうか。少なくとも、吾妻の目的は混沌だった。その中で、意義が見つかるかも知れない。〈影〉に能力者。これが牙を向けば、日本は終わるかも知れない。それで自分はどうするのだろう。首を絞めることになるだけではないか。

吾妻は行為自体に魅了されているだけなのかもしれないと思う。だが、今更辞められない。破壊と混沌。彼はそれに魅せられていた。そして彼はその思惑の向こう側に、自分が本来向かいたいと思っ

ていた道があることに気付いていなかった。

「機嫌はよさそうですね、吾妻」

傍らに居るのは藤池芽依。彼女は椅子に座る吾妻の両肩に手を掛けている。

「いいさ。ちよつとばかり上手くいきすぎている感はあるけどな。

混乱はもうすぐだぜ、芽依」

「こんなことをして何の得があるのか、私にはわからない」

「わかることなんて何もないんだよ。黙って俺の言うことに従ってな。ファントムは滅びたがあれは末端だ。それに俺が所属する国衛会もそうだ。上で静観して思い通りに箒が進んでいると思っている屑共を引きずり出す。そのためには色々やる必要があるんだよ」

「……まあ、どんなことがあっても、あたしは〈魔術師〉として貴方を守る」

吾妻は芽依の右手を優しく握んだ。

「それでいいんだ」

三章 二話

成瀬一の暴走の話は八重田自警団にも届いた。中濃ではだいぶ激戦が行われたようで、さらに〈影〉も出現し、警察達はかなりの数が動員。最終的には影狩りが参加したと。

「あんなところでる〈影〉っていったら限られるが……黒百足なんてよっぽどのがない限り現れない。最近、〈影〉の出現が前以上に頻繁になってきている」

団長は言う。

「だから、俺達にどうしろと？」御影健が言う。

「別に。注意しろってこと。最近仮面の連中の問題もあるし、実に危険だ。部隊の編成は今まででいいが、危険だと判断したらすぐにここ、アジトに戻ることだ。いいな」

清輝はファントムのことも国衛会のこともさほど興味がなかったが、一般人に能力者が迷惑を掛けるというのはいい行為ではないと感じた。できることなら〈影〉と同じように彼ら暴力的な組織も叩きつぶしたほうがいいのだろうが、それは警察や影狩りの仕事なのかもしれない。

今日の編成は清輝、斉藤有樹、神田、御影、それに千夏。メンツが心許ないと団長が加入し、六名。

清輝は遊乃がいなくて寂しいとは思ったが、団長もいるし、千夏や神田もいる。戦いでは問題ないだろうと考えた。

今回向かったのは近所の森だ。周辺には〈影〉が多く出没する。早速現れた。闇夜の中、それに紛れる黒さを持つ大型の蛇の姿。人と同じほどの胴を持ち、長さは二十メートルを超える。オロチだ。さすがの的場もこのサイズの〈影〉には戸惑ったようだ。だがこの巨体は素早く動き、逃げることは敵わない。

「こいつはやばいぞ。全員で囲んで刀や衝撃砲で突き殺せ」

オロチは団長ばかりを狙う。それは的場が自分を襲うようアピー

ルしているからだ。蛇の口は大きく、的場のような大型の男をも丸呑みにできそうだ。的場は衝撃波で相手を近づけさせない。

早いところ決めないと団長が丸呑みにされてしまう。清輝は蛇の胴を斬りつけた。切れるのだが、胴が太いせいで胴体そのものを切り離すことはできず、切られた箇所はすぐに修復されてしまう。

影移動によって蛇は空に舞うかのように動き、千夏に襲いかかった。千夏は間一髪、防壁を最大限にまで高めてガードし、蛇の猛攻から身を守ることに成功した。

蛇の傷はすぐに修復されるが体力は無尽蔵というわけにはいかない。そろそろ限界だったのだろう。何度も斬り、そして衝撃砲によって傷つけられた蛇は逃げようとしたが、逃げる前に力尽きた。巨大な〈影〉が霧散していく。

「こんなもん、何度も相手にしたくない」団長の的場は珍しく弱気な発言をする。

だが〈影〉は彼の思いを察せずにやってくる。次なる〈影〉は死霊という〈影〉で、影男に似ているがそれほど動きは俊敏でもない、ふらふらと動いてこちらに近づき、接近したときに自身を爆破させるという異常な〈影〉だ。爆破しても大抵は生きていて、自身を修復させて再び襲いかかってくる。死霊が爆発するとどういう仕組みか凄まじい衝撃が爆発した周囲に襲う。その衝撃はレベルの低い防壁を簡単に貫くほどで、中堅の影狩りでも戦いたくないという相手だ。

死霊の対処法は清輝達も理解している。近付かない、近づけさせない。近付く前に遠距離から倒す。それがセオリーだ。衝撃砲がやはり有効で、決まれば弱い能力者でもほぼ一撃で倒すことができるということがわかつている。

なので彼らは衝撃砲で襲い来る死霊を倒していく。数は多く、二十体ほどだがすぐに片付いてしまう。

しかし厄介な敵はまだいた。土蜘蛛だ。彼らは三匹いて、蜘蛛そのものの動きで素早く三匹が一斉に清輝を襲撃した。

彼らは多数で一人を攻めることがある。今回清輝が選ばれたのは彼が一番前に出ていたからだ。

清輝は防壁で彼らの攻撃を防いだが、鋭い彼らの前足をそういつまでも防げるものではなかった。まるでハンマーで思い切り薄壁を叩かれているようで清輝は生きた心地がしなかった。

それでも彼は防壁をそのままに、刀で一矢報いた。一匹の前足の一つを切り取った。それからさらに一薙ぎ。一突き。土蜘蛛の一匹を刺し殺し、他の二匹の前足を切りとることに成功した。

後は簡単だった。土蜘蛛は明らかに相手の攻撃に恐れをなしたようだ。清輝は防壁を再掛けし、跳躍。相手を飛び越し際に刀を突き刺した。着地すると土蜘蛛は一体になっていた。残り一体は斉藤の衝撃砲が土蜘蛛の腹を貫き、土蜘蛛は全滅した。

「見事」

的場が清輝の肩を叩いた。的場を見るに、心底感心したという様子だったので清輝は驚いた。団長がそんな顔をするなんて珍しいと彼は思う。

「本当、すごいですよ清輝さん。今の、西条さんみたいでした」坊主頭の斉藤がにやけ顔で言う。

「遊乃なら刀も使わず素手で倒してるさ」清輝は刀を鞘に収めた。「でも同じくらいかっこよかったですよ」

こいつ、最初の頃は軟派な野郎だと思っていたが、意外と良い奴かもしれない。清輝は気分がよくなった。

薄気味悪い不穏な気配に、いち早く気付いたのは的場だった。

「集まれ」的場はすでに隠れても無駄だということを察したようだ。五人の仮面の者が、彼らの周囲を取り囲んでいた。

「きやがった」斉藤が言った。普段は愉快そうな彼の顔が真剣になる。

「おいおい……五人もかよ」御影が呟いた。

清輝は彼の気持ちがあった。一体でも〈魔術師〉と同等の力を持っていた。それが五人。的場がいるとはいえ、分が悪すぎるので

はないか。

「大丈夫だよ」

そう声を掛けてきたのは自警団ではなかった。

清輝は自分の傍らに青年の姿を見た。その青年は二十代というこ
としかわからなかった。少しふさぎ込んでいるようにもみえるがそ
れなりに整った美しくもある顔立ちをしている。その目ははつきり
と眼光を放っていたが、それは微かに陰っても見えた。

そしてその青年の傍らに、長い黒髪をした美女がいた。

清輝は思う。美男美女である。そして雰囲気的に彼らは味方らし
い。影狩りからの支援だろうか。わかるのは、二人から発せられる
オーラは並ではないということだ。

この威圧感は……。

「あんたは誰だ？」

御影が青年に声を掛けた。

「俺は結城だ。あなた方に協力する」

「影狩りか？」 的場が聞いた。

的場も彼らのことを知らないようだと言清輝は思う。

「元ですけど」 結城と名乗る青年は答えた。

仮面の者たちが動いた。一人が高く跳躍し、手にするナイフで御
影を狙った。彼はそのまま死んでいたかもしれない。それだけ相手
の攻撃は早かった。

しかし的場の衝撃波が仮面の者に飛び、仮面の者は吹き飛んだ。
仮面が割れ、男の顔が露わになる。長い黒髪に高い鼻をした色白の
男。顔だけ見ると凄みは感じられない。しかし再び敵意を向けてき
たその目つきは修羅場をくぐってきた者にはわかるある種の狂気を
見つけることができた。

明らかに女と思われる仮面の者が猪突猛進してくる。とんでもな
いスピードに的場は吹き飛ばされる。どうやら強力な蹴りを入れら
れたようだ。

結城は女を蹴った。女は飛んだ。勢いのいい蹴りだった。

まるで遊乃みたいだと清輝は思った。もっとも、遊乃の蹴りはもつと凄まじいが。

それから結城は衝撃波を放った。その衝撃波の強さに自警団の面々は驚いた。

遊乃よりも凄い。清輝はそう感じた。充や的場、遊乃。その三人の衝撃波は凄い。しかし今の衝撃波はそれを越えている。この男、〈魔術師〉ではないだろうか。

しかし結城は刀を取り出し、一気に女に襲いかかった。刀は女の胴を斬ったが、防壁によって致命傷へは至らない。それでもその傷を見る限り、仮面の女はもう戦えないだろう。

女は背中を見せて後退していく。黒い地面に血が垂れる。

一際横幅のある仮面の者が結城に迫る。

そこで清輝はそろそろ動くべきだと思った。的場もすでに戻っている。

黒い鳥が三つ、それぞれ別々の仮面の者に襲いかかった。

女のほうが攻撃したのだと清輝はわかった。真樹椰と同じく、闇使いだ。しかも見るからに真樹椰より腕がよさそうだ。鳥の大きさとそのスピードが段違いだ。相手に当たったときの衝撃から察するに、威力も相当違う。黒い鳥退数はさらに数を増していく。

仮面の者の一人が清輝に襲いかかってきた。長身だ。男だろう。

男は刀を抜いた。

清輝も刀を抜く。防壁は最大限まで掛ける。負荷は大きいが、刀で斬り殺されるよりましだ。

相手は随分訓練しているようだ。剣道でもやっているのか、清輝は目も止まらない速度で体を切られた。防壁のおかげで無事だったが、彼の精神的なダメージは大きかった。

すぐさま後退する。チャンバラをやって勝てる相手ではないということがわかった。おそらく次の太刀を食らっていたら体が真っ二つか首が刎ねられていたかもしれない。

刀をしまい、清輝は衝撃砲を放つ。だが躲されてしまう。スピー

ドは充分だが、予測して動いているようだ。ならば、と清輝は両手を合わせ、指先に体内の気の流れを集中させる。全身の血管が破裂するかのような、嫌な感覚に清輝はその状態を解除したい気持ちに駆られる。長くは無理だと清輝は解き放った。銃口から離れた銃弾のような速さで相手へと一気に衝撃が突き進む。

仮面の男は回避が全く間に合わず、胸に直撃した。そして倒れ、動かなくなった。

すごい威力だと清輝はふらつきながら思う。鼻の下に違和感を覚えた。鼻水でも出たのだろうかと思いつくと、鼻血だった。この技は危険かもしれないと清輝は恐ろしく思った。

大きな音がした。音のほうを見ると、結城が相手を倒したところだった。しかし結城のほうもだいたい疲れているように見えた。

だが清輝はこの勝負はもらったなと感じた。残るは二人。その二人も闇使いの放つ攻撃に翻弄されていて、清輝たちに近づけないでいる。

とうとう彼らは逃げ出した。

「やったようだな」的場が言った。「二人の協力に感謝する」

「いえ……注意した方がいいですよ。自警団は影狩りとは違って死んだ後の補償が少ないんですよ」結城はにやりとする。

「結城……もしかして、結城潤か、あんたは」的場が言う。「ファントムの幹部を倒したっていう。あのときは俺も国衛会側で戦っていたんだ。覚えているよ。ガキ共に混じって、やりあったもんだ」

「俺はもう組織とは縁がないんですよ……ファントムとの戦いのこときだって大したこととしてないですし」結城潤はにっこりとそう言うのと、パートナーの佐藤瑠偉を呼び寄せた。

「それでは」

潤と瑠唯は去っていった。

「あれが結城潤か」清輝は口に出して言った。「夜の支配者を片手だけで圧倒。それにファントムの幹部をタイマンで倒したっていう」「あの右腕に一瞬でも触れると即死らしいぜ」御影が言った。

事実は多少脚色されていた。

三章 三話

遊乃に結城潤に会ったというと遊乃は随分興味を持ったようだ。ファントムとの戦いでトルシオを倒したという話は有名なようだ。

三強であるトルシオもやはり周囲では恐ろしい男と恐れられていた。「トルシオって何者なんだ？」清輝が聞いた。

「わからない。けどあたしは一度奴とやりあったことがある。そのときは日輪教のボディガードをやってたよ。とんでもなく強い男だった。隙も全くなし。あれをやったとするなら、結城って相当だよ」

「へえ。でも実際強かったよ。衝撃波の強さなんて自警団の誰よりも敵わないほどだったよ」

そういった後の遊乃の顔つきを見る限り、少し悔しそうだった。

「一回共闘してみたいな」

遊乃は言ったが、それは実現するのではないかと清輝は思った。

結城潤は影狩りには戻らない。彼は帰ってきたが、一人、宵闇の中にいた。いや、一人ではなかった。彼から少し離れたところに佐藤瑠偉がいて、周囲を警戒していた。

やがて彼女は結城潤へと近づき、彼がこちらを気付くのを待った。潤は気づき、振り返った。

「先にアパートに帰ってるから」

「そう……。わかった」

瑠唯は不満げな顔をする。

「俺は戻らないぞ。今日は新技を試してみたいし……。何よりも気分が落ち着かない。〈影〉を倒したい。いってくれ」

「全く……普通の公園デートって考えはないんだから」

「悪いね」

瑠唯は去っていく。

潤は深く息を吐いた。彼女とは上手くいつている。しかし恋人ではない。ただ一緒にいるだけだ。それでも互いに心の支えになっている。

小百合のことを考える。何度も病院には足を運んで必死に小百合から教わった癒しの手の技を試してみたのだが、小百合は起きてくれなかった。彼女はもう二度と起きないかもしれないと医者には宣告されている。潤は信じたくなかった。しかし、最近病院に足を運んでいない。

空はかなり薄暗くなっている。そろそろ〈影〉がでてくるはずだ。しかし現れたのは〈影〉ではなく、仮面の者たちだった。六人の仮面の者の背後に、一人だけ別格の風格を持つ仮面の者がいる。

分が悪い、とは潤は考えなかった。

影狩りを離れて二年。それなりに鍛錬を重ね、新たな技を覚え、越えるべき壁を越えてきた。自分でも信じられなかった。今の潤は昔以上の自信に満ちあふれていた。〈魔術師〉とやっても、同等に戦えるのではと思えるほどだった。

一人で〈影〉と戦ってきた。弱い〈影〉ではない。危険だといわれる〈影〉を次々と、たった一人で。死にかけたりもしたが、絶対に五体満足のまま生還した。その無謀ともいえる挑戦が彼を強くしていた。

仮面の者たちとの自分の距離を潤は掴める。彼らは強い。個々の実力の振り幅もあるが、全員が腕が立つ。二年の前の潤ならおそらく簡単にやられてしまっただろう。

数は多い。おそらくともに戦えば負ける。潤にはそれがわかった。

だから、まずは目くらましをする。衝撃破を地面に叩き付ける。猛烈な砂煙が辺りを舞う。

一人一人の殺気から、一番やりやすそうな者を見つける。その一人の胸に手を置き、接触してからの衝撃砲を放つ。最悪死んでしまふほど凶悪なやり方だが触れた防壁から強度がわかる。相手にとつ

ては鉄ハンマーを全力で叩き付けられたような衝撃だろう。

それから近くの者の首に蹴りを食らわす。潤は格闘が苦手だった。格闘を使わずに技を駆使して敵を倒すということを目指してきた。しかしそれは〈魔術師〉のやり方だ。潤は〈魔術師〉にはなれない。だから、体を鍛え、戦い方のトレーニングをした。全て自分で行った。体は前より筋力がついたし、何よりも？力？の使い方がよくわかった。蹴りも、パンチも。？力？の使い方によって凄まじい威力になる。

首に強烈な打撃を食らった者は倒れたようだ。おそらくこの戦いで起き上がることはないだろう。

ここまでだ。潤はそう判断した。仮面の者たちはどれも高レベルの強者たち。普通に戦えば確実にこちらが負ける。

だから潤は衝撃波を周囲に炸裂させる。まるで爆発のように。吾妻のやっていた技で、潤は不本意だがその技に憧れた。だからその技を扱えるようにした。吾妻の威力には到底及ばないが、潤はこの技は煙幕としても使えるということに戦いのさなか気付いた。

衝撃波によって仮面の者たちは後手に回った。誰もが上手く捌いたようだが、その間隙を突いて潤は遠くへ逃げていた。

三章 四話

ここまでくれば大丈夫だろう。潤は林の中にいた。懐かしい場所だ。よくここで〈影〉と戦った。もしかすると影狩りと接触するところもあるかもしれない。

「久しいじゃないか、結城潤」

驚いて振り返ると、そこには懐かしい顔がいた。

「桐生さん？」

「ああ。どうしてこんなところに？」

桐生夏雄だった。長い茶髪を伸ばし放題伸ばした彼はまるで野生児のようだったが、依然と同じく美しい顔立ちをしていた。

「桐生さんこそ、どうしてここに？」

「ちよつとね……散歩さ」

潤は彼の異質な威圧に気づき、後退した。よく見ると桐生は左手を後ろに隠している。何かを持っている……？

「桐生さん。左手に何を持っているんです」

「何でもいいじゃないか。佐藤瑠偉はどうしたの？ 君と一緒にじゃないのかい」

「いえ。左手を見せてください」

桐生はくすりと笑うと、隠していた左手を前に持ってきた。その手には仮面が握られていた。

一気に桐生は潤に近付いてきた。そして、彼は潤の衝撃波をはねのけると潤の右手を掴んだ。

「こっちだ」

潤は桐生に掴まれながら、林の中を走った。そして、茂みの中に身を隠される。

「入ってて。あいつがくるぜ」

潤はじつと気配を潜め、五感を集中させた。足音がする。近い。かなりの速度でこちらに近付いてくる。

茂みのすぐ前に、先ほどの仮面の者の一人、一番奥にいた強烈な威圧を感じた者が立っていた。周囲を探しているようだ。

「見失った……」それは意外にも透き通った声だった。男の声ではあるにせよ、綺麗な声だった。

「次は油断しないぞ、結城潤」

仮面の者は去っていった。

潤は手が震えていた。いやに、気持ちが悪い。

「あれは闇使いの一人だ。名前も俺は知っている」

「誰です？」

「恐ろしい闇使いの一人で男。これだけいえば大体該当するのに思いつくと思うけど」

潤にはわからない。大体、闇使いのことなんて知らない。瑠唯のことくらいしかわからないのだ。

「雀は可愛いかい？ 男女の間柄なんだろう」

「いえ。俺達は互いに寄り添うだけの間柄ですよ」

潤は茂みの中から姿を出した。

「なんで俺を襲う？ あんたも仮面の連中の仲間なのか？ あいつらは何者なんだ？」

「質問が多いな潤。まず最初の質問に答えると、君を襲うのは君を仲間にするから。まあファントムのときのこともあるし、君が仲間にならないなら殺すだろうね。君の性質は向こうも把握しているだろうし、たぶん殺す気だったんだろうね。殺す理由は、君があまりにも危険因子だから。そして俺が仮面の連中の仲間なのかという質問だが、これはイエスでもあり、ノーでもある。建前は俺は仲間だ。だが心では俺はあいつら百面団とは違う。大体団名がいてない。あいつらは何者かっという、あいつらは面鬼団といって、組織の中ではただの戦闘集団でそれ以外のことはしない連中だ。言えるのはとにかく戦闘能力が高いつてこと。その上にメサイアがくる」

「メサイア？」

「わからないだろうな。君は無知そうだから。結局戦いのことしか

知らない。それが結城潤だ」

好き勝手いいやがって。潤は気分を害した。

「ほら、怒った。単純な奴だよ君は。メサイアっていうのはな、この日本を牛耳るような組織ではないよ。ただ、陰謀論が先走りしているけど、そんな組織のことは誰も知らない。知っているのはほんの一握り。政府だって彼らのことは詳しくは知らない。

メサイアは救世主って意味な。その組織が刑務所のようにだと揶揄しているのは間違いない。彼らは百面団の上であり、国衛会やファントムやその他、あらゆる〈影〉を使った組織のトップであり、その頂点に箭麻穀市やまきいちがいる。彼は別名真紅眼の王などと呼ばれる」

「箭麻穀市……知らないな」

「君のような無知蒙昧な輩が知っているはずがない」

「俺は高卒だけど姫蘭はそれなりにレベルは高かった」潤は自分の名誉のために反論したが、桐生夏雄は馬鹿にしたような笑みを浮かべるだけだった。

「それであんたはそいつのために働いているのか？」

桐生は馬鹿にしたような表情を変えずに首を振った。

「俺は誰のためにも働いてない。自分が馬鹿な手下を率いて大将になつてればそれでよかった。だけど、今はただの下っ端にすぎない。百面団のな」

「それで、なんで俺を助けたんだ？」

桐生夏雄は不適に笑うと、そのままくるときびすを返し、去っていきこうとした。そのまま行ってしまうかと思われたが、動きが止まった。

「結城潤。君には沢山の仲間もいるだろうが、沢山の敵もいる。何故かというと、君の能力はあまりにも凄いからだ。どんなに防壁を張っても、君の能力なら硝子より簡単に壊して人体を破壊できる。重宝するのは当たり前さ」

「俺に沢山の仲間なんていない」

微かに笑い声が聞こえたような気がした。

「いるよ。自分でもわかっているはずだ。いいか、気をつけろよ。君は優秀なんだ。だけど、啼かぬなら、殺してしまえだ」

桐生は今度こそ去っていった。

メサイア。彼らの目的を結局聞き逃してしまった。しかし首謀者の名は割れた。矢埜毅市。知らない。聞いたこともない名前だ。桐生は何をしているんだろう。かつては共に戦った仲間なのに。

国衛会をも牛耳る……やはり噂通り、国衛会とファントムは同じ所に属しているということか。薄々、潤はそのことをわかっていた。どこか、同じ匂いを感じた。能力者の、潤の直感は鋭かった。

メサイアか。覚えておこう。

ところでもう大丈夫なのだろうか。潤は周囲を警戒しつつ、自分のアパートまで戻った。もう遅い。瑠唯も心配しているかもしれないが、おおかたどこかのバーで一人飲んだくれているのだろう。

三章 五話

ところで吾妻衞司はすでに戦力を整え、国衛会の中でも吾妻と対をなす？？良治を中心の武装集団を完全に打ちのめした。同じビルに属す彼らだが実際にやっていることは吾妻達の監視でしかなく、日頃戦ってきた吾妻達には敵わなかった。

もうこのビルも用なしだなと吾妻は何年も過ごしてきたオフィスを眺める。見晴らしはいい。中濃ほど賑わってはいないがビル街だし、ゆったりとした椅子に大きな机で飲む酒やコーヒーの時間は好きだった。

ここを去ろうと思っていたが、気が変わった。ここをのっとってしまおう。

吾妻は自分に敵対する者達を全て追い出し、そして国衛会の幹部の一人であり実質このビルを仕切っている矢田辰郎を完膚無きまでに倒し、もう一人の幹部であり矢田のパートナーの新津に意識を失った矢田を放った。

「そいつを国衛会のトップ連中に引き渡せ。いずれ俺達が引導を渡してやるって伝えろよ」

「ただで済むと思うなよ、吾妻。後ろ盾がないお前らにこの先何ができる？ 馬鹿共を扱う金はどこから手に入れる気だ？ やめておけ、お前如きが俺達に逆らうなんて——」

吾妻は新津の両こめかみを掴むと上に持ち上げた。

「ファントムみたいなこと言うなよな、新津。てめえもこいつと同じ目に遭いたいのか？」

新津は脅えた目で下を向き、血塗れで横たわる矢田を見た。

吾妻は新津を降ろした。

「行け。次に会うときはお互い殺し合いだ」

「お前の想像通りにはいかんよ」

最後に捨て台詞を吐くと新津は矢田を抱えながらビルの外に出た。

見送る吾妻の部下は冷たい視線を二人に投げかけていた。

「???たちはどうします?」部下が吾妻に尋ねる。

「仲間にできそうな奴は使え。他は好きにしてい」

これからだと吾妻は思った。ビルは自分のものにするが、あくまで仮宿とすることにした。幹部の誰かに管理を任せ、自分は見つからない場所に隠れるのだ。そして夜ごとに徘徊をする。

今日早速吾妻は夜の街を歩くことにした。おそらくまた影狩りたちとの戦いになるだろう

三章 六話

清輝は全力の松河遊乃を見たことがなかったということを最近知った。いや、全力というのとは違う。タガが外れた彼女をだ。

自警団の活動は日増しに警戒が強くなる一方で、団長をや副団長も頭を悩ませていた。この重圧に誰しもがこの中の誰かは自警団を去るだろうと思われた。

しかし、誰一人として自警団を辞めたいという者はいなかった。彼らは使命感に燃える若者でもあったし、その大半が能力を使って〈影〉を狩るという仕事にやりがいを感じていた。それでも〈影〉意外との戦い zu うんざりしている者は少なからずいた。

影狩りの動きは慌ただしく、自警団にも応援要請を求めてきた。彼らは仮面の連中との戦い to かなり人員を割いているようで、本来の〈影〉との仕事をそっちのけにせざるを得ない状況らしかった。そして極めつけに名瀬や吾妻ら元国衛会の連中の暴走である。彼らのスポンサーはわからないが、吾妻側に協力している勢力は少なからずいて、彼らに支援をしているようであった。

百面団とその仲間だと思われる能力者との戦いに、元国衛会の暴走。そしてさらに最近一般人を恐怖のどん底に落としている新たな〈影〉の出没である。

その〈影〉は他の〈影〉と違って俊敏ではなく、ゆっくりとした動きをする。人型の〈影〉で、どこことなく蜥蜴を思わせる姿をしていて、長い尾を持つ。彼らの恐ろしいところは民家に入っ てこれるということである。今まで彼ら〈影〉は民家に侵入することができなかった。その、まるで定められたような法則が、塗り替えられた。彼らは強引に家の中に侵入できる。その〈影〉の名は人蜥蜴と名付けられた。彼らの行動は鈍いが、〈影〉としての特徴で持っ て家の中にいる者達を全員殺すことは可能だった。返り討ちにケースもあったが、家の中に入っ てくる〈影〉というだけで人々は恐怖のどん

底に突き落とされた。

事態は深刻だった。百面団との問題も大事だが、このような危険きわまる状況に対処すべく自警団は見回り強化のほうを選択した。百面団は影狩りに任せておこうとしたのだ。しかし、結局はその両方と戦うことになった。

人蜥蜴はすぐに見つかった。見つけ次第、清輝はすぐに処分するよう心がけた。どの〈影〉よりも優先的にだ。遊乃もそうだ。彼女もそんな〈影〉がいるとわかって内心穏やかではないはずだ。いや、この中の全員がそう思っているはずだ。

人蜥蜴は他の大抵の〈影〉よりも弱かったので始末するのはたやすかった。しかしその数は問題だった。

「毎日毎日常に同じ場所を見張らないといけなくなる。じゃないとあいつらは絶対蠅のように湧いて出て民家に侵入する。冗談じゃない。無理だ。俺らじゃ対処できないぞ」 ある日御影が清輝に愚痴を言った。

「うん。すでに何千人の被害が出てる。国衛会とか百面団がどうとかって話じゃないよな」

だが百面団もやはり危険だった。彼らは街に現れ、何の罪もない民衆を襲い、そして住宅街に現れてはまるで嵐のように衝撃波でもって家々を破壊して回るのだった。そうしたことが二月ほど続いた。

清輝は疲れ果てていた。心と体両方が悲鳴を上げている。こうしている間にも家々が破壊され、街のビルも破壊されて無関係の人が怪我を負ったり殺されたりし、〈影〉によって人が惨殺されている。こんなことが続いたら自分に被害がなくなとも参ってしまう。これでは、地獄のようなものじゃないか。

携帯電話が鳴った。清輝は疲れ切っていたので、もし赤井だったりしたら断ろうと思った。

遊乃からだった。

「もしもし」

「今からそっちっていい？」

「勿論いいよ。大歓迎さ」力なくも嬉しそうに清輝は応じた。

遊乃はすぐにきた。彼女自身、どこか疲れた様子だった。清輝には遊乃の傷心がわかった。同じだからだった。

そして二人はテーブルに向かいあって食事を取り、それから大して弾まない会話をした。会話は弾まなかったが、清輝は、いや、二人とも少しだけ元気になっていた。

清輝は遊乃にキスをし、遊乃は彼の腰に両手を当ててそれに答えた。二人の目は情熱に濡れていて、互いを求めているのがよくわかった。

それから二人は寝室へ向かった。

三章 七話

清輝と遊乃が恋人関係になってもそれは自警団での仕事とは全く関係のないものだった。工作上、公平に接するのがプロであり、また生き残るための手段だった。私情は捨てないといけない。

本格的な戦いが迫っていた。自警団も、影狩りも、一致団結して戦わないとならない事態に発展していったのだ。それが中濃の繁華街で起きた。

まず、仮面の者たち——百面団が募った。影狩りもそれを予測していて、同じかそれ以上の数がいた。

そして成瀬や吾妻たちが騒ぎを嗅ぎつけてやってきた。それから闇使いの者たちが百面団を倒しノルマを稼ごうとやってきた。彼らはすぐにそれとわかる着物を着るのが普通だったが、百面団を狙っているのが割れているので普通の服装をしてきている。だがその異質は、わかる人にはわかるものだった。

影狩りの中には吉田辰巳もいたが、彼は神妙な顔をしていて、彼に話しかける者など一人もいなかった。無愛想だし、實際話しかけても友好的な言葉が返ってくるとは限らない男だった。

和泉はあれ以来隙さえあれば殺してやりたいほどに辰巳を憎んでいるようだが、吉田辰巳に隙などなかった。彼は辰巳の遙か後方にいるが、班長として長年やってきたその威圧に他の者は気圧されていた。後藤もいる。河原も一緒だ。しかし誰もがほぼ中央に立つ吉田辰巳から発せられる威圧には敵わない。剣先を額に突きつけられているような感覚に、影狩りは味方から発せられるその異質な闘気なようなものに気圧され、萎縮してしまう。

それでも救いはあった。辰巳の攻撃の矛先は影狩りではないということだ。

異質の気配を感じ取ったのは、少し離れた先で状況を瑠唯と共に見張っていた結城潤だった。微かに、何かの気配を彼は感じていた。

何だろうな。潤は冷や汗を掻いていた。どこからか発せられるプレスチャーに、気圧されそうになる。

機動隊が動いていたが、百面団の先頭の集団にも苦戦していた。影狩りが続き、事態は一気に収束するかに思えた。だが百面団の数も多く、そして他の部隊もいた。

革命連という部隊は、明らかに百面団と結束していた。彼らは全員紺色の上下の服を着ていて、そして他にも別の部隊があり、それらと結託しているようだった。黑夜叉団、殺戮隊がという名の部隊。いずれも百面団の仲間だった。

吾妻側も仮借ない攻撃を続ける。彼らは影狩りの仲間をすることに決めたようだ。それは最初からシナリオに入っていた。どのみち、百面団やその他の同じ者を主とする能力者で構成された戦闘集団を潰さない限り、吾妻達の未来はないとわかっているようだった。

それから、カエサルという集団が影狩りの後方を狙っていた。見る限り、敵の数は多く、闇使い影狩り自警団そして吾妻達が揃っていたとしても、抗しようがないかに見えた。しかし、それは間違いだった。

まず、吾妻が恐ろしかった。彼は足に力を集中させ、十八番であり、彼が暴凶星と言われる所以となった爆発力の高い攻撃を見舞った。

世界が壊れるのではないかという爆音と共に、ビルが崩れた。振動は周囲何キロにも及ぶ。

二年前とは比べものにならない規模の破壊力に、周囲は恐れた。

これはまるで天災じゃないか。

清輝はそんな風に思った。彼は自警団として影狩り連中と混じっていたわけだが、内心は嫌だった。こんなにもプレスチャーを感じる戦いは初めてで、敵も味方も化け物のように思えてならなかった。それに、〈影〉の気配もする。最近はどうな場所でも〈影〉が出る。人が多かろうが少なかろうが〈影〉が出てくる事態だ。今こう

して戦っている最中に現れてもおかしくはないのだ。

それが噂に聞く夜の支配者のような化け物だったら？ それにしても、吾妻衞司という人間は聞いてたとおりの化け物らしい。

さらに吾妻は二発、三発とあれをやるのだろうか。冗談じゃない。あんなの、敵も味方もあったものではないじゃないか。

前の列が動き出し、清輝は自分も動かなければいけないんだとぼんやり思った。

これはまるで、戦争だ。

肩を叩かれる。意外と強い叩き方だ。と、思ったら強く掴まれる。振り返ると赤井だった。

「赤井さん」

「緊張するな清輝。こんなことは大したものじゃない。お前がいつも通りの力を出せば大丈夫だからな。さあ、松河遊乃が前にいるんだろう？ 俺もフォローするから、いってやらないと」

遊乃……。ようやく結ばれた恋人。

遊乃から目を離しては駄目だ。

清輝は遊乃の背中を追った。

三章 八話

吾妻の前に敵はいなかった。吾妻は笑っていた。彼の微笑みは残忍かつ愉快そうで、それを見て勇気づけられる者もいたし、恐れる者もいた。

この中で一番実力があるのは仮面の連中だと吾妻はわかっていたが、武闘派の殺戮隊もなかなか怖い。

もつとも、吾妻はまともに相手をする気なんてなかった。後は部下に任せる。吾妻は後方支援に回った。力を溜めて、強力な衝撃波を周囲に放つ。味方も敵もないと思うような大規模な衝撃だが、吾妻はちゃんと狙いを絞っていた。その一撃で数十人の能力者が倒れた。

爆破の成瀬も前衛で飛ばしていた。衝撃波を放つ。放つ。彼が放つたびに近くにいた弱い能力者は死ぬ。

他にも吾妻の部下が百面団や黒夜叉団と戦っていた。

革命連は裏切りを見せ始めた。革命連のトップは事実上明野昇という男だが、彼は元々、吾妻達と同じような考えを持っている連中で、得体の知れない百面団達との付き合いは形の上だけだった。吾妻と明野はすでに協定を結んでいて、このアクションは予定されていたことだった。これにより、状況は少し変わっていく。

そして極めつけとも言える存在がいた——〈闇月〉それに闇使いの中に枝？ 憐華の姿もあった。

〈闇月〉の伊藤は大通りにはいなく、路地裏に出没した増援をたった一人で相手していた。彼は一人だったが、やがて吾妻たちの仲間も伊藤の支援をするが、一人でも問題ないように見えた。

伊藤は一瞬で相手の懐に達し、相手が認識するより早く斬り殺してしまう。だがそんな伊藤の攻撃を刀で防いだ者がいた。

伊藤は疑問に思い、後退した。その男には見覚えがあった。

「久しぶりだ、伊藤。覚えてるだろ？」

「風見か」

風見廉太郎。確か元々影狩り仲間で、そして影狩りと敵対する勢力にまわった男。一度戦い、顔を深く斬ったことがあった。その後がまざまざと残っている。見るからに痛々しそうだ。

「随分いい男になったな」

「抜かしてろ」

風見は衝撃波を放ち、それから伊藤のように素早く動いた。伊藤は彼の攻撃を難なく刀で防ぐ。

「昔のよしみだ。ここから立ち去れ」

「嘘付け。刀をしまえば俺を斬るくせに。また顔に傷を付けて今度はバッテン印にでもしようってのか？」

伊藤は口笛を吹きたくなった。なかなかこちらの性格をわかっているようだ。

空を見る。月が出ていた。腕時計に見える時刻は九時を五分過ぎたばかりで、仮にこれから夜の支配者のような〈影〉を相手が投入してきたとしても、まだまだ本領を出す時間にはならない。

「どこみてやがる」

相手は衝撃波を放ち、伊藤は吹き飛ぶが全くの無傷だ。

後方から現れたのは〈光剣〉の三井里奈。彼女の二の腕はほっそりとしているのだが、光を放つ剣は極太だった。

伊藤は衝撃波で彼女をはじき飛ばしたが、彼女はそれを捌き、伊藤に剣を振るった。

伊藤は躲すしかなかった。〈光剣〉を受けると刀など簡単に折れてしまうし、全力の防壁でも防ぎきれるかどうかわからない。そんな恐ろしい？力？が彼女の気圧でできた剣に溢れている。

伊藤は彼女を蹴り飛ばした。なるべく道の向こう、遠くに蹴り飛ばす。彼女のことだから戻ってくるだろう。敵対して以来、あれにずっと悩まされている。見た目はスポーティな女性だし、若く、すらっとしているが、こちらを斬り殺すことしか考えていないのだ

から話にならない。

背後から風見が剣を大きく振るってくる。隙だらけだったので伊藤はそのまま背中越しに刀で相手の剣を受けた。

しかし伊藤はもう一人の敵が迫ってくることに気付き、すぐに跳躍し、ビルの屋上に立った。三人も屋上までついてきた。

「死んで貰うぜ」強気な発言だが、風見は明らかに緊張しているようだった。

風見、三井、そして横下愁。こいつもそれなりの使い手だ。衝撃砲の命中精度がずば抜けているという厄介なもので、影狩りも彼に殺された者がいるという。

伊藤は瞬間的に戦い方を考え、一番弱い相手から狙うことにした。まずは風見。瞬時に間合いを詰め、衝撃波を放ち、一度ビルの下に落とす。あっけなく成功する。

それから、横下だ。すかした顔をした若者で、まだ年は二十三くらいだろうか。天才といわれた男だが、伊藤は彼をあっけなく沈めた。衝撃砲は恐ろしいが、撃たれる前にやればいい。だがさすがは天才。すぐに起き上がり、伊藤に重力圧を掛けてきた。伊藤にはこれを機にすぐに三井が光剣を振るってくるだろうことは予想できた。三井の動きを衝撃波で封じる。それから伊藤は衝撃波を体に受けた。次食らうと体にダメージを食らう。伊藤はすぐに対処した。横下に重力圧を逆に放ち、自分に対する重力圧を相殺させた。そして一瞬で横下を斬り捨てる。横下の胸から血が迸る。横下は血溜まりの中に崩れ落ちた。

三井の顔が引きつっている。伊藤にはわかっている。光剣は必殺の威力の武器だが、あれを絶えず放出させているというのは常に最大の力を外に出しているようなものだ。せいぜい二分程度しか持たないのだ。

伊藤は三井を衝撃波ではね飛ばし、ビルの外に落とした。おそらくもう戻ってこないだろう。

風見が戻ってきたが、伊藤はぎょっとした顔をしている風見の顔

に×印の傷を付け、再びビルの外に蹴り落とした。

伊藤は急に飽きてしまった。百面団との戦いもこの先続くだろうし、ここで終わると思えない。比較的楽しい戦いではあったし、ここで退散することにした。

しかし、ふと思い直した。枝？憐華などの闇使い、〈魔術師〉も集っているようだ。ならばそれをビルの上から見物するのも悪くないかもしれない。ビルを破壊する〈暴凶星〉の技も祭にはふさわしい華やかさがある。

伊藤は高い場所を探し、戦いの見物と決め込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2047x/>

影狩り？

2011年11月14日03時17分発行